

鳥取福蔵寺遺跡

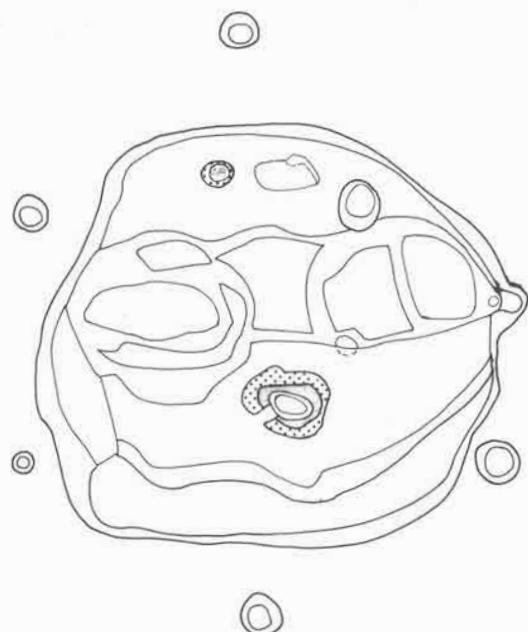
鳥取町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

1997

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

鳥取福蔵寺遺跡

鳥取町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書



A-3区精鍊鍛冶炉

1997

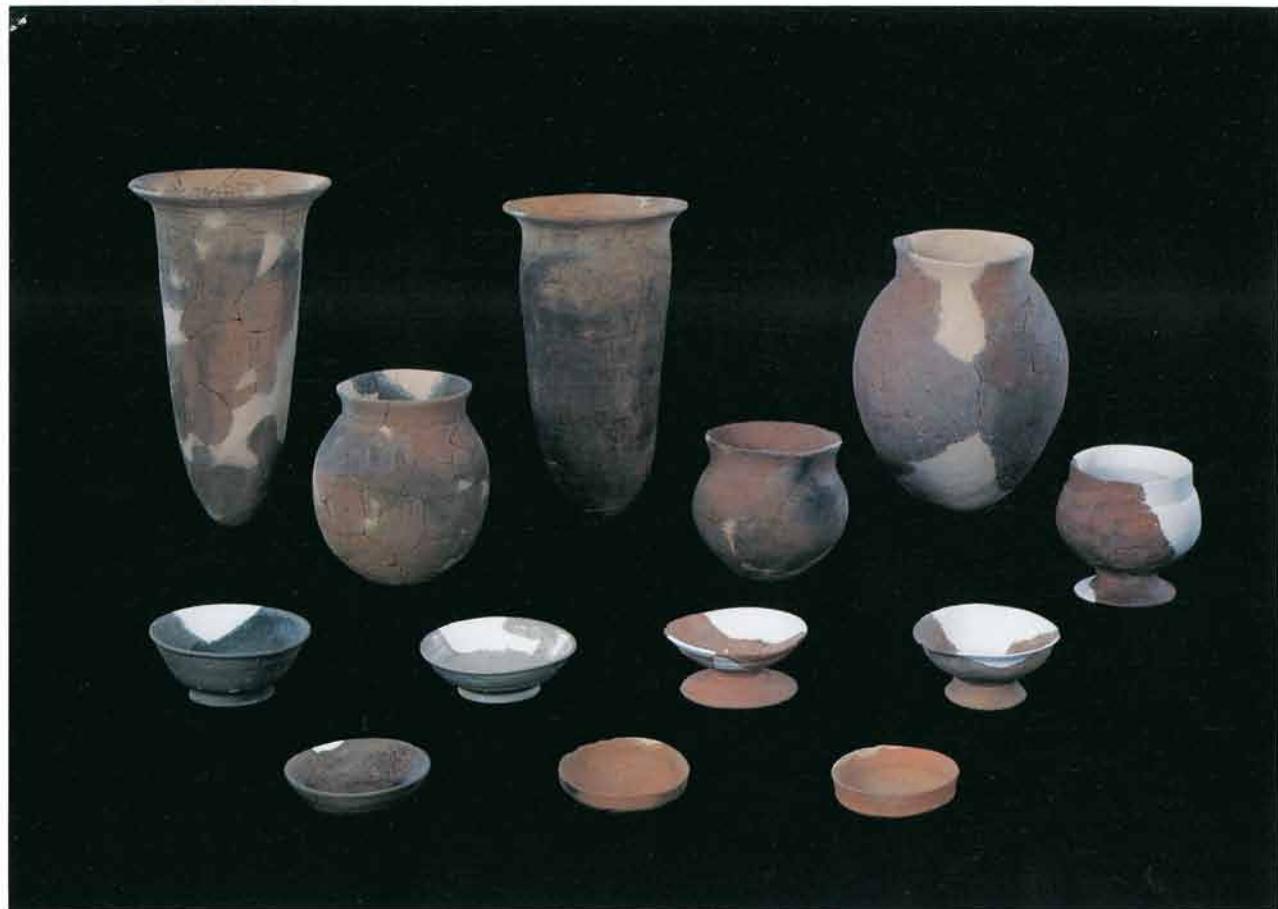
前橋市埋蔵文化財発掘調査団



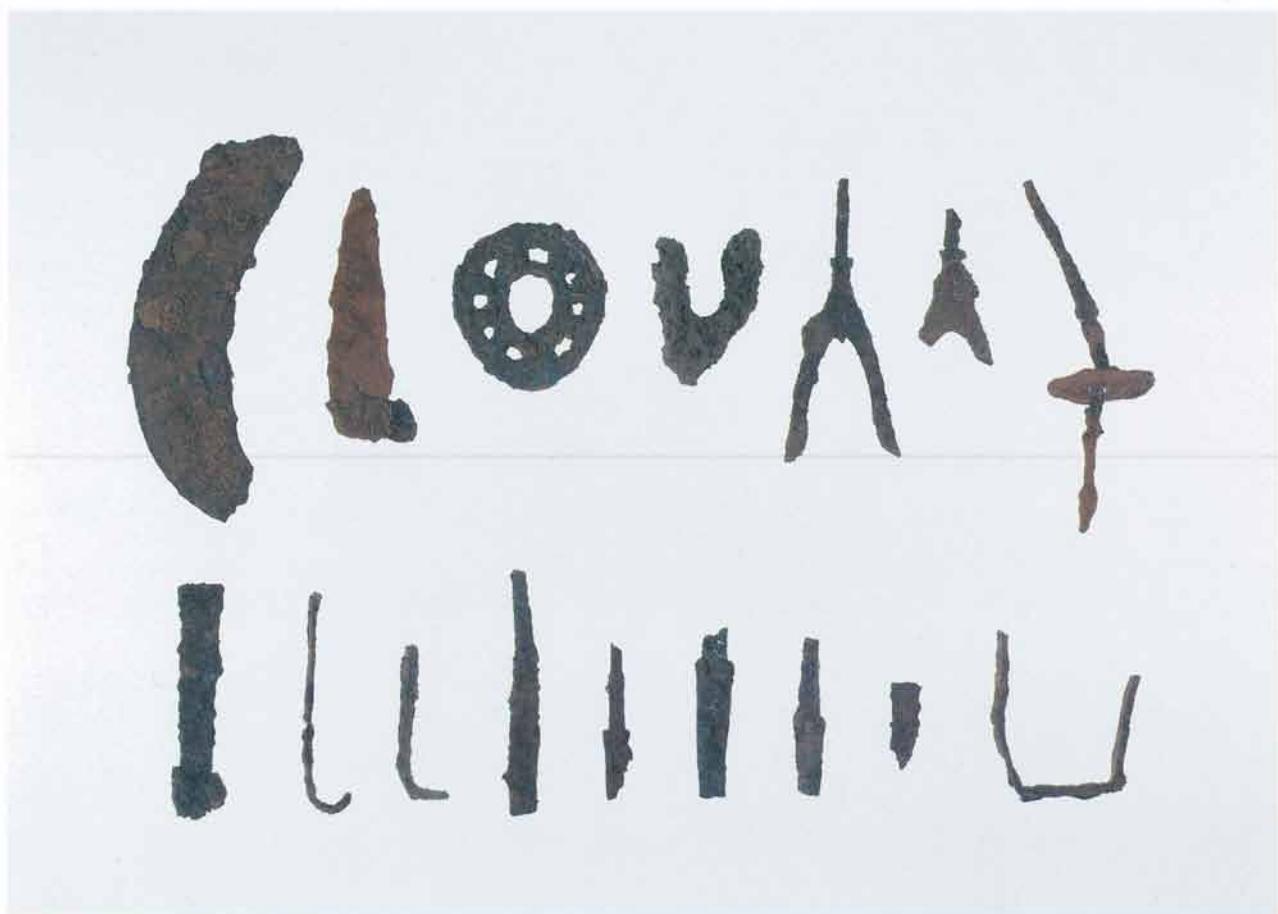
1. 鳥取福藏寺遺跡全景



2. 鳥取福藏寺遺跡出土土器



3. 鳥取福藏寺遺跡出土土器



4. 鳥取福藏寺遺跡出土鐵製品

はじめに

赤城山の裾野が緩やかに南に伸び、関東平野に移行しています。その少し手前の小高い地に鳥取福蔵寺遺跡は位置しています。赤城山を背景に前面に旧利根川の河原と前橋市街地を望める当時の等地です。北には芳賀北部団地遺跡、芳賀東部団地遺跡、西には芳賀西部団地遺跡と奈良・平安時代の大集落が存在しています。東には奈良・平安期の遺物が認められる五代の広い遺物包含層が認められます。そんな奈良・平安期の集落跡の一端に鳥取福蔵寺遺跡があります。

地名の桂萱、勝沢、川の名の藤沢川等から考えますと、平安時代の「和名類聚抄」に記述されている勢多郡の郷名の桂萱の郷、藤沢の郷の名が脳裏をよぎります。

そんな地に、土地改良事業が行われることになり、それに先立って発掘調査を行いました。

従前の周辺発掘調査により大集落の存在が期待出来ますし、桂萱、藤沢の郷名から鳥取福蔵寺遺跡の性格の確定も予想できます。広い視野で鳥取福蔵寺遺跡を見てみる必要があり期待をもって発掘調査を行いました。

道路幅の細長い調査面積ではありますが、多くの遺構が発見されました。その数は、縄文住居址2、7世紀後半から11世紀の住居址41、縄文の落込み2、土坑83（縄文6、古墳1、平安1、中世から近世1、不明74）、中世の井戸址2、中世の掘建柱遺構1が発見されました。

とくに2次製鉄を思わせる鍛冶屋跡の出土と鏃等の鉄製品も見られ、集落の中の鍛冶屋の存在が掴めました。また、斜面を切り取った地表に建設した中世掘建柱遺構の珍しい建設方法の確認もできました。

郷を表す直接的な物的発見はありませんでしたが、貴重な資料の発見があったと思っています。一読いただき、ご指導・ご助言をいただければ幸いです。

平成10年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団

団長 中西誠一

例　　言

1. 本報告書は、鳥取町土地改良事業に伴う鳥取福蔵寺遺跡発掘調査報告書である。

2. 本遺跡は、群馬県前橋市鳥取町590他に所在する。

3. 調査主体は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団である。

4. 発掘調査担当及び調査期間は次のとおりである。

発掘・整理担当者 坂口好孝・眞塩明男（前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係員）

発掘調査期間 平成9年10月1日～平成9年12月25日

整理・報告書作成期間 平成10年1月6日～平成10年3月31日

5. 本書の原稿執筆・編集は坂口・眞塩が行った。なお、VIまとめの「精練鍛冶炉遺構について」、「中近世の遺構・出土遺物について」は、井上唯雄（前橋市教育委員会文化財保護課埋蔵文化財係発掘調査指導員）が原稿執筆、それ以外は坂口があたった。

6. 発掘調査・整理作業にかかわった方々は次のとおりである。

赤石忠彦	赤城美代子	石原義夫	岩木佳代	岩木操	岩田敏子	内田カホル
生形かほる	大賀良助	大塚美智子	荻原末松	鬼塚成子	岸フクエ	桜井れい
佐藤作子	佐藤治吉	佐野貴恵子	柴崎まさ子	下田正衛	渡木秋子	戸丸澄江
中澤光江	樋高紀美子	平林クニ子	平林しのぶ	平林タカ	平林貞子	深沢由紀子
船津明美	松田富美子	湯浅たま江	湯浅道子	八木原喜太郎	綿貫綾子	

7. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡　　例

1. 挿図中に使用した北は、座標北である。

2. 握図に建設省国土地理院発行の1/5万地形図（前橋）と1/2,500地形図（前橋）を使用した。

3. 本遺跡の略称は、9C17である。

4. 各遺構及び遺構施設の略称は、次のとおりである。

J…縄文時代の住居址 H…古墳・奈良・平安時代の住居址

D…土坑 O…落込み I…井戸址 P…柱穴・貯蔵穴

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構 住居址・土坑・落込み・井戸址…1/60 爐・竈断面図…1/30

中世遺構群…1/100

遺物 土器…1/3・1/4 石器・石製品…1/3・1/4 鉄器・鉄製品…1/3・1/4

6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図 粘土…斑

遺構断面図 火山灰…濃点、構築面…斜線

遺物実測図 施釉範囲…あられ、黒色処理…網、炭化物（スス付着等）…斑

須恵器断面…黒塗り、灰釉陶器断面…濃点、擦痕…淡点

―― 目 次 ――

はじめに	1
I 調査に至る経緯	1
II 遺跡の位置と環境	
1 遺跡の位置	1
2 歴史的環境	3
III 調査の経過	
1 調査方針	5
2 調査経過	6
IV 層序	7
V 遺構と遺物	
1 住居址	8
2 土坑	15
3 落込み	16
4 井戸址	17
VI まとめ	21

図 版

- 口絵 1 烏取福藏寺遺跡全景
2 烏取福藏寺遺跡出土土器

- 3 烏取福藏寺遺跡出土土器
4 烏取福藏寺遺跡出土鉄製品

P L. 1 調査区全景	PL. 14 H-15~18号住居址出土の土器
2 B-1区全景、住居址 (H-1, 2, 4, 20)	15 H-17~20, 22, 24, 27号住居址出土の土器
3 H-7全景、住居址 (H-2, 6, 7, 8, 22)、O-1	16 H-27, 28, 32~37号住居址出土の土器
4 A-2区全景、住居址 (H-9, 12, 13)、O-2	17 H-37~39号住居址出土の土器、D-78号土坑出土の土器、B-1区表探、H-1·26·28·41号住居址、A-3区、D-40、X29Y91出土の特殊遺物、縄文式土器 (J-1)
5 H-15竪全景、住居址 (H-15, 16)	18 H-4·17·18·33·37号住居址出土の土器、H-37号住居址出土の特殊遺物、縄文式土器 (J-1·2)
6 H-17全景、住居址 (H-17)	19 縄文式土器
7 A-3区全景、住居址 (H-16, 17, 18)、D-44·73	20 石器・石製品
8 表土掘削前、トレンチ深堀り、住居址 (H-10, 24, 25, 26, 27, 29)	
9 H-34遺物出土状態、住居址 (H-28, 32, 33, 34)	
10 住居址 (H-13, 33, 34, 38)	
11 H-37全景、住居址 (H-37)	
12 J-1·2、D-78、鉄分凝集層、発掘を終えて	
13 H-1~5、8~13、15号住居址出土の土器	

挿 図

	頁		頁
Fig. 1 烏取福藏寺遺跡の位置	vi	Fig. 17 H-7, 23, 40, 41号住居址 D-8, 32号土坑	44
2 烏取福藏寺遺跡周辺図	2	18 O-1号落込み I-1, 2号井戸址	
3 発掘区位置図	4	D-1, 2, 3, 4, 5, 7, 9, 10, 82号土坑	45
4 グリッド設定図	5	19 B-1区ピット群	46
5 調査経過図	6	20 A-2区 H-9, 11号住居址	47
6 標準土層図	7	21 H-12, 13号住居址 D-41, 42, 46号土坑	48
7 遺跡地形図	21	22 H-14, 15号住居址	49
8 遺構分布図 (B-1区)	23	23 H-16, 17号住居址	50
9 遺構分布図 (A-2区)	24	24 H-18, 19号住居址	
10 遺構分布図 (A-3区)	25	D-12, 16, 17, 44, 48, 73号土坑	51
11 遺跡・遺構全体図 (B-1区)	38	25 H-25, 26号住居址 0-2号落込み	
12 遺跡・遺構全体図 (A-2区)	39	D-38, 40, 50, 51, 52, 53, 54, 59号土坑	52
13 遺跡・遺構全体図 (A-3区)	40	26 H-10, 24, 27, 29号住居址	53
14 H-1, 2, 20, 22号住居址 D-81号土坑	41	27 H-28号住居址 D-77号土坑	54
15 H-3, 4, 5, 21号住居址 D-83号土坑	42	28 H-30, 31号住居址	55
16 H-6, 8号住居址		29 H-32, 33, 34号住居址	56
D-13, 14, 15, 18, 20, 21, 22号土坑	43	30 H-35, 36, 38, 39号住居址 D-78号土坑	57

頁	頁		
Fig. 31 H-37号住居址（精錬鍛冶炉） D-60、74号土坑	58	Fig. 38 H-20、22、24、27、28、32、33号住居址出土の 土器	65
32 J-1号住居址 D-75、76号土坑	59	39 H-33、34、35、36、37、38、39号住居址出土の土器 A-3区、B-1区、D-78号土坑出土の土器	66
33 J-2号住居址 D-19、25、27、33、34、37、55、56、71号土坑	60	40 縄文式土器（1）	67
34 B-1区中世掘立柱群、竪穴状遺構、井戸址	61	41 縄文式土器（2）	68
35 H-1、2、3、4、5、8、9、10、11、12、13号 住居址出土の土器	62	42 縄文式土器（3）	69
36 H-13、15、16、17号住居址出土の土器	63	43 石器・石製品・特殊遺物	70
37 H-17、18、19号住居址出土の土器	64	44 石器	71
		45 鉄製品	72

表

頁	頁		
Tab. 1 鳥取福蔵寺遺跡遺構一覧表	18	4 鉄器・鉄製品観察表	34
2 土坑、落込、井戸址一覧表	19~20	5 石器・石製品・特殊遺物観察表	35
3 土器観察表	32~34	6 縄文式土器	36~37

調査参加者 赤石忠彦 赤城美代子 石原義夫 岩木佳代 岩木操 岩田敏子 内田カホル
 生形かほる 大賀良助 大塚美智子 萩原末松 鬼塚成子 岸フクエ 桜井れい
 佐藤作子 佐藤治吉 佐野貴恵子 柴崎まさ子 下田正衛 渡木秋子 戸丸澄江
 中澤光江 樋高紀美子 平林クニ子 平林しのぶ 平林タカ 平林貞子 深沢由紀子
 船津明美 松田富美子 湯浅たま江 湯浅道子 八木原喜太郎 綿貫綾子

調査協力 前橋市鳥取土地改良事業共同施行 前橋市農政部農村整備課
 井上測量株式会社 (有)丹生サーヴェイ 宮下工業株式会社
 サノヤ産業株式会社 篠原設備工業株式会社 株式会社 前橋大気堂
 株式会社 フジテクノ たつみ写真スタジオ 株式会社 開文社印刷所
 加藤市郎 平林大典 (敬称略)

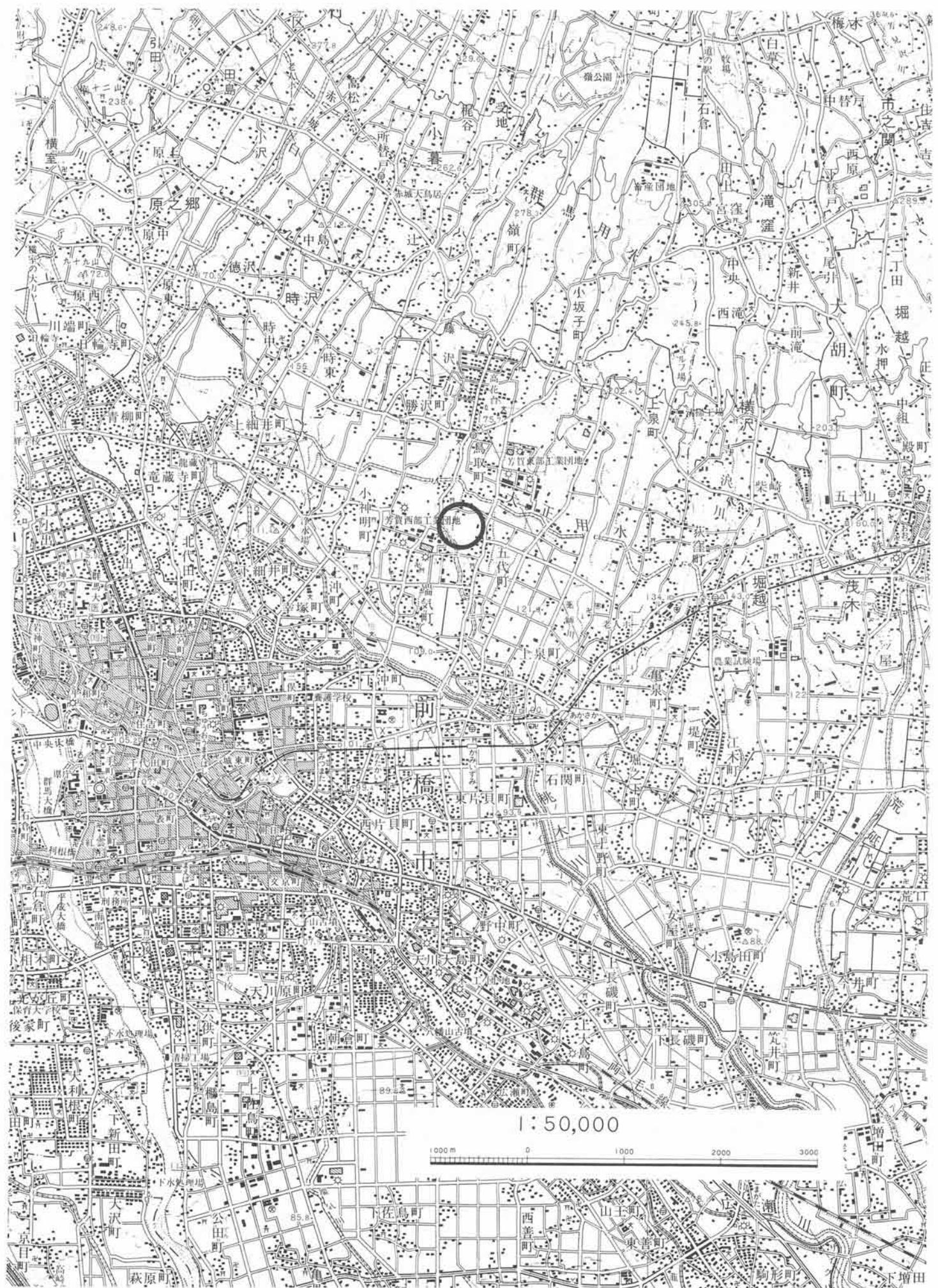


Fig. 1 烏取福藏寺遺跡の位置

I 調査に至る経緯

鳥取福蔵寺遺跡は、鳥取町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として、平成9年10月から12月にかけて実施された。発掘調査に至る経緯は以下のとおりである。

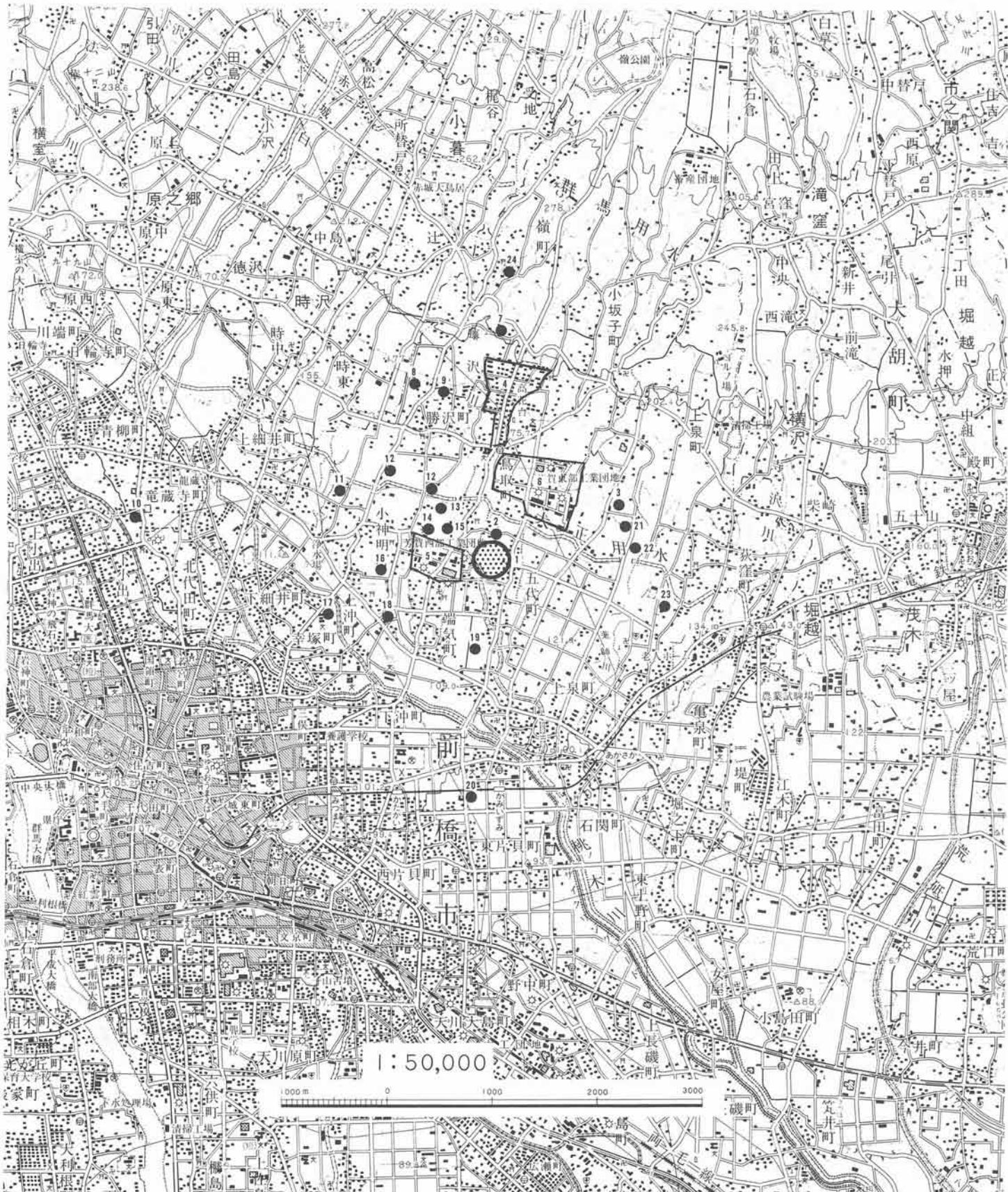
本遺跡の発掘調査は、前橋市鳥取町を対象とした土地改良事業実施に伴い行われた。平成9年3月26日付で鳥取土地改良事業共同施行（委員長 平林克巳）より鳥取町の土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査依頼が前橋市教育委員会に提出された。これを受け前橋市教育委員会文化財保護課が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団（団長 中西誠一）との間で協議・調整を行い、平成9年9月8日に両者の間で本発掘調査の委託契約が締結され、10月3日に現地での発掘調査を開始した。実施方法は、平成元年4月3日付締結の前橋工業団地造成組合と前橋市埋蔵文化財発掘調査団が取り交わした埋蔵文化財に関する覚書に準拠する。遺跡名称は『鳥取福蔵寺遺跡』とし、遺跡略称は9C17とした。なお、遺跡名称の『福蔵寺』は旧地籍の小字名を採用している。

II 遺跡の位置と環境

1. 遺跡の位置

鳥取福蔵寺遺跡は、前橋市街地から北東へ約4.5kmの鳥取町590番地他に所在する。遺跡地の前橋市鳥取町は、昭和29年に前橋市に合併されたもので、それまでは勢多郡芳賀村字鳥取であった。旧芳賀村は赤城南麓にあって、南北に細長い三角形状を呈している。頂点に当たる北端は標高620m、底辺に当たる南端は旧利根川の河川敷とされる沖積地で、その標高は110m、平均斜度は約5/100である。本遺跡地は、赤城火山斜面と呼ばれる赤城山の裾野に属する傾斜地上にある。赤城火山斜面は台地上の地形であり、ところどころの山麓に源を発する中小の河川が南流し部分的に開析谷を形成している。したがって舌状台地上では水に乏しく、主に桑畑等が広がり、小河川により形成された谷地では、狭隘ではあるが水田が営まれている。そして、この斜面の末端部は比高差10m前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地に接している。本遺跡から南へ約1km下った県道前橋今井線付近（端氣町）がこれに当たり、ここから南に関東平野が広がっている。

周辺は、台地部を中心に遺跡の濃密分布地域で、市内でも大規模な芳賀北部・西部・東部団地遺跡が指呼の間にあり、縄文、古墳、歴史時代の遺構多数を検出した。また、奈良三彩小壺を出土した桧峯遺跡、中近世の嶺城跡なども含んで、古くから人々の生活の舞台となってきた地域であることが知れる。

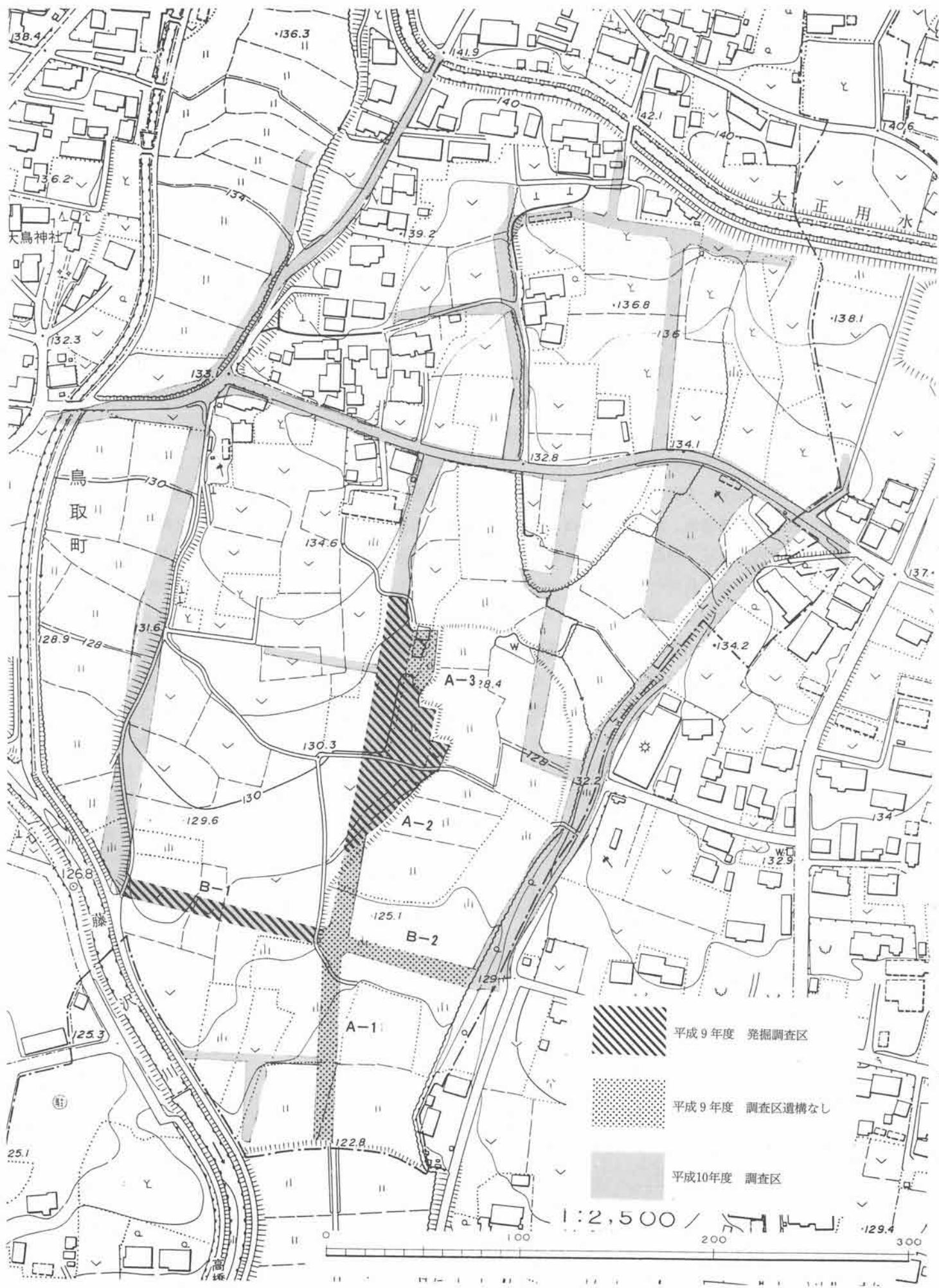


- | | | |
|-------------|------------------|------------------|
| 1. 鳥取福藏寺遺跡 | 9. オブ塚古墳 | 17. 西新井遺跡 |
| 2. 鳥取東原遺跡 | 10. 青柳寄居遺跡 | 18. 端氣遺跡群 I , II |
| 3. 五代桧峯II遺跡 | 11. 南田之口遺跡 | 19. 大日塚古墳 |
| 4. 芳賀北部団地遺跡 | 12. 小明神遺跡群 (2カ所) | 20. 茶木田遺跡 |
| 5. 芳賀西部団地遺跡 | 13. 九料遺跡 | 21. 檜峯遺跡 |
| 6. 芳賀東部団地遺跡 | 14. 倉本遺跡 | 22. 檜峯古墳 |
| 7. 東公団古墳 | 15. 西田遺跡 | 23. 新田塚古墳 |
| 8. オブ塚西古墳 | 16. 大明神遺跡 | 24. 嶺城跡 |

Fig. 2 鳥取福藏寺遺跡周辺図

2. 歴史的環境

赤城山の南斜面の台地では、掘れば必ずと言ってよいほど遺跡にぶつかる文化財の宝庫と言われている。昭和10年、県下一斎に行われた古墳調査において芳賀地区では64基の古墳があるとされ、赤城山南麓では旧荒砥村、粕川村、旧桂萱村について古墳の多いところとされている。しかし、昭和50年、芳賀西部団地遺跡（芳賀団地遺跡群）の調査では記載漏れの古墳が31基も確認されたほか西田遺跡（小明神遺跡群Ⅱ；鳥取町）、嶺町東公田地内にもあり、これらの古墳を併せると芳賀地区には実に100基もの古墳が存在することになる。また、芳賀地区は、昭和40年代後半から昭和50年代前半にかけて実施された芳賀遺跡群の発掘調査によって、縄文時代から近世に至るまで、ほぼ各時代の遺構が多数確認されたところである。周辺図をみても分かることおり、この時実施された芳賀団地遺跡群（芳賀北部団地遺跡、芳賀東部団地遺跡、芳賀西部団地遺跡）の発掘調査は芳賀地区の中心部40万m²を全面的に掘り返すものであり、前橋の発掘史のなかでも特筆されるものであった。ここでは、この昭和48年から昭和55年に及ぶ芳賀団地遺跡群の発掘調査を中心に、その後現在まで行われてきた中小の発掘の成果をふまえながら同地区の歴史を概観してみたい。まず、芳賀団地遺跡群の概略であるが、芳賀北部団地遺跡（調査面積約6.1ヘクタール；現在の芳賀団地、高花台）では、奈良・平安時代の竪穴住居址231軒を始め、縄文時代前・中期の竪穴住居址、中期の敷石住居址、および中世の勝沢城址の一部が検出された。芳賀東部団地遺跡（調査面積約33ヘクタール）では、北部団地と同じく、奈良・平安時代の竪穴住居址420軒、掘立柱建物跡が194軒も検出されたのを始め、縄文時代前期の竪穴住居址39軒、後期の敷石住居址6軒等が検出された。芳賀西部団地遺跡（調査面積約2.5ヘクタール）からは縄文時代前期の竪穴住居址、埴輪棺等も検出されたが、古墳総覧記載漏れの古墳31基の集中が見られたところに特徴がある。また、もっとも最近の調査では、平成9年に鳥取東原遺跡、芳賀東部団地遺跡の発掘調査が行われた。両調査区ともに調査面積は非常にせまく東原で約690m²、東部団地で約620m²であった。出土した主な遺構は、東原で5世紀終末～6世紀初頭の住居址1軒、江戸前期と推定される墓坑1基、土坑6基であった。また、東部団地では9世紀前半の住居址2軒、住居址を切ってはいるが詳細な時代は出土遺物もないことから不明の溝1条、掘立柱状遺構と風倒木による落ち込み3基が確認された。



III 調査経過

1 調査方針

委託された調査箇所は幅8mの計画道路部分、切り土部分を中心とした約5,000m²である。調査範囲の形状から全体をA-2区、A-3区、B-1区の3調査区に区分した。なお、A-1区、B-2区についてはトレーニング調査の結果、谷地となっており遺構なしと判断した。その結果、発掘調査面積は約3,500m²となった。実施に際しては、まず2年間の発掘調査範囲の全域をカバーする4mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向をY軸とし、北から南へY1、Y2、Y3・・・、東西方向をX軸とし西から東へX1、X2、X3・・・で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

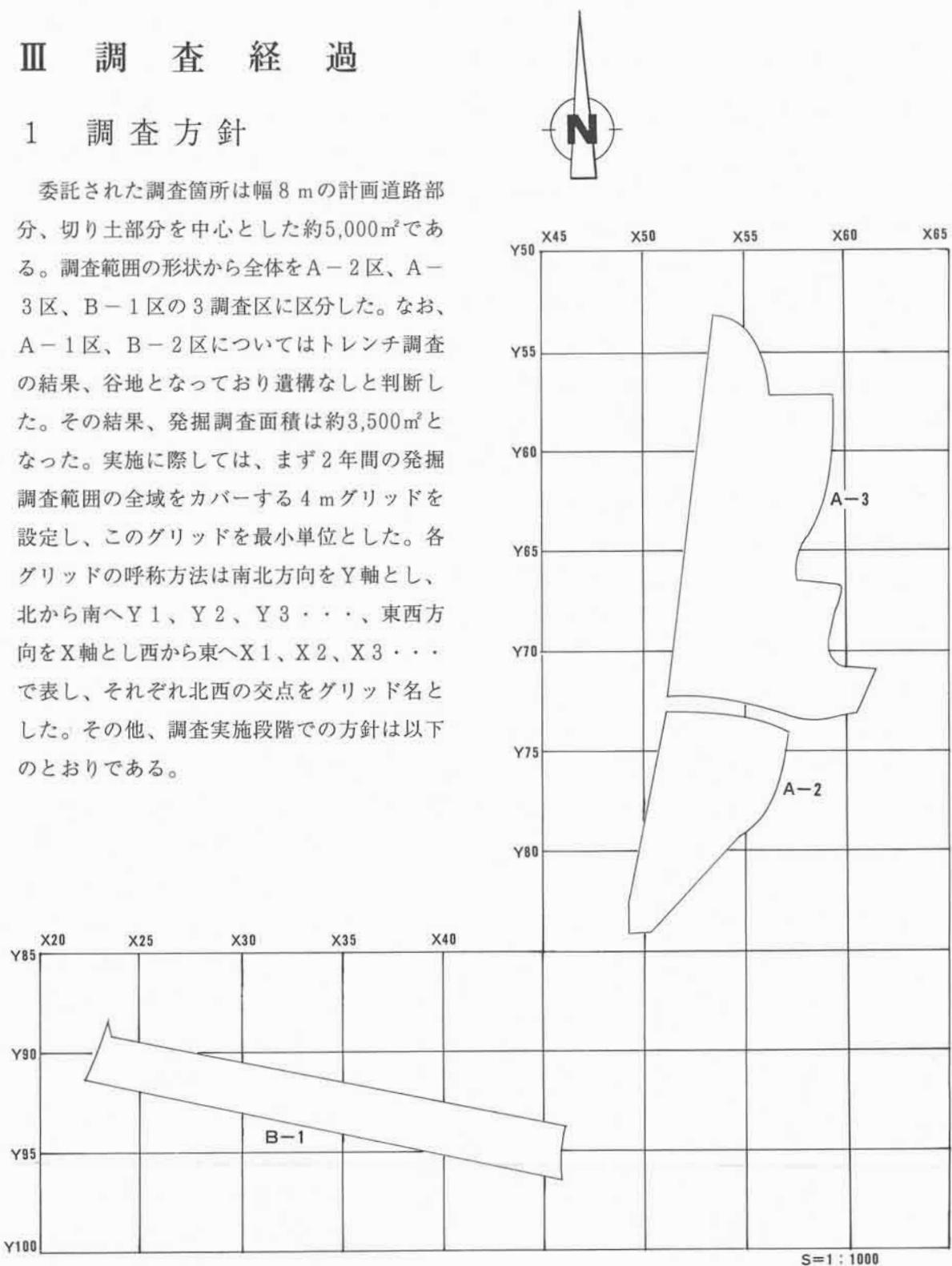


Fig. 4 グリット設定図

1. 土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションベルトを設けて行う。
 2. 10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。
 3. 竪は原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。
- なお、今年度の測量の基準点はX54、Y75グリッドで公共座標は第IX系（X=+45,900m、Y=-64,984m）である。

2 調査経過

2年計画の1年目にあたる本年度の現地発掘調査は、委託契約の締結後の10月3日より開始した。まず、今年度の調査対象地区の杭を打つために見通しが効くように桑や竹・篠などの雑木林を整理することから始まった。6日、調査区が広大なため、重機（バックフォー 0.4m^3 ）を2台に増やし1台が整理、1台が表土掘削することにした。杭打ち後、B-1区西側より重機（バックフォー 0.4m^3 ）による表土掘削、それに追従してのプラン確認に取り掛かった。B-1区の中央部分で1mほどの段差があることが判明、東に傾斜していた。8日、A-1、B-2区は掘削中暗渠排水管を検出し、地層から原地形が谷地であることがわかった。湧水し水がたまってしまい、遺構も確認できないことから危険防止のため急遽埋め戻した。14日までにA-2区の掘削を終了、遺構面まで北・西側は浅く、南・東側は深い南と東に傾斜する舌状台地の先端であることがわかった。15日、B-1区西側から調査を開始した。21日、地元の芳賀小学校6年生120名が来て、地層・遺構・出土遺物などを見学していった。23日、B-1区の調査を進めながら、並行してA-2区に入る。28日、B-1区を完了。11月6日、A-3区内に残っていた建物が撤去されたので、重機を入れA-3区全体の表土掘削を開始し、プラン確認をした。A-2区と同様に東側に傾斜する地形であり、最東端では湧水した。西側の浅い方では、耕作によると思われる搅乱が多数検出された。12日、A-2区の調査を完了、A-3区に入った。住居址は複雑に重複し確認が困難であった。調査開始から11月上旬まで真夏日で非常に暑く、また、中旬まで降雨が全くない106年ぶりの記録的な少雨であり、乾燥した砂ぼこりとの戦いであった。下旬からは、から風・低温の真冬日が続き調査区全体が霜柱に覆われ、これを取り除いてからの作業は困難を極め、大幅に効率が落ちた。調査終了まで毎日この霜柱は、頭を悩ませた。11月中でかなり天候

が変化した。なお、雨の日は室内で遺物洗浄作業をした。12月9日、精練鍛冶炉の調査を慎重に開始。15日、B-1区の掘建柱遺構を開始し、周辺の竪穴状遺構、井戸址、地形等との関係を考えながら調査した。同時に写真撮影のため調査区の清掃を開始した。18日、天候に恵まれ風もなく予定通りにRCヘリコプターで調査区全体撮影した。22日にはすべての遺構の精査、遺跡全体測量を実施した。すべての作業を終了した25日、現地発掘調査を完了した。翌年1月に調査区域をセスナで空撮を行い、2月に埋め戻しを完了した。整理作業は1月6日から3月31日まで文化財保護課城南収蔵庫で行い、すべての作業を完成させる運びとなった。

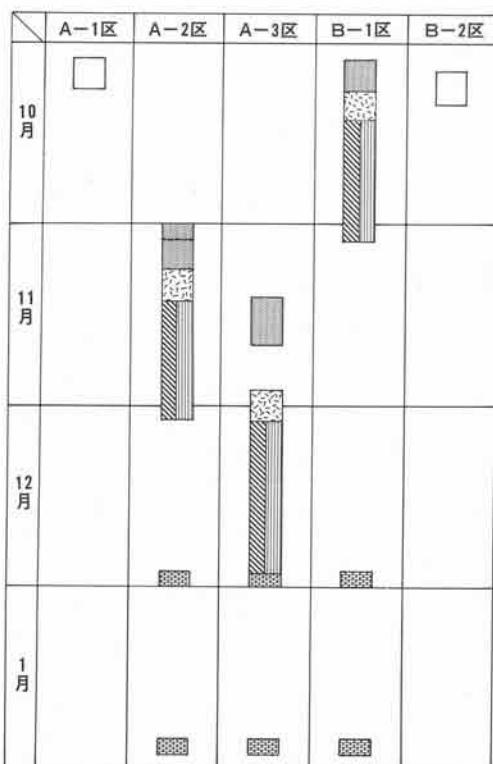


Fig. 5 調査経過図

IV 基本層序

本遺跡地内の地層の堆積はFig. 6 のとおりである。



Fig. 6 標準土層図

今回調査区東隅と西隅に土層観察用の深堀を入れ、基本層序を確認した。そして調査区の西側では表土層（耕作土）下30cm程度でローム層を切り込む遺構が検出されるのに対して、東側では表土層とローム層の間に30cm~40cm程度のAs-C（浅間起源：4世紀前半）、F軽石（榛名起源：6世紀）混土層が認められ、本遺跡の旧地形は北西から南東にかけてやや下がりぎみに傾斜していたことも判明した。なお調査区A-1区、B-2区 (Fig. 4 参照) についてはトレンチの結果、B軽石（浅間起源：1108年）の純層が所々確認され、さらにその下には一部As-C混土層、黒褐色系のしまりのない川砂層（所々明褐色に酸化した川砂含む）と続き、遺構掘り込み基盤にあたるローム漸移層、ローム層の確認はできなかった。水田としての畦畔もみられないことから、遺構なしと判断した。

V 遺構と遺物

本年度の調査区から検出された遺構は、竪穴住居址41軒、土坑83基、落込み2基、井戸2基、掘建柱遺構1棟である。時期的にも、縄文時代の竪穴住居址から中世の掘建柱遺構までと幅広い範囲に及んでいる。そのほとんどが、粘性・しまりの弱い褐色ロームを掘り込む形で構築されているうえに、ある程度の場所にかたまって存在し、重複しながら検出されたため、確認に苦労しながらの調査となった。B-1区では14軒が西側・中央部・東側の3カ所に分散しており、中央部と東側の間には中世の遺構群が並ぶ。A-2区では10軒が南北に並ぶように存在する。A-3区では19軒が南北に長い調査区の南半分に集中し、鍛冶炉が最北端に位置する。なお、A-2区・A-3区は台地状地形の東端にあり、東に向かって傾斜している。住居址は、台地上と傾斜はじめめる部分に集まる傾向がうかがえた。

遺構数が多いことから、すべての遺構を図示するとともに住居址一覧表（Tab. 1）と土坑・落込み・井戸址一覧表（Tab. 2）にまとめた。

1. 住居址

J-1号住居址（A-3区、Fig. 32・40・41、PL. 12・17・18）

（形状）隅丸不整形。（床面）平坦で堅緻。（炉）中央南寄りに位置する。長径74cm、短径60cmを測る。（貯蔵穴・柱穴）8基検出。P₁ (60×55×28.5cm)、P₂ (50×38×40cm)、P₃ (75×60×54.5cm)、P₄ (52×45×49cm)、P₅ (48×36×19cm)、P₆ (40×36×47.5cm)、P₇ (57×50×53.5cm)、P₈ (56×49×42cm)。（重複）H-28・D-77と重複し、構築順は本遺構→H-28→D-77である。（遺物）総数1,101点。黒曜石34点・石器39点。（備考）出土遺物などから本住居址は縄文時代前期と思われる。

J-2号住居址（A-3区、Fig. 33・41、PL. 12・18）

（形状）隅丸方形。（床面）平坦で堅緻。（柱穴）6基検出。P₁ (37×28×21cm)、P₂ (38×33×22cm)、P₃ (40×37×11cm)、P₄ (34×31×13cm)、P₅ (38×34×32cm)、P₆ (33×31×14cm)。（重複）H-27・H-28と重複し、構築順は本遺構→H-28→H-27である。（遺物）遺物総数33点。石器5点。中央部やや西寄りに埋甕を確認。（備考）出土遺物などから本住居址は縄文時代前期と思われる。

H-1号住居址（B-1区、Fig. 14・35、PL. 2・13・17）

（形状）方形と思われる。H-20と重複し、北側は調査区外となっていて範囲不明。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄に位置し、全長78cm、焚口部幅34cmを測る。右袖に凝灰岩の袖石。（貯蔵穴・柱穴）調査範囲内で2基検出。P₁ (40×40×29cm)、P₂ (100×44×29cm)。（重複）H-20と重複しており、構築順は本遺構の方が先である。（遺物）総数348点。黒曜石1点・陶磁器1点・石器1点・P₂から真鑑の銘帶（巡方）1点を出土。（備考）出土遺物などから本住居址は9世紀前半と思われる。

H-2号住居址（B-1区、Fig. 14・35、PL. 2・3・13）

（形状）方形と思われる。H-22と重複し、北側は調査区外となっていて範囲不明。（床面）平坦で堅緻。（竈）南壁西寄りに位置し、全長100cm、焚口部幅23cmを測る。（重複）H-22・D-81と重複しており、構築順は本遺構→H-22→D-81である。（遺物）総数462点。灰釉陶器1点・倒卵型の鍔1点・石器3点。（備考）出土遺物などから本住居址は8世紀前半と思われる。

H-3号住居址（B-1区、Fig. 15・35、PL. 13）

（形状）方形と思われる。北側は調査区外となっていて範囲不明。（床面）平坦で柔らかい。

（柱穴）調査範囲内で4基を検出。P₁（24×20×20cm）、P₂（30×24×19cm）、P₃（26×20×20cm）、P₄（21×18×24cm）。（遺物）総数138点。灰釉陶器1点・羽釜2点・陶磁器3点。

（備考）出土遺物などから本住居址は9世紀中頃と思われる。

H-4号住居址（B-1区、Fig. 15・35、PL. 2・13・18）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄りに位置し、全長76cm、焚口部幅43cmを測る。両袖に袖石有り。（貯蔵穴・柱穴）調査範囲内で3基検出。P₁（35×26×10.5cm）、P₂（37×31×7.5cm）、P₃（98×70×22cm）。（遺物）総数547点。（備考）周溝有り。出土遺物などから本住居址は8世紀中頃と思われる。

H-5号住居址（B-1区、Fig. 15・35、PL. 13）

（形状）方形と思われる。南側は調査区外となっていて範囲不明。（床面）平坦で堅緻。（竈）東辺ほぼ中央で全長108cm、焚口部幅36cmを測る。（重複）H-21と重複しており、構築順はH-21の方が先である。（遺物）総数238点。鎌1点・石器1点。（備考）出土遺物などから本住居址は8世紀中頃と思われる。

H-6号住居址（B-1区、Fig. 16、PL. 3）

（形状）正方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南隅に位置し、全長46cm、焚口部幅26cmを測る。左袖に2つの自然石、焚口中央部に支脚。（柱穴）調査範囲内で3基検出。P₁（57×47×28cm）、P₂（42×37×47cm）、P₃（34×27×37.5cm）。（重複）D-15と重複し、構築順はD-15の方が先である。（遺物）総数284点。羽釜1点・陶磁器2点。（備考）周溝有り。出土遺物などから本住居址は9世紀末頃と思われる。

H-7号住居址（B-1区、Fig. 17、PL. 3）

（形状）正方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄りに位置し、全長67cm、焚口部幅32cmを測る。（貯蔵穴・柱穴）調査範囲内で11基検出。P₁（24×21×11cm）、P₂（50×23×14cm）、P₃（22×18×12cm）、P₄（26×20×8cm）、P₅（82×50×15cm）、P₆（28×16×9cm）、P₇（42×20×28cm）、P₈（23×22×30cm）、P₉（27×20×20cm）、P₁₀（27×24×23cm）、P₁₁（31×22×25cm）。（重複）H-8・H-23・D-8と重複し、構築順はH-23→H-8・D-8→本遺構である。（遺物）総数38点。（備考）周溝有り。出土遺物などから本住居址は9世紀後半と思われる。

H-8号住居址（B-1区、Fig. 16・35、PL. 3・13）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄りに位置し、全長85cm、焚口部幅36cmを測る。両袖に凝灰岩の袖石有り。（柱穴）調査範囲内で6基検出。P₁（40×27×30cm）、P₂（36×28×31cm）、P₃（62×54×41cm）、P₄（38×32×46cm）、P₅（52×42×21.5cm）、P₆（28×26×6cm）。（重複）H-7・H-23と重複し、構築順はH-23→本遺構→H-7である。（遺物）総数146点。羽釜1点・土錘1点・石器1点。（備考）出土遺物などから本住居址は9世紀前半と思われる。

H-9号住居址（A-2区、Fig. 20・35、PL. 4・13）

（形状）方形と思われる。西側は調査区外となっていて範囲不明。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁ほぼ中央に位置し、全長58cm、焚口部幅17cmを測る。（柱穴）調査範囲内で2基検出。P₁（38×35×31.5cm）、P₂（55×42×40cm）。（重複）D-12と重複し、本遺構の方が先である。（遺物）総数497点。（備考）周溝有り。出土遺物などから本住居址は9世紀中頃と思われる。

H-10号住居址（A-3区、Fig. 26・35、PL. 8・13）

（形状）正方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄りに位置し、全長72cm、焚口部幅48cmを測る。袖に石を使用している。（重複）H-24、H-29と重複し、構築順はH-24→本遺構→H-29の順である。（遺物）総数153点。灰釉陶器5点・羽釜3点・鉄器3点・雁又型の鉄鏃1点・石器3点。（備考）竈直線延長上に土坑有りP₁（114×87×67.5cm）。住居内にカクラン有り。出土遺物などから本住居址は10世紀末頃と思われる。

H-11号住居址（A-2区、Fig. 20・35、PL. 13）

（形状）方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南隅に位置し、全長100cm、焚口部幅40cmを測る。右袖に凝灰岩の袖石2点・支脚1点。（貯蔵穴・柱穴）1基検出。P₁（58×44×45cm）、灰が2cm程度敷き詰められていた。（重複）H-12と重複し、構築順はH-12の方が先である。（遺物）総数530点。灰釉陶器8点・羽釜2点・陶磁器2点・石器1点・鉄滓1.3kg。（備考）周溝有り。出土遺物から本住居址は9世紀末頃と思われる。

H-12号住居址（A-2区、Fig. 21・35、PL. 4・13）

（形状）正方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁中央に位置し、全長90cm、焚口部幅34cmを測る。（貯蔵穴・柱穴）調査範囲内で5基検出。P₁（46×44×70cm）、P₂（40×32×57cm）、P₃（31×28×64cm）、P₄（42×33×53cm）、P₅（102×70×77cm）。（重複）H-11、H-14、H-19と重複し、構築順はH-19→H-14→本遺構→H-11である。（遺物）総数636点。陶磁器1点・鉄器1点・石器1点。（備考）周溝有り。出土遺物などから本住居址は7世紀中頃と思われる。

H-13号住居址（A-2区、Fig. 21・35、PL. 4・10・13）

（形状）正方形。（床面）平坦で堅緻。（竈）東壁南寄りに位置し、全長72cm、焚口部幅29cmを測る。（貯蔵穴・柱穴）調査範囲内で5基検出。P₁（24×20×15cm）、P₂（26×24×18cm）、P₃（36×34×23cm）、P₄（28×27×23cm）、P₅（46×42×20.5cm）。（遺物）総数333点。灰釉

陶器1点・羽釜3点。(備考)周溝有り。出土遺物などから本住居址は9世紀中頃と思われる。

H-14号住居址 (A-2区、Fig. 22)

(形状)正方形と思われる。(床面)平坦。(竈)東壁南寄りに位置し、全長66cm、焚口部幅42cmを測る。(重複)H-12・H-19と重複し、構築順はH-19→本遺構→H-12である。(遺物)総数229点。陶磁器2点・石器1点・鉄滓0.5kg。(備考)住居内にカクラン有り。出土遺物などから本住居址は8世紀中頃と思われる。

H-15号住居址 (A-2区、Fig. 22・36、PL. 5・13)

(形状)正方形。(床面)平坦で堅緻。(竈)東壁中央に位置し、全長98cm、焚口部幅26cmを測る。両袖・天井を長胴甕で補強、左袖は口縁部上向き、右袖は口縁部下向き。支脚有り。(柱穴)調査範囲内で10基検出。P₁ (27×25×30cm)、P₂ (28×20×40cm)、P₃ (25×20×17.5cm)、P₄ (34×26×36.5cm)、P₅ (54×(29)×20.5cm)、P₆ ((16)×(8)×25cm)、P₇ (28×22×40cm)、P₈ (23×16×18.5cm)、P₉ (22×18×15.5cm)、P₁₀ (20×17×15cm)。(遺物)総数807点。灰釉陶器1点・砥石1点・石器6点。(備考)周溝有り。出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-16号住居址 (A-2区、Fig. 23・36、PL. 5・7・14)

(形状)正方形。(床面)平坦で堅緻。(竈)東壁中央に位置し、全長110cm、焚口部幅36cmを測る。(貯蔵穴・柱穴)調査範囲内で6基検出。P₁ (48×43×38cm)、P₂ (44×44×21cm)、P₃ (46×36×41cm)、P₄ (44×38×35cm)、P₅ (66×54×72cm)、P₆ (112×107×30cm)。(重複)H-17と重複し、H-17の方が先である。(遺物)総数577点。陶磁器1点。(備考)周溝有り。出土遺物などから本住居址は7世紀中頃と思われる。

H-17号住居址 (A-2区、Fig. 23・36・37、PL. 6・7・14・15・18)

(形状)正方形。(床面)平坦で堅緻。(竈)東壁南寄りに位置し、全長95cm、焚口部幅40cmを測る。右袖を自然石、左袖・天井を数個の長胴甕を粘土で補強。(貯蔵穴・柱穴)5基検出。P₁ (33×26×27cm)、P₂ (24×21×33cm)、P₃ (28×20×24cm)、P₄ (26×21×21cm)、P₅ (60×36×78cm)。(重複)H-16と重複し、構築順は本遺構の方が先である。(遺物)総数817点。鉄器刃子1点・石器2点。(備考)周溝有り。大小炭化物を大量に検出、火災住居と考えられる。出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-18号住居址 (A-2区、Fig. 24・37、PL. 7・14・15・18)

(形状)正方形。(床面)平坦で堅緻。(竈)東壁中央に位置し、全長92cm、焚口部幅46cmを測る。(貯蔵穴・柱穴)調査範囲内で2基検出。P₁ (32×22×6cm)、P₂ (58×43×54cm)。(遺物)総数273点。陶磁器1点。(備考)周溝有り。出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-19号住居址 (A-2区、Fig. 24・37、PL. 15)

(形状)正方形。(床面)平坦で堅緻。(竈)東壁中央に位置し、全長51cm、焚口部幅57cmを測

る。(柱穴) 小差範囲内で 1 基検出。P₁ (20×18×12.5cm)。(重複) H-12・H-14と重複し、構築順は本遺構→H-14→H-12である。(遺物) 総数139点。(備考) 周溝有り。出土遺物などから本住居址は 9 世紀中頃と思われる。

H-20号住居址 (B-1 区、Fig. 14・38、PL. 2・15)

(形状) 方形と思われる。北側は調査区外となつていて範囲不明。(床面) 平坦で堅緻。(重複) H-1 と重複し、構築順は H-1 の方が先である。(遺物) 総数10点。黒曜石 1 点。(備考) 出土遺物などから本住居址は 9 世紀中頃と思われる。

H-21号住居址 (B-1 区、Fig. 15)

(形状) 方形と思われる。遺構中央部に H-5 が重複し、南側は調査区外となつていて範囲不明。(床面) 平坦で堅緻。(重複) H-5・D-83と重複しており、構築順は H-5 → 本遺構 → D-83 の順である。(遺物) 総数15点。(備考) 周溝有り。出土遺物などから本住居址は 8 世紀前半と思われる。

H-22号住居址 (B-1 区、Fig. 14・38、PL. 15)

(形状) 方形と思われる。H-2 と重複、床面が浅く北側大部分が調査区外のため範囲不明。

(竈) 南壁に位置し、焼土や粘土が極少量残存。(遺物) 総数147点。羽釜 1 点・石器 2 点。(備考) 出土遺物などから本住居址は 8 世紀中頃と思われる。

H-23号住居址 (B-1 区、Fig. 17)

(形状) 方形と思われる。南側の大部分を H-7 と D-8、東側を H-8 と重複しているため範囲不明。(床面) 平坦で堅緻。(竈) H-7 の竈の上に重なるように多量の焼土を検出、H-23 の竈と推測できる。(柱穴) 調査範囲内で 4 基検出。P₁ (60×52×29cm)、P₂ (70×61×30cm)、P₃ (32×25×21cm)、P₄ (40×23×9 cm)。(重複) H-7・H-8・D-8 と重複しており、本遺構 → D-8・H-8 → H-7 である。(遺物) 総数 4 点。(備考) 床面のみの残存。出土遺物も少なく本住居址の時代は不明。

H-24号住居址 (A-3 区、Fig. 26・38、PL. 8・15)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南寄りに位置し、全長72cm、焚口部幅22cm を測る。(貯蔵穴・柱穴) 調査範囲内で 2 基検出。P₁ (58×56×26.5cm)、P₂ (58×49×11.5cm)。

(重複) H-10・H-29と重複しており、構築順は H-29 → H-10 → 本遺構である。(遺物) 総数159点。羽釜 1 点・石器 1 点。(備考) 周溝有り。出土遺物などから本住居址は 10 世紀末頃と思われる。

H-25号住居址 (A-3 区、Fig. 25、PL. 8)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南隅に位置し、全長45cm、焚口部幅26cm を測る。竈上部は削られており、下の部分しか残存しない。(重複) H-26・H-29と重複し、構築順は H-29 → H-26 → 本遺構である。(遺物) 総数84点。灰釉陶器 3 点・羽釜 1 点。(備考) 竈直線延長上で土坑 1 基検出 (52×33×37.5cm)。入り口施設と思われる場所に盛土がしてあり、

非常に堅緻である。出土遺物などから本住居址は11世紀前半と思われる。

H-26号住居址 (A-3区、Fig. 25、PL. 8・17)

(形状) 方形と思われる。北・西壁が一部残る。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南寄りに位置しているが、計測不能。カクランにより上部が削られ、底部に焼土が極少量残るのみ。(貯蔵穴・柱穴) 1基検出。P₁ (96×70×19.5cm)。(重複) H-25・H-29と重複しており、構築順はH-29→本遺構→H-25である。(遺物) 総数41点。羽釜1点・石器3点。(備考) 確認範囲で周溝有り。出土遺物などから本住居址は10世紀末頃と思われる。

H-27号住居址 (A-3区、Fig. 26・38、PL. 8・15・16)

(形状) 方形。(床面) 平坦。(竈) 東壁中央に位置し、全長73cm、焚口部幅52cmを測る。(重複) H-28と重複し、構築順はH-28の方が先である。(遺物) 総数338点。黒曜石1点・灰釉陶器1点。(備考) 周溝有り。床一面に炭があり、柱と思われる大型炭化物も残存。出土遺物などから本住居址は9世紀中頃と思われる。

H-28号住居址 (A-3区、Fig. 27・38、PL. 9・16・17)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁中央に位置し、全長124cm、焚口部幅58cmを測る。(柱穴) 調査範囲内で7基検出。P₁ (41×38×79cm)、P₂ (39×36×78.5cm)、P₃ (39×30×68cm)、P₄ (53×49×90cm)、P₅ (71×50×92cm)、P₆ (46×36×36cm)、P₇ (54×48×13.5cm)。(重複) J-2・H-27と重複し、構築順はJ-2→本遺構→H-27である。(遺物) 総数523点。羽釜1点・砥石1点・陶磁器1点・刃子1点・石器2点。(備考) 周溝有り。北東・南西の角にそれぞれ8点・5点のたわら石を出土。出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-29号住居址 (A-3区、Fig. 26、PL. 8)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南寄りに位置しているが、計測不能。H-25床面に焼土が、H-29の床面左袖と思われる場所2か所に白色粘土が残存。(重複) H-10・H-24・H-25・H-26と重複し、構築順は本遺構→H-10・H-26→H-24・H-25である。(遺物) 総数6点。鎌1点・石器1点。(備考) 出土遺物などから本住居址は10世紀後半と思われる。

H-30号住居址 (A-3区、Fig. 28)

(形状) 正方形。(床面) 平坦でやや柔らか。(竈) 東壁南寄りに位置し、全長95cm、焚口部幅47cmを測る。左袖に凝灰岩が、移動したと思われる袖石が左右袖延長上に1個ずつ出土。(貯蔵穴・柱穴) 住居北西隅P₁ (92×80×21cm)と竈右側P₃ (82×54×23cm)に検出。(遺物) 総数224点。(備考) 住居中央に土坑P₂ (124×100×30.5cm)があるが、別の時代に構築されたと考えられる。出土遺物などから本住居址は10世紀末頃と思われる。

H-31号住居址 (A-3区、Fig. 28)

(形状) 正方形。(床面) 凹凸あり、柔らかい。(竈) 東壁南寄りに位置し、全長40cm、焚口部幅36cmを測る。(貯蔵穴・柱穴) 調査範囲内に2基検出。P₁ (32×29×27cm)、P₂ (84×77×

25.5cm)。(遺物) 総数78点。灰釉陶器5点・陶磁器1点。(備考) 住居の中央部を南北にカクランが入る。出土遺物などから本住居址は10世紀後半と思われる。

H-32号住居址 (A-3区、Fig. 29・38、PL. 9・16)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁中央に位置し、全長52cm、焚口部幅35cmを測る。(貯蔵穴・柱穴) 調査範囲内に3基検出。P₁ (32×30×39cm)、P₂ (28×22×10cm)、P₃ (38×37×43.5cm)。(重複) H-33と重複し、構築順はH-33の方が先である。(遺物) 総数116点。灰釉陶器2点・陶磁器1点。(備考) 竈直線延長上に土坑P₄ (76×74×32cm)、底に焼土が残る。出土遺物などから本住居址は9世紀前半と思われる。

H-33号住居址 (A-3区、Fig. 29・38・39、PL. 9・10・16・18)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南隅に位置し、全長70cm、焚口部幅48cmを測る。(貯蔵穴) 竈右側に検出。60×38×56.5cm。(重複) H-32と重複し、構築順は本遺構の方が先である。(遺物) 総数45点。灰釉陶器1点。(備考) 出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-34号住居址 (A-3区、Fig. 29・39、PL. 9・10・16)

(形状) 正方形と思われる。床面まで浅く、東側は壁の立上がりを確認できず。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 西壁中央に位置し、全長61cm、焚口部幅40cmを測る。両袖を長胴甕で補強、支脚を有す。(貯蔵穴・柱穴) P₁ (60×50×11cm)、P₂ (59×50×24cm)。(遺物) 総数268点。黒曜石1点。灰釉陶器2点・石器1点。(備考) 竈直線延長上に土坑1基検出P₃ (116×84×38cm)。出土遺物などから本住居址は7世紀末頃と思われる。

H-35号住居址 (A-3区、Fig. 30・39、PL. 16)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁に焼土を検出したが、大部分が調査区外のため計測不能。(貯蔵穴・柱穴) P₁ (61×48×48cm)、P₂ (94×72×45.5cm)。(遺物) 総数119点。灰釉陶器4点・羽釜2点・石器3点。(備考) 出土遺物などから本住居址は10世紀後半と思われる。

H-36号住居址 (A-3区、Fig. 30・39、PL. 16)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で堅緻。(竈) 東壁南隅に位置し、全長70cm、焚口部幅28cmを測る。(貯蔵穴・柱穴) P₁ (97×93×34cm)、P₂ (44×30×54cm)。(遺物) 総数4点。石器1点。(備考) 出土遺物などから本住居址は10世紀末頃と思われる。

H-37号住居址 (A-3区、Fig. 31・39、PL. 11・16・17・18)

精練鍛冶炉。(形状) 楕円形。(遺物) 総数345点。羽口94点・鉗1点・陶磁器1点・椀状滓3点・鉄滓総量38kg。(備考) 遺構内に廃棄土坑が数回にわたって掘り込まれている。壁外に6基の柱穴を検出。出土遺物などから本遺構は9世紀中頃と思われる。

H-38号住居址 (A-3区、Fig. 30・39、PL. 10・17)

(形状) 方形と思われる。西側が調査区外のため範囲不明。(床面) 平坦。(竈) 東壁南寄りに位置しているが、廃棄土坑により壊されて僅かに焼土を残すのみ。(貯蔵穴・柱穴) 廃棄土坑を含め10基確認。P₁ (112×76×27.5cm)、P₂ (78×54×39.5cm)、P₃ (90×68×17cm)、P₄ (76×58×29cm)、P₅ (110×82×32.5cm)、P₆ (114×96×52cm)、P₇ (80×74×30.5cm)、P₈ (75×68×20cm)、P₉ (50×50×34cm)、P₁₀ (66×35×52.5cm)。(遺物) 総数528点。黒曜石1点・灰釉陶器20点・羽釜60点。(備考) 廃棄土坑から遺物を多数出土。出土遺物などから本住居址は10世紀末頃と思われる。

H-39号住居址 (A-3区、Fig. 30・39、PL. 17)

(竈) 調査区内に竈のみ確認。確認範囲で全長52cm、焚口部幅25cmを測る。(遺物) 総数137点。灰釉陶器1点・羽釜15点・陶磁器1点。(備考) 住居の主体は西側の調査区外にあると考えられる。出土遺物などから本住居址は10世紀前半～中頃と思われる。

H-40号住居址 (B-1区、Fig. 17)

(形状) 方形と思われる。住居北側が調査区外のため範囲不明。(床面) 平坦で堅緻。(柱穴) 調査範囲内で1基検出。P₁ (35×28×29cm)。(重複) H-41と重複し、構築順は本遺構の方が先である。(遺物) 総数23点。黒曜石の鏃1点。(備考) 出土遺物などからは本住居址の時代を確認することができなかった。

H-41号住居址 (B-1区、Fig. 17、PL. 17)

(形状) 方形。(床面) 平坦で堅緻。(重複) H-40と重複し、構築順はH-40の方が先である。(遺物) 総数64点。土錘1点。(備考) 中世の竪穴状遺構と思われる。出土遺物などから本住居址は17世紀と思われる。

2. 土 坑

D-7号土坑 (B-1区、Fig. 18)

B-1区西側で検出。形状は楕円形を呈し、1段下がって底部が円形になる。遺物総数87点。縄文土器破片、石器を出土。 ϕ 5～20cm程度の焼痕が残る自然石を多数検出した集石遺構。構築時期は縄文時代と思われる。

D-17号土坑 (A-2区、Fig. 24)

A-2区北側で検出。形状は円形を呈する。遺物総数7点。灰釉陶器1点出土。構築時期は不明。

D-38号土坑 (A-2区、Fig. 25)

A-2区中央部で検出。形状は南北1.58m・東西0.64mの隅丸長方形を呈し、D-40と重複する。底部を除き焼土と炭化物が残り、焼土坑と思われる。墓址の可能性も考えられる。構築時期は不明である。

D-40号土坑 (A-2区、Fig. 25、PL. 17)

A-2区中央部で検出。形状は円形を呈し、D-38と重複する。遺物総数2点。転用土器紡錘車・石器を出土。構築時期は不明。

D-44号土坑 (A-2区、Fig. 24、PL. 7)

A-2区中央西側で検出。形状は楕円形を呈し、1段下がって底部になる。遺物総数7点。轔の羽口・砥石・鉄滓出土。鍛造の際のチップを大量に確認した。鍛治工房などの廃棄土坑を思われる。構築時期は不明である。

D-73号土坑 (A-2区、Fig. 24、PL. 7・17)

A-2区中央東側で検出。掘り方は、長径0.94×短径0.90×深さ14.0の円形状を測る。土坑中央部に甕が埋められていたと推測できるが、底部のみの出土である。甕の下には炭化物が混ざる。遺物総数54点。出土遺物などから縄文時代と思われる。

D-74号土坑 (A-3区、Fig. 31)

A-3区中央南側で検出。形状は楕円形を呈する。遺物総数63点。円筒埴輪3点・羽釜2点を出土。構築時期は不明。

D-75号土坑 (A-3区、Fig. 32)

A-3区中央部で検出。形状は楕円形を呈する。遺物総数11点。埴輪2点・石器4点を出土。その他、自然石を多数確認した。集石土坑と思われる。構築時期は不明。

D-77号土坑 (A-3区、Fig. 27)

A-3区中央南側で検出。形状は円形を呈し、J-1・H-28と重複する。遺物総数3点。羽釜・円筒埴輪を出土。構築時期は出土遺物などから平安時代と思われる。

D-78号土坑 (A-3区、Fig. 30・39、PL. 12・17)

A-3区北側で検出。形状は円形を呈する。遺物総数18点。遺物は土師器甕であり、廃棄土坑と思われる。構築時期は出土遺物などから古墳時代と思われる。

D-81号土坑 (B-1区、Fig. 14)

B-1区西側で検出。H-2と重複し、構築時期はH-2の方が先である。楕円形を呈する。遺物総数26点。分胴形打製石斧を出土。焼土が多量に残り、焼土坑と思われる。構築時期は不明。

3. 落込み

O-1号落込み (B-1区、Fig. 18、PL. 3)

B-1区西側で検出。形状は円形。規模は3.16m×2.96m、深さ124.5cmを測る。摺鉢状に狭まりながら深くなり、底面は円形で非常に堅緻であり、落とし穴と思われる。遺物総数84点。縄文式土器破片75点。石器2点を出土。構築時期は、出土遺物などから縄文時代と思われる。

O-2号落込み (A-2区、Fig. 25、PL. 4)

A-2区南側で検出。規模は1.75m×1.54m、深さ119.5cmを測る。形状は上部が円形で、底部は狭まりながら長方形になる。落とし穴と思われる。掘り下げ途中に水が湧き出てきたので底部の杭等の確認はできなかった。遺物は縄文土器の破片を5点出土。構築時期は、出土遺物などから縄文時代と思われる。

4. 井 戸 址

I-1号井戸址 (B-1区、Fig. 18)

B-1区中央部で検出。規模0.83m×0.81m、深さは確認可能範囲で1.93mを測る。ローム層を掘り込み構築されている。遺構面での形状は円形で、円柱状に深くなる。深さは、水が湧いたために確認範囲の値である。遺物はなし。構築時期は周辺遺構との関係などから、中世と思われる。

I-2号井戸址 (B-1区、Fig. 18)

B-1区中央部で検出。規模1.20m×0.88m、深さは確認可能範囲で1.85mを測る。ローム層を掘り込み構築されている。遺構面での形状は楕円形である。自然石と土砂が詰め込まれており、深さは確認範囲の値である。 ϕ 10~40cm程度の自然石と土砂で大量に埋まっており、井戸を廃棄の際に詰めたものと思われる。また、8基の柱穴が確認されており、屋根状の施設があったと推測できる。遺物総数59点。構築時期は、本遺構の付随施設や出土遺物、周辺遺構などの関係から中世と思われる。

Tab. 1 烏取福蔵寺遺跡遺構一覧表

住居址一覧表

遺構名(調査区)	位 置	規模(m)東西×南北	面積(m ²)	壁 高	主軸方向	竪	遺 物	時 期	Fig.
J-1(A-3)	X55~57, Y68~69	7.70 × 5.80	36.10	103.0cm	N-68°-E	——	H-28、D-77と重複。	縄文前期	32
J-2(A-3)	X55~56, Y66~67	(5.94) × 5.08	(29.30)	56.0cm	N-86°-E	——	H-27、H-28と重複。	縄文前期	33
H-1(B-1)	X21~22, Y89~90	3.18 × 3.74	(10.24)	13.0cm	N-113°-E	東辺南寄	竪右袖に凝灰岩の袖石。真鏡の銅帯(巡方)。H-20と重複。	9 C 前	14
H-2(B-1)	X23~25, Y89~90	5.27 × (1.33)	(5.60)	47.0cm	N-169°-W	南辺西寄	倒卵型の鍔。H-22、D-81と重複。	8 C 前	14
H-3(B-1)	X38~40, Y93~94	4.52 × (4.40)	(10.36)	26.0cm	N-60°-E	——		9 C 中	15
H-4(B-1)	X29~30, Y91~92	3.21 × 4.38	12.80	28.0cm	N-84°-E	東辺南寄	周溝。竪に両袖に袖石有り。	8 C 中	15
H-5(B-1)	X29~30, Y92~93	2.60 × (2.40)	(5.25)	41.0cm	N-106°-E	東 辺	H-21と重複。	8 C 中	15
H-6(B-1)	X31~32, Y92~93	3.08 × 3.06	8.32	21.5cm	N-91°-E	東辺南隅	周溝。支脚。竪の右袖に袖石2点。D-15と重複。	9 C 末	16
H-7(B-1)	X39~40, Y94~95	3.74 × 3.72	12.31	37.0cm	N-72°-E	東辺南寄	周溝。H-8、H-23、D-8と重複。	9 C 後	17
H-8(B-1)	X40~41, Y93~94	3.34 × 3.42	(9.68)	18.0cm	N-113°-E	東辺南寄	H-7、H-23と重複。	9 C 前	16
H-9(A-2)	X49~50, Y80~81	(4.04) × 5.80	(20.44)	56.0cm	N-70°-E	東辺中央	周溝。D-12と重複。	9 C 中	20
H-10(A-3)	X54~55, Y71~72	3.67 × 3.92	(13.07)	30.0cm	N-105°-E	東辺南寄	周溝。竪長直線上に土坑。H-24、H-25と重複。カクラン有り。墨又型の鉢。	10 C 末	26
H-11(A-2)	X50~51, Y78~79	3.00 × 4.40	12.16	45.0cm	N-93°-E	東辺南隅	周溝。竪右袖に凝灰岩が2点。支脚。竪延長上に土坑。H-12と重複。	9 C 末	20
H-12(A-2)	X51~57, Y77~79	5.48 × 5.70	28.71	41.0cm	N-76°-E	東辺中央	周溝。H-14、H-19と重複。	7 C 中	21
H-13(A-2)	X52~53, Y77~78	3.26 × 3.56	10.85	50.0cm	N-90°-E	東辺南寄	周溝。	9 C 中	21
H-14(A-2)	X51, Y77~78	(2.00) × (3.10)	(5.84)	26.0cm	N-86°-E	東辺南寄	H-12、H-19と重複。	8 C 中	22
H-15(A-2)	X54~55, Y75~76	4.67 × 4.60	19.79	82.5cm	N-45°-E	東辺中央	周溝。支脚。竪の両袖・天井を長胴壺で補強。	7 C 末	22
H-16(A-2)	X52~53, Y74~76	6.25 × 5.86	31.87	50.0cm	N-74°-E	東辺中央	周溝。H-17と重複。	7 C 中	23
H-17(A-2)	X52~53, Y74~75	3.90 × 3.95	13.53	41.0cm	N-81°-E	東辺南寄	周溝。竪右袖を石、左袖・天井を長胴壺で補強。H-16と重複。大量の炭化物	7 C 末	23
H-18(A-2)	X50~51, Y74~75	(4.00) × (4.00)	(11.86)	56.0cm	N-113°-E	東辺中央	周溝。	7 C 末	24
H-19(A-2)	X50~51, Y77~78	3.54 × 3.33	(9.90)	64.5cm	N-88°-E	東辺中央	周溝。H-12、H-14と重複。	9 C 中	24
H-20(B-1)	X21~22, Y89	(2.86) × (2.00)	(3.14)	20.0cm	N-70°-E	——	H-1と重複。	9 C 中	14
H-21(B-1)	X29~30, Y92~93	4.02 × (1.92)	(4.90)	22.0cm	N-87°-E	——	周溝。H-5、D-83と重複。	8 C 前	15
H-22(B-1)	X23~25, Y89~90	3.82 × (1.48)	4.26	47.0cm	N-163°-E	南 辺	H-2と重複。	8 C 中	14
H-23(B-1)	X39~40, Y93	(0.96) × (1.54)	(2.70)	30.0cm	N-10°-E	——	H-7、H-8、D-8と重複。床面のみ。	不 明	17
H-24(A-3)	X55~56, Y70~71	3.10 × 3.38	9.03	51.0cm	N-113°-E	東辺南隅	周溝。竪左に貯蔵穴。H-10、H-29と重複。	10 C 末	26
H-25(A-3)	X56, Y70~71	3.07 × 3.07	7.97	18.5cm	N-119°-E	東辺南隅	竪延長直線上に土坑。入り口施設有り。H-26、H-29と重複。	11 C 前	25
H-26(A-3)	X56~57, Y70~71	3.18 × (3.92)	(6.59)	26.0cm	N-94°-E	東辺南寄	周溝。カクラン有り。H-25、H-29と重複。	10 C 末	25
H-27(A-3)	X56~57, Y66~67	3.28 × 4.38	(13.61)	18.5cm	N-98°-E	東辺中央	周溝。H-28と重複。大型炭化物有り。	9 C 中	26
H-28(A-3)	X55~57, Y66~68	6.86 × 7.00	44.70	71.0cm	N-92°-E	東辺中央	J-2、H-27、D-77と重複。	7 C 末	27
H-29(A-3)	X55~56, Y70~71	3.26 × 3.74	(11.32)	36.5cm	N-102°-E	東辺南寄	H-10、H-24、H-25、H-26と重複。	10 C 後	26
H-30(A-3)	X56~57, Y64~65	3.12 × 3.32	10.30	48.0cm	N-102°-E	東辺南寄	鉄錐、刀子。竪左袖に凝灰岩、移動した袖石2点。	10 C 末	28
H-31(A-3)	X56~57, Y63~64	2.98 × 3.44	(9.81)	34.5cm	N-112°-E	東辺南寄	カクラン有り。鉄製品破片。	10 C 後	28
H-32(A-3)	X57~58, Y65~66	3.82 × 3.28	11.24	69.5cm	N-89°-E	東辺中央	竪延長直線上に土坑。H-33と重複。	9 C 前	29
H-33(A-3)	X57~58, Y64~65	3.60 × 2.84	(9.57)	64.5cm	N-99°-W	東辺南隅	瓶、壺。H-32と重複。	7 C 末	29
H-34(A-3)	X58~59, Y69~70	3.22 × 3.28	(9.97)	26.0cm	N-82°-W	西辺中央	支脚。竪延長直線上に土坑。竪の両袖を長胴壺で補強。	7 C 末	29
H-35(A-3)	X56, Y53~54	2.30 × 3.70	(8.62)	33.0cm	N-101°-E	東 辺	住居址中央に土坑。	10 C 後	30
H-36(A-3)	X56~57, Y52~53	3.03 × 3.74	(10.85)	41.0cm	N-92°-E	東辺南隅		10 C 末	30
H-37(A-3)	X54~55, Y54~55	3.40 × 3.20	9.97	25.0cm	N-92°-E	——	精練鍛冶炉。轆の羽口、鋸、鉄滓、鍛造チップ。	9 C 中	31
H-38(A-3)	X51~52, Y69~70	4.04 × 4.72	(16.28)	16.0cm	N-92°-E	東辺南寄	廃棄土坑8基。鉄製紡錘車。	10 C 末	30
H-39(A-3)	X51, Y70	————	(0.17)	—	N-104°-E	東 辺	調査区内に竪のみ検出。	10 C 前~中	30
H-40(B-1)	X31~32, Y91~92	(4.90) × (4.00)	(9.85)	47.5cm	N-37°-W	——	黒曜石の鏃。H-41と重複。	不 明	17
H-41(B-1)	X32~33, Y92~93	3.04 × 3.48	8.13	71.0cm	N-3°-E	——	中世の竪穴状遺構。H-40と重複。	17 C	17

Tab. 2 土坑・落込み・井戸址一覧表

遺構名(調査区)	位 置	規 模 (m)	深さ(cm)	形 状	重複・備考	時 期	Fig.
D-1 (B-1)	X-22~23, Y-90~91	1.09 × 1.02	12.0	円 形			18
D-2 (B-1)	X-23, Y-90~91	1.00 × 0.72	14.5	楕 円 形			18
D-3 (B-1)	X-25, Y-91	0.46 × 0.41	38.0	円 形			18
D-4 (B-1)	X-25, Y-91	0.48 × 0.43	31.0	円 形			18
D-5 (B-1)	X-26, Y-91	0.54 × 0.48	46.0	円 形	底3カ所深く落込む		18
D-6 (B-1)	X-28, Y-92	0.51 × 0.43	48.0	楕 円 形	D-9		—
D-7 (B-1)	X-27, Y-91~92	2.25 × 1.53	57.5	楕 円 形	集石土坑、石器	縄文時代	18
D-8 (B-1)	X-39, Y-94	(2.35) × 1.10	39.0	長 方 形	H-7、H-23、小穴が5つあく		17
D-9 (B-1)	X-27~28, Y-92	1.14 × (0.85)	19.0	円 形	D-6、D-82		18
D-10 (B-1)	X-28, Y-92	0.72 × 0.66	29.0	円 形			10
D-11 (B-1)	X-28, Y-92	0.68 × 0.54	36.0	円 形			—
D-12 (A-2)	X-50, Y-79~80	2.17 × 1.94	124.0	円 形	H-9、井戸か?	中世~近世	24
D-13 (B-1)	X-30, Y-92	0.50 × 0.42	29.0	円 形			16
D-14 (B-1)	X-30~31, Y-92	0.57 × 0.47	27.0	円 形			16
D-15 (B-1)	X-31, Y-92	1.38 × 1.10	28.5	楕 円 形	H-6		16
D-16 (A-1)	X-50~51, Y-83	1.28 × 0.52	31.0	楕 円 形		縄文時代	24
D-17 (A-2)	X-52, Y-73~74	0.62 × 0.58	21.0	円 形			24
D-18 (B-1)	X-31, Y-93	0.33 × 0.26	44.5	円 形			16
D-19 (A-2)	X-54, Y-75	0.96 × 0.86	26.0	円 形			33
D-20 (B-1)	X-31, Y-93	0.39 × 0.38	33.0	円 形			16
D-21 (B-1)	X-31, Y-93	0.38 × 0.33	55.0	円 形			16
D-22 (B-1)	X-31~32, Y-93	0.95 × 0.88	19.0	円 形			16
D-23 (A-2)	X-54, Y-74	0.68 × 0.48	34.0	楕 円 形			—
D-24 (A-2)	X-54, Y-74	0.34 × 0.22	22.0	円 形			—
D-25 (A-2)	X-54, Y-74	0.54 × 0.50	39.0	円 形			33
D-26 (A-2)	X-54, Y-74	0.49 × 0.44	5.0	円 形			—
D-27 (A-2)	X-54, Y-74	0.60 × 0.52	35.5	円 形			33
D-28 (A-2)	X-55, Y-74	0.38 × 0.32	8.5	円 形			—
D-29 (A-2)	X-55, Y-74	0.44 × 0.40	8.5	円 形			—
D-30 (A-2)	X-56, Y-75	0.46 × 0.36	32.0	円 形			—
D-31 (A-2)	X-55, Y-73	0.60 × 0.56	8.0	円 形			—
D-32 (A-2)	X-40, Y-93	0.54 × 0.42	71.0	円 形			—
D-33 (A-2)	X-55~56, Y-74	0.64 × 0.50	15.0	楕 円 形			33
D-34 (A-2)	X-56, Y-74	1.10 × 0.94	16.5	楕 円 形			33
D-35 (A-2)	X-56, Y-73~74	0.46 × 0.40	22.0	円 形			—
D-36 (A-2)	X-55, Y-77	0.51 × 0.43	16.0	円 形			—
D-37 (A-2)	X-55~56, Y-77	0.52 × 0.35	33.0	楕 円 形			33
D-38 (A-2)	X-54, Y-77	1.58 × 0.64	41.0	隅丸長方形	D-40、焼土坑		25
D-39 (A-2)	X-54, Y-77	1.08 × 0.92	23.0	円 形			—
D-40 (A-2)	X-54, Y-77	0.96 × 0.88	15.0	円 形	D-38		40
D-41 (A-2)	X-53, Y-77	1.40 × 0.72	13.0	長 方 形			21
D-42 (A-2)	X-52~53, Y-78	1.21 × 0.96	67.0	円 形	D-46		21
D-43 (A-2)	X-51, Y-76	0.40 × 0.34	54.0	楕 円 形			—
D-44 (A-2)	X-50, Y-76~77	1.00 × 0.80	25.0	楕 円 形	鉄滓廐棄土坑、		24
D-45 (B-1)	X-32, Y-92~93	1.62 × 0.68	36.0	隅丸長方形			—
D-46 (A-2)	X-53, Y-78	0.90 × 0.76	21.5	円 形	D-42		21
D-47 (A-2)	X-55, Y-73	0.46 × 0.42	12.0	円 形			—
D-48 (A-2)	X-50, Y-83	1.50 × (0.62)	47.0	楕 円 形 ?		縄文時代	24
D-49 (A-2)	X-55, Y-73	0.34 × 0.33	7.0	円 形		縄文時代	—
D-50 (A-2)	X-51, Y-81~82	1.49 × 1.15	27.0	楕 円 形		縄文時代	25
D-51 (A-2)	X-52~53, Y-80	1.43 × 1.10	26.5	楕 円 形			25
D-52 (A-2)	X-52, Y-81	1.02 × 0.90	65.5	円 形			25
D-53 (A-2)	X-51, Y-80	0.91 × 0.82	24.0	円 形			25
D-54 (A-2)	X-51, Y-80	1.37 × 1.21	28.5	円 形			25
D-55 (A-2)	X-55, Y-73	0.52 × 0.48	20.0	円 形			33
D-56 (A-2)	X-55, Y-73	0.66 × 0.63	18.0	円 形			33
D-57 (A-2)	X-54, Y-73	0.52 × 0.42	16.5	楕 円 形			—

遺構名(調査区)	位 置	規 模 (m)	深さ(cm)	形 状	重 複 ・ 備 考	時 期	Fig.
D-58(A-2)	X-54, Y-73	0.51 × 0.47	15.0	円 形			—
D-59(A-2)	X-54~55, Y-77	1.22 × 1.10	44.5	隅 丸 方 形			25
D-60(A-3)	X-52~53, Y-68	1.07 × 1.03	31.0	円 形			31
D-61(A-2)	X-55~56, Y-74	0.50 × 0.41	36.0	椭 圓 形			—
D-62(A-2)	X-56, Y-74	0.33 × 0.31	28.0	円 形			—
D-63(A-2)	X-56, Y-74	0.35 × 0.31	14.0	円 形			—
D-64(A-2)	X-56, Y-75	0.30 × 0.26	21.0	円 形			—
D-65(A-2)	X-56, Y-76	0.31 × 0.30	21.0	円 形			—
D-66(A-2)	X-56, Y-76	0.20 × 0.18	13.0	円 形			—
D-67(A-2)	X-56, Y-75	0.16 × 0.14	13.0	円 形			—
D-68(A-2)	X-56, Y-76	0.12 × 0.11	9.0	円 形			—
D-69(A-2)	X-56, Y-76	0.36 × 0.30	22.0	円 形			—
D-70(A-2)	X-56, Y-76	0.56 × 0.48	23.5	円 形			—
D-71(A-2)	X-56, Y-74	0.79 × 0.50	28.5	椭 圓 形	D-33		33
D-72(A-2)	X-54, Y-74	0.59 × 0.53	22.0	円 形			—
D-73(A-2)	X-56, Y-76	0.94 × 0.90	14.0	円 形	埋甕	縄文時代	24
D-74(A-3)	X-55, Y-69~70	1.17 × 0.96	40.0	椭 圓 形			31
D-75(A-3)	X-55, Y-75	1.72 × 1.06	50.0	椭 圓 形	集石土坑		—
D-76(A-3)	X-55, Y-61	0.66 × 0.55	93.0	隅 丸 方 形			—
D-77(A-3)	X-56, Y-68	0.56 × 0.52	52.0	円 形	H-28、ハガマ、円筒埴輪	平安時代	27
D-78(A-3)	X-55, Y-53	0.57 × 0.54	57.5	円 形	甕	古墳時代	30
D-79(B-1)	X-28, Y-91	0.24 × 0.22	25.0	円 形			—
D-80(B-1)	X-29, Y-91	0.23 × 0.19	44.0	円 形			—
D-81(B-1)	X-24, Y-90	1.23 × 0.84	48.5	椭 圓 形	H-2、焼土坑、打製石斧		—
D-82(B-1)	X-28, Y-92	(1.45) × 1.18	33.0	隅 丸 長 方 形	D-9		18
D-83(B-1)	X-30, Y-93	(0.50) × (0.30)	23.0	形 状 不 明			—

落込み一覧表

遺構名(調査区)	位 置	規 模 (m)	深さ(cm)	形 状	重 複 ・ 備 考	時 期	Fig.
O-1(B-1)	X-24, Y-91	3.16 × 2.96	124.5	円 形	底面非常に堅地、縄文式土器	縄文時代	18
O-2(A-2)	X-51, Y-82	1.75 × 1.54	119.5	円 形	上は円形で底面は長方形	縄文時代	25

井戸址一覧表

遺構名(調査区)	位 置	規 模 (m)	深さ(cm)	形 状	重 複 ・ 備 考	時 期	Fig.
I-1(B-1)	X-33, Y-93	0.83 × 0.81	(193.0)	円 形		中世	18
I-2(B-1)	X-37, Y-92	1.20 × 0.88	(185.0)	円 形		中世	18

VI まとめ

遺跡の地形について

赤城山はその裾野を四方に長くひき、山頂部から流れ出る河川によって幾多の開析谷が刻みつけられている。本遺跡地は南北に流れる藤沢川と寺沢川の2本の河川にはさまれた舌状の台地の西、藤沢川に接したところに位置する。巨視的には南に傾斜し、微視的には上方が北西に、下方が南東に傾く。さらにこの2本の河川の間には南北に流れる4本の小河川が南下しており、現地形を見ると藤沢川が流れている付近が低く、遺跡の東・中央・西が微高地となっている。そして、調査区東西200mの間には小河川により形成された開析谷や調査区域に隣接する開析谷も混在しており、狭隘ではあるがそこでは水田が営まれている。調査区西側の微高地と藤沢川の低所では崖をなす。同様に調査区東端と五代町にあたる台地も崖をなしている。この比高は現状で2m～6m前後である。そして、この斜面の末端部は比高差10m前後の直線的な段丘崖をなしており、旧利根川のつくった広瀬川低地帯に接している。本遺跡はこうした水田と畑が入りくむ場所に位置し、微高地では遺物の濃密散布がみられ、水田では遺物の散布はほとんど見られなかった。また、今回出土した遺物をみると、縄文時代から少量ではあるが中世まであり、住居址の存在が容

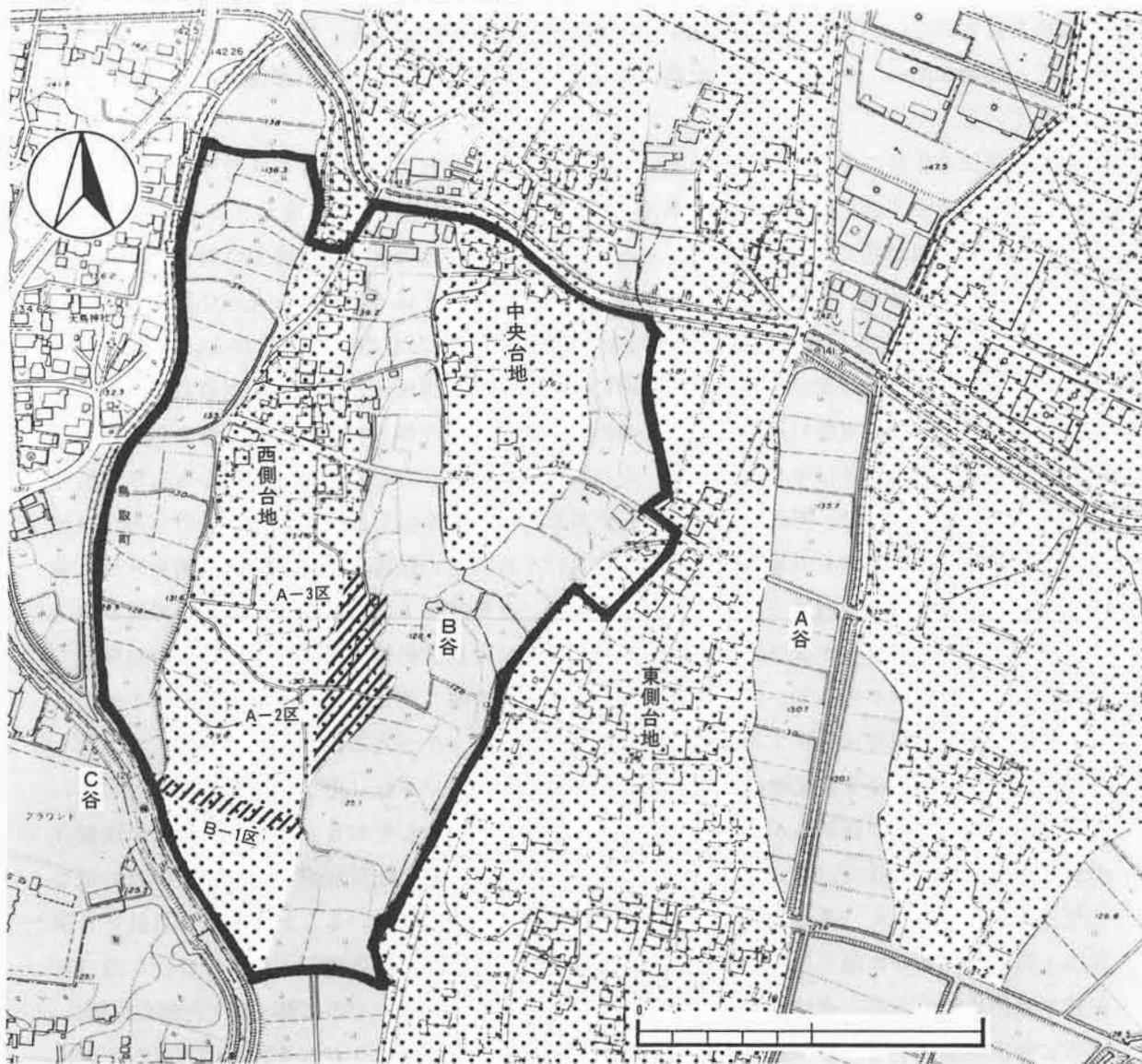


Fig. 7 遺跡地形図

易に推測された。したがって、この地は、小丘陵と小河川からなり、先人住居の好適地と推定される。ただ、今回の調査区内には、トレンチにより確認あるいは検出された河川跡が検出され低所での住居址の確認はできなかったため、住居址数は43軒にとどまった。

遺構について

本遺跡地内での遺構は、竪穴住居址、掘立柱住居址、井戸、土坑、ピット、竪穴状遺構、縄文住居址、縄文落ち込み、河川跡が確認或いは検出された。時代的には縄文時代から中世にまで及んでいるが、その中心は奈良・平安時代にかけての住居址群である。時期的には7世紀中葉から11世紀前半と考えられるが、この300年強の間に、本遺跡の住居址群はどのような消長をたどったのかを考えてみたい。

Fig. 8～10は、本遺跡住居址の変遷を色分けしたものである。本遺跡内に住居址が出現するのは縄文前期後半（出土土器から察すると、諸磯b式土器）からである。住居址として検出されたのはこの2軒のみであるが、出土土器では他に十三菩提式土器、加曾利E式土器、称名寺式土器、堀之内式土器など、縄文前期から後期にまで幅広く検出された。その後時間的なブランクがあった可能性があり、次期住居址の出現は7世紀中葉であり、それまで人間の痕跡を留める遺構は認められていない。次期住居址とはかなり時間的な隔たりがあるが、ほぼ同じ場所に占地していることは興味深い。そして7世紀中葉から11世紀前半に至るまでは、ほぼ連続して住居址が構築されている。

縄文時代以来住居のなかったこの場所に進出した人々が、どこから移ってきたかは、現時点では言及できないが7世紀中葉の住居址がA-2区（Fig. 9参照）より出現し、その後周辺に広がっていった様相が見て取れる。すなわち南北に狭い西側台地のB谷（本書では調査区内の舌状台地を東から東側台地、中央台地、西側台地と称し、開析谷を以下、東からA～C谷と称する。Fig. 7参照）付近から出現し、西側台地内部へ進出していったものと推測される。また、煙道部が住居から少し出る程度で、主体は住居内にある古墳時代住居址に一般的に認める傾向を残す7世紀代の住居址群は規模の違いはあるものの、主軸方向が近似しており、規則性すら感じさせる。これらの住居址群とはやや間を置き、この調査区内の中心となる9世紀前半から11世紀前半に現れる24軒の住居址は、平面形がいずれも正方形に近い形を呈し面積が10m²前後の小形住居址が中心である。竈の形態も外竈になるなど、完全にそれ以前の住居址とは異なる様相をみせ、竈の位置や主軸方向も10°内外で近似性を呈している。9世紀前半の住居からは真鎧の鎧帶が出土するなど特色あるところとなっている。さらにこの中には10世紀後半の5軒の住居址の重複も含まれるが、重複関係からみて、この期に少なくとも1度の建て替えがあり、この期として検出された住居がすべて同時に存在することはあり得ないことがうかがえる。

また、本遺跡内では9世紀中頃と思われる精錬鍛冶炉が検出され、そこで鍛造されたと思われる紡錘車や刀子などの鉄製品が10世紀代の住居址から多数出土しており、本集落で自前の鉄製品が製造されていた可能性が高い。さらに、この精錬鍛冶炉以前の住居址からも鎌や卵倒型の鎧など何点か出土しており、鉄滓廃棄土坑なども本遺跡内で確認されていることからそれ以前にも製錬址・鍛冶址関係の集団工人がいたことが推測される。そして、本遺跡内の住居址は、この11世紀前半代が最後であり、それ以降の住居址は存在しない。しかし、その痕跡を消した時点以降に、実際に集落が存続していなかったかどうかは更に検討を要する。以上が本遺跡内における住居址

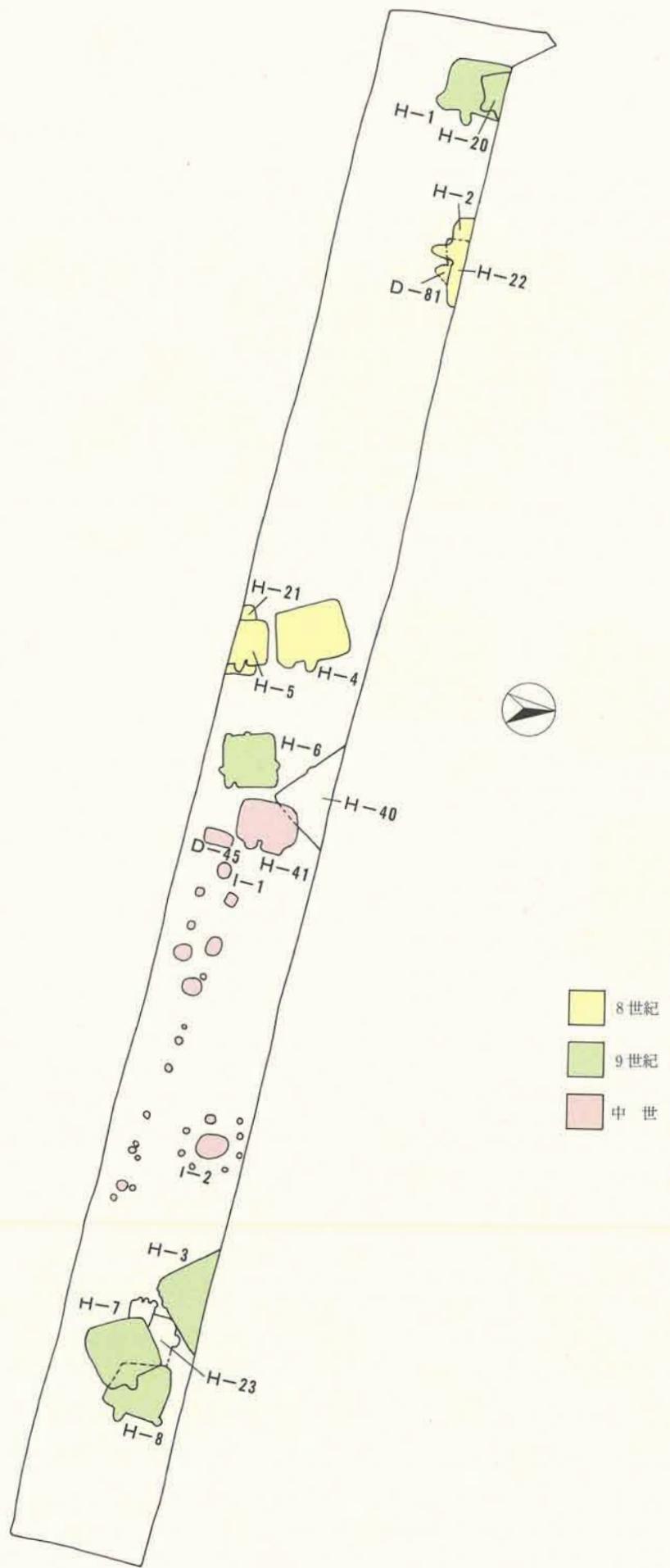


Fig. 8 遺構分布図 (B-1区)

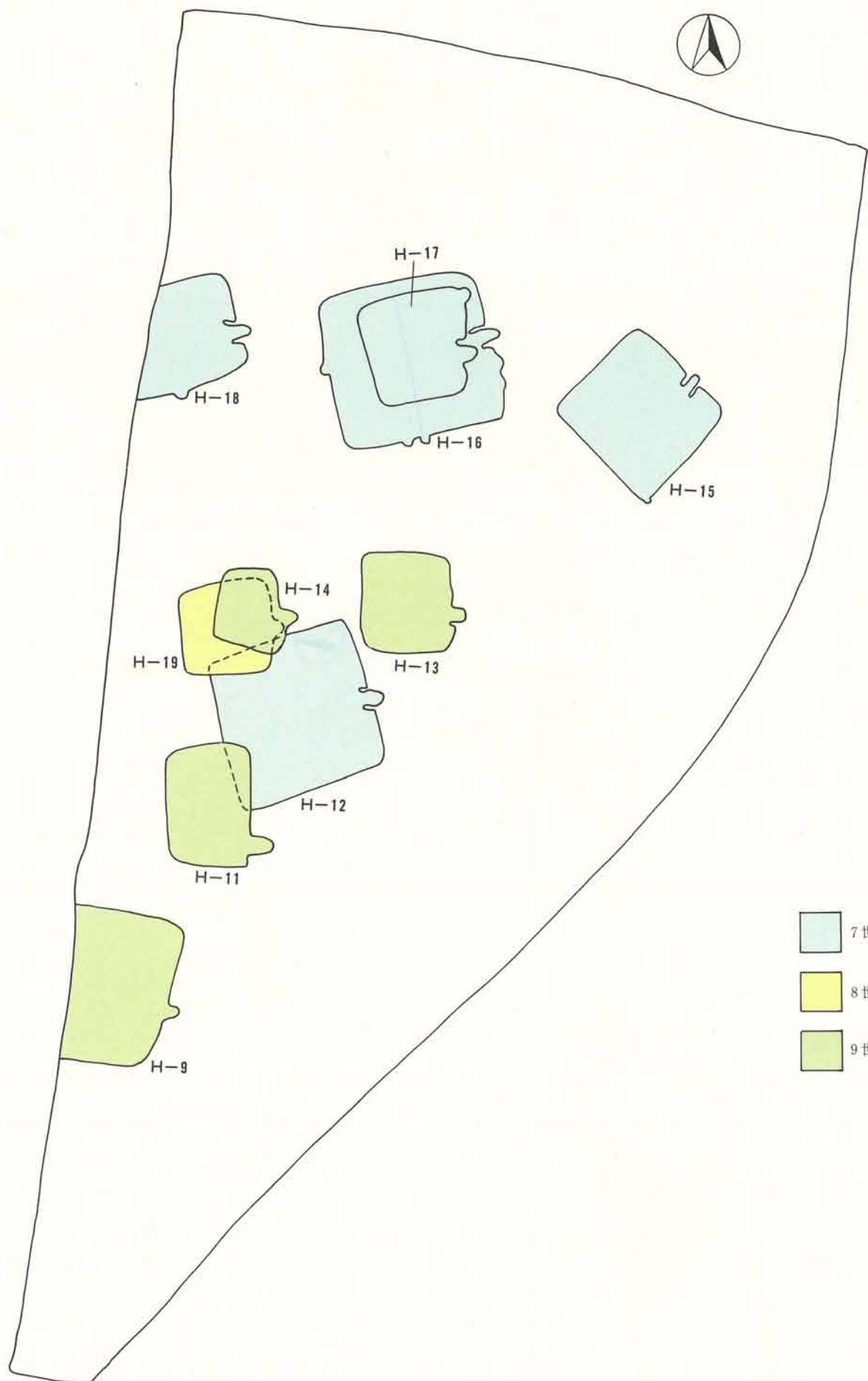


Fig. 9 遺構分布図 (A-2区)



Fig. 10 遺構分布図 (A-3区)

の変遷であるが、西側台地の狭小な断片的な動向である点は否めない。

このように竪穴住居址群が一定箇所に定着し、継続することについて芳賀東部団地遺跡Ⅱによれば、定着と継続が谷地＝水田の耕作に関わりがあるとし、集落の立地は、当然のことながら、水田場所に想定される開析谷の占有とも関わっていたであろうと述べている。このことからすれば、本調査区も谷地を望む所に立地し、本遺跡地における住居目的が、谷地の水田開発と密接に関係があったことを示唆していると考えられる。そして律令国家の特徴の一つに、戸籍にみられるような、人々の居住地の固定があげられるが、本遺跡地の住居址群の定着と継続は、まさにこのこととも対応している。

なお、本集落は、その地理的位置からみて藤沢郷に所属する可能性が大きく、この地が奈良・平安時代に一核心であった感が強いことも申し添えておく。

以上、縄文時代、7世紀中葉～11世紀前半の古代集落の一端を、本遺跡のあり方のみから瞥見してきた。そして、赤城山南麓斜面においては、芳賀東部団地遺跡や芳賀西部団地遺跡をはじめすでに数多くの遺跡が確認され調査が行われており、その結果しだいに周辺の歴史が解明されつつある。その中で、本遺跡はごく限られた狭い範囲の調査ではあったが、この地で生活を営んだ先人の足跡を知るうえで貴重な資料が得られた。来年度、引き続き実施される調査結果を踏まえ研究して行くことにより、本遺跡との関連もより一層明確になり、この地域の歴史が解明されることを期待したい。

精鍊鍛冶炉遺構について

1. 地形

赤城山南麓の舌状台地の基部に近い東に低湿地をひかえた東面傾斜地に占地する。標高は131mで東側に開析谷によって開けた水田部との比高は3m程である。同時期の集落の主体は南30mほど隔たった地点にある。すなわち、この遺構だけが集落と隔絶された形で単独に存在する。これは、本遺構が高熱を扱う工房であることから、火災の危険を配慮したことによるものとみられる。

2. 遺構

調査区 A-3区（調査区最北端）

平面形 不正円形 壁の立ち上がりが不明確で、床面は椀底状。

規模 長径3.4×短径3.2m、深さ25cm、平面形：不正円形。

主軸方向 N-S

柱穴 東西壁外各2基、南北壁外各1基、棟方向：南北方向。

3. 遺構概要

ローム層の掘り込みは25cmと比較的浅く、しかも壁は直立せず、特に周辺部はなだらかに中央に向かって傾斜し、平らな床面に続く。中央やや北によった部分にローム層を掘り込んだ地床炉がつくりつけられている。規模は長径66×短径50cmで粘土を巻いた円形をしている。その中央部は椀底状にくぼみ、51×34cm、深さ20cmの範囲がヒョウタン形にくぼみ、しかも還元されて青灰色になるまで強く焼けている。炉底の構造はロームを35cmほど掘り、その上にやや粗

い礫まじりの粘土を敷き、その上に耐火性の強い粒子の細かい粘土を5cmほど張っている。この巻かれた粘土は北東部で10cmほど切れている部分があり、この場所から鞴の羽口が出土した。したがってここが鞴挿入口となっていたと考えられる。

掘りかた部分の中央やや南よりの部分には大型で径90cm、小型で径50cm、深さ50~70cmほど の廃棄穴が3回にわたって掘られていた。しかも、この穴も2~3回にわたって繰り返して掘り返されていたことが層的に確認された。鍛冶による鉄滓を中心に鍛造の際のチップや土器などが多量に出土した。鉄滓は少量の流動滓を除いて破碎されたもので、多くの椀状滓が確認された。その全重量は38kgにも達し、この遺構の性格を考える根拠を与えている。

掘りかた南壁付近は幅50cmほどの床面が残っており、30×16cmほどの表面が平らな河原石が据えられ、表面が摩耗していた。この周辺からは鍛造の際のチップが層をなして確認されており、この石がカナシキとして利用されていたことがわかる。そのすぐ東に接するように径20cmの円形の小型地床炉があり、鍛造の際の炉として機能をもっていたとみられる。

柱穴は掘りかたの外側に6本確認されたが、南北方向に棟が走り、それに寄せかけて2本ずつの柱穴があく。地床炉はこの2本の柱穴の間に位置している。柱穴の角度からして上屋は炉の上部を中心にかなり高くなるものとみられ、一般の住居とは大きく異なるものと想定される。強力な火力を要する鍛冶工房としての特別な配慮がうかがえる。菅谷たたらの「高殿」とよばれる建物の名称が想起されて興味深い構造である。

4. 出土 遺 物

ア：鍛冶関連遺物

羽口（完形1点、破片約100点）、砥石（2点）

鉄滓（全重量38kg）、椀状滓、少量の流動滓、鍛造時のチップ多量

鉄鋗様破片、鉄器未製品・半製品

イ：土 器

土師器（コの字口縁甕、坏〔墨書・「万」、「寸」か？〕）

須恵器（甕、付け高台椀、糸切り切り離し坏）

5. 考 察

以上みてきたように、この遺構は鍛冶関連の工房跡である。しかもこの構造、施設の状態、遺物等からみてもかなり整った様相を示している点で、この種遺構としては注目されるべきものである。

ア：遺 構

掘りかた中央付近に設置された地床炉を中心に鍛冶工房として具備すべきものはほとんど備えている。特に地床炉の南側に接して多くの河原石が出土した。その一部は表面が焼けたものもあり、炉の南側に炉からの高熱を遮断するための断熱壁が設けられていた可能性がある。炉の構造は一般的な地床炉であるが、鞴座が確認されており還元されるまで焼かれた炉内温度は十分に機能を果たしたものであることを物語っている。それは施設や遺物からも十分推察される。特に多量の鉄滓の出土、鍛造の際の飛沫が層をなして確認されたこと、廃棄穴が数次にわたって掘られていることなどからかなり高い操業回数を想定させる。

また、建物構造が高熱の炉を意識して上屋を高く構えていること、集落から離れた地点に

配置されていることなど、当時の人達の工房に関する考え方をうかがわせて興味深い。

イ：遺物

遺物の中で注目されるのは鉄滓の量の多さである。全体の量が38kgにも及ぶのは今までの類例から見ても異常に多い量である。この中にはかなり多量の椀状滓が含まれており、破碎された鉄滓も単なる鍛冶工房とは趣を異にしている。

また、数次にわたり掘られた廃棄穴、多量の羽口片の出土、層をなしているチップの散乱はこの工房の操業がかなり活発に行われたことの証左である。その意味からすれば、この時期の集落から発見される鉄製品はここから供給されたとみて誤りはあるまい。

また、土器が比較的多く発見されたのもこの種遺構としては稀なことで、時期決定にも有力な資料を提供している。

ウ：時期

以上の所見から、この遺構の時期を考えると、「コ」の字甕、須恵器椀、壺の示す様相から見て9世紀中頃のものと見て間違いない。また、この時期は県内各地でもこの種遺構が多く発見される時期で、鉄製品の需要が増す社会的な背景を想定させる。

6. 遺構の性格

この遺構は鍛冶工房としての性格をもつものであることは明らかである。しかし、近年の調査では遺構における工程が問題視されることが多い。そこで、本遺構はいかなる工程の操業にからんだ遺構であるかを考えてみたい。

まず、鍛造工程の存在は施設、出土遺物などから明らかである。しかし、多量の鉄滓の出土は何かを物語るものであろうか。純度の高い原料鉄を持ち込み、鍛造したにしては異常に鉄滓量が多いからである。そこで考えられるのが「精練」工程も含めた鍛冶の工程が考えられないであろうか。原料鉄の純度を高め、それを「鍛造」する二つの工程を考慮しないと理解できない鉄滓の量である。その意味で、本遺構は「精練鍛冶」工房であると性格付けしたい。

この理解の背景には谷一つはさんだ東の台地に発見された芳賀東部団地遺跡での製錬炉の発見である。ここでは明かに砂鉄を原料とする製錬工程が確認された遺構が発見されている。おそらくそこで荒吹きされた原料鉄が持ち込まれたものと考えて誤りあるまい。その意味では二つの遺跡は交流があり、さらに言えば、同じ支配機構に組み込まれた集落であったとみられる。

製鉄という作業は特定技術集団によるものとみられるが、その背景には政治的な意図が働いていたと見るのが常識である。この地域の「郷」は、「勝沢郷」が比定されている。この郷の中心的な集落は「芳賀東部団地遺跡」で、その拠点集落に技術集団の本拠があり、そこで原料鉄を傘下の支集落に分配するような組織の存在が考えられないであろうか。その形は精製されない原料鉄であったために、支集落では、「精練鍛冶」の工程をへなければならぬような社会的背景があったことも想定される。

中近世の遺構・出土遺物について

1. 遺構

B-1区の東端部分に位置する。台地の東面緩傾斜地の傾斜変換点付近の斜面を削平、整地している。その整地面はX33~39までの30mの幅が想定される。この部分が、整地されたとみる根拠は、

- ① 断面部分の観察によると、両側にHr-FA、Hr-FP、As-Bの純堆積が確認できない。
- ② X33付近の基盤ローム層が削り取られ、当時の地表面から60cmほど掘り込まれて崖状を呈している。
- ③ X33~39の間には古代に属する竪穴住居などの遺構を全く欠くこと。
- ④ 遺物に中世末から近世初頭頃の物が集中して出土していること。

である。

この部分からは、西側から段下に竪穴状遺構、土坑、柱穴列、井戸址等が検出されているが、調査区域・面積が限定されているため、全貌は把握できない。以下、検出された遺構について簡単に整理しておく。

ア. 竪穴状遺構

X33地点近くで確認された長方形竪穴状遺構である。台地のカット面に沿う形で南北3.5m、東西2.3m、深さ71.0cmの不正隅丸長方形を呈する平面形をもつ。壁面・底面とも比較的よく整っており、東壁中央から北に偏した部分に幅1.35m、奥行60cmの長方形の張り出し部があり、入り口と想定される。

イ. 土坑

竪穴状遺構の南側に隣接する形で確認された不正隅丸長方形の土坑である。この土坑も台地のカット面に沿う形で検出されている。東側にI-1が位置する。南北1.62m、東西0.68m、深さ36cmを測る。

ウ. 柱穴列

ほぼ一直線上に10個の柱穴状のピットが検出されているが、詳細にみると西側の3つの柱穴列と東側の7つの柱穴列は走行をやや異にしている。すなわち、西側のP₁~P₃はN-130°-E、東側のP₄、P₅、P₁₀、P₁₁、P₁₃はN-22°-Eを測る。

西側柱穴群は、南に直角に折れてP₅に連なるが、その柱間はP₁-P₅が6尺、P₁-P₂が9尺、P₂-P₃が6.5尺と等間になっていない。その内側にはP₆-P₇がP₁-P₃と平行して2.4m(8尺)の柱間をもって並ぶが、南は調査区外になるため全体は把握できない。外側の柱列との距離は北側で5尺(165cm)、西側で7尺(210cm)ある。外側列、内側列は柱筋が通らないこと、内側の柱穴に比べて深さが深いことから、下屋か柵列様のものとしてとらえておきたい。内側の柱穴は南にのびると思われるが、区域外のため不明である。

東側の柱列については、P₄-P₉-P₁₀-P₁₁は、それぞれ柱間が6尺(180cm)、10尺(300cm)、6尺(180cm)で中央部を広くとっている。その南側にはP₈の柱穴を確認したのみであり、調査区外に建物がまとまるか否かは即断できない。

東端のP₁₁-P₁₂の柱間は10尺(300cm)であるがすぐ南が調査区外となるため詳細は不明である。ただ、P₉-P₁₀の間、P₁₁-P₁₃の間は共に10尺の柱間があり、北に隣接する井戸址との関係でそれとの連絡通路的な機能も考えられる。

エ. 井戸址

I - 1 の上面はほぼ完全な円形を呈し、円柱状に掘り込まれている。長径 0.83m、短径 0.81m で深さは 1.93m まで確認できたが、湧水してきたため、未完掘に終わった。

I - 2 の上面は不正円形を呈し、長径 2.3m、短径 2.05m で深さは 1.85m まで確認できたが、石が多量に投げ込まれていて、未完掘である。井戸の周縁には 7 本の柱穴があいており、上屋構造のあったことが判明している。

以上の所見から次のことが考えられる。

- ① この部分は、屋敷構造の北側に当たるものと考えられる。
- ② 壇穴状遺構は貯蔵用の施設であろう。
- ③ 柱穴列は屋敷の裏側を画する意図があり、柵列ないし、下屋をもつ建物などが考えられる。
- ④ 井戸址 I - 2 は上屋を架けた構造である。

2. 遺 物

遺構に直接つく遺物は皆無であるが、削平・整地面からいくつかの陶片が出土している。天目椀①～③はいずれも小片であるが、鉄釉の状態はかなりバラエティーに富んでいる。

天目椀①は茶褐色を呈し、焼成温度が低い雑なつくりである。

天目椀②は光沢ある黒色で一部茶褐色の部分が認められ、良質なつくりである。

天目椀③は飴色釉ですじ状に濃い部分があり、光沢を欠く。

小皿④は灰釉皿で表面はロクロ痕が顕著であり、釉には光沢がある。

椀⑤は黄灰色の灰釉で釉は光沢に富む。

椀⑥は高台部は断面角型でしっかりしている。釉は灰釉で体部に青灰色でかかる。

鉢⑦は鉄釉が縞状に雜にかけられた底部で内面には釉を欠く。

全体的には日常多用されている器種で、優品は少ない。特に天目茶碗は住民の喫茶の風習を示しており、この屋敷に住む人達の階級層をうかがい知ることができる。

全体的に瀬戸・美濃系に属する陶磁器が主体とみられ⑤⑥が詳しい様相を見せるほかは、時期的には17世紀を中心とした時期のものとみられる。

3. ま と め

以上、中近世に属するとみられる遺構・遺物について概観してきたが、出土土器の様相、台地を削平して屋敷を構成するなど、かなりな労働力を要する削平を行っていることなど考え合わせると、在地の有力な土豪階級の屋敷の一部を検出したものと考えられる。周辺にある城館址などとの関連も考慮する必要があり、今後も資料の収集に努めていきたい。

《参考文献》

- 前橋市教育委員会 (1984) 芳賀東部団地遺跡Ⅰ－古墳～平安時代編その1－
前橋市教育委員会 (1988) 芳賀東部団地遺跡Ⅱ－古墳～平安時代編その2－
前橋市教育委員会 (1990) 芳賀東部団地遺跡Ⅲ－縄文・中近世編－
前橋市教育委員会 (1984) 小神明遺跡群Ⅱ
前橋市教育委員会 (1987) 小神明遺跡群V
前橋市教育委員会 (昭和56年度) 桧峯遺跡
前橋市教育委員会 (昭和58年度) 端氣遺跡群Ⅱ
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 (1990) 芳賀北曲輪遺跡
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 (1992) 芳賀北原遺跡
前橋市埋蔵文化財発掘調査団 (1992) 五代桧峯Ⅱ遺跡
前橋市「地形地質」(1971) 前橋市史

Tab. 3 土器観察表

番号	出土位置	器形	大きさ		①胎上②焼成③色調④残存	成・整形方法		備考	Fig.	
			口径	器高		口縁・胴部	底部			
1	H-1	土師壺	12.1	3.5	①細粒②良好③橙④2/3	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。口縁部に指頭痕を有す。	9世紀前半	35	
2	H-2	須恵壺	13.6	4.0	①細粒②良好③灰白④4/5	外傾。轆轤。	回転糸切り後箝調整。	8世紀中頃	35	
3	H-2	土師壺	14.8	4.3	①細粒②良好③橙④5/6	内湾。横撫で。箝削り。	箝削り。	8世紀中頃	35	
4	H-3	須恵壺	(12.4)	3.8	①細粒②良好③灰白④1/2	外反。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀後半	35	
5	H-4	須恵壺	(13.2)	4.2	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。端部箝調整。	8世紀末	35	
6	H-4	須恵壺	(12.2)	3.9	①細粒②良好③綠灰④1/3	外傾。轆轤。	回転箝調整。	8世紀末	35	
7	H-4	土師壺	14.4	4.1	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。	8世紀末	35	
8	H-4	土師壺	(13.8)	3.9	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。	8世紀末	35	
9	H-4	須恵横瓶	(13.8) (26.0)		①細粒②良好③明緑灰④1/3	外反。轆轤。口唇部折り返し。	欠損。胴部外面に平行なたき跡。内面に青海波文。	8世紀末	35	
10	H-5	土師壺	(13.4)	2.6	①細粒②良好③橙④1/5	外傾。横撫で。箝削り。	欠損。	8世紀末	35	
11	H-8	カワラケ	8.5	2.4	①細粒②極良③にぶい橙④完形	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。底部肥厚。	11世紀前半	35	
12	H-8	カワラケ	8.2	2.2	①細粒②極良③浅黄橙④完形	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。底部肥厚。	11世紀前半	35	
13	H-9	須恵高台碗	14.4	5.3	①細粒②良好③浅黄橙④1/2	外傾。轆轤。	回転箝調整。高台後付け。酸化炎焼成。	10世紀後半	35	
14	H-10	灰釉段皿	(11.4)	2.1	①微粒②極良③灰白④1/4	外傾。轆轤。口唇部玉縁。	回転箝調整。高台削出し。脇部に段が付く。釉薬ドブ浸け。	10世紀後半	35	
15	H-11	須恵壺	(15.0)	3.0	①細粒②良好③浅黄橙④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。酸化炎焼成による。	9世紀後半	35	
16	H-12	土師壺	(13.4) (4.9)		①細粒②良好③にぶい赤褐④1/3	内傾。横撫で。箝削り。	欠損。外稜を有す。	7世紀中頃	35	
17	H-12	土師壺	(13.4)	3.4	①細粒②良好③灰褐④1/3	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。外開き2段。	7世紀中頃	35	
18	H-12	土師壺	13.8 (12.5)		①中粒②良好③にぶい黄橙④1/2	外反。横撫で。箝削り。	欠損。頸部に輪積痕。胴部に最大径をもつ。	7世紀中頃	35	
19	H-12	須恵壺	(12.0)	4.8	①細粒②良好③橙④1/2	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。弱い外稜を有す。	7世紀中頃	35	
20	H-13	須恵壺	(13.6)	3.8	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外反。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃	35	
21	H-13	須恵壺	(12.4)	3.8	①細粒②良好③オリーブ灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃	35	
22	H-13	須恵壺	(13.4)	3.5	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃	35	
23	H-13	土師壺	12.0	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。胴部に指頭痕。	9世紀中頃	35	
24	H-13	須恵壺	12.4	3.7	①細粒②良好③灰白④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃	36	
25	H-13	土師壺	(12.0)	3.8	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。	弱い外稜を有す。	9世紀中頃	36
26	H-13	須恵壺	(12.0)	3.6	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾。轆轤。	回転箝調整。		9世紀中頃	36
27	H-15	土師壺	11.4	3.8	①中粒②良好③明赤褐④完形	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。	底部やや肥厚。	7世紀後半	36
28	H-15	土師壺	15.0	5.2	①細粒②良好③橙④2/3	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。		7世紀後半	36
29	H-15	土師壺	18.6 (29.5)		①細粒②良好③にぶい橙④3/4	外反。横撫で。箝削り。	欠損。口縁部に最大径を有す。		7世紀後半	36
30	H-15	土師壺	23.0	40.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外反。横撫で。箝削り。	箝削り。口縁部に最大径を有す。		7世紀後半	36
31	H-15	土師壺	20.6	35.6	①細粒②良好③黄橙④2/3	外反。横撫で。箝削り。	箝削り。口縁部に最大径を有す。		7世紀後半	36
32	H-15	土師壺	26.6 (24.5)		①細粒②良好③黄橙④2/3	外反。横撫で。箝削り。	欠損。口縁部に最大径を有す。口縁部外面に1条の沈線内面に暗紋。	7世紀後半	36	
33	H-15	土師壺	11.0	3.1	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	外傾。横撫で。箝削り。	箝削り。	弱い外稜を有す。	7世紀後半	36
34	H-15	土師壺	11.3	3.4	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。		7世紀後半	36
35	H-16	土師壺	(18.4)	8.6	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。非常に大型の壺。手持ち箝削り。		7世紀中頃	36
36	H-16	土師壺	(14.0)	4.5	①細粒②良好③灰褐④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。弱い外稜を有す。		7世紀中頃	36
37	H-17	土師壺	11.8	4.2	①細粒②良好③橙④完形	外反。横撫で。箝削り。	箝削り。		7世紀後半	36
38	H-17	土師台付壺	(12.6)	14.2	①粗粒②良好③明赤褐④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。胴部に最大径。脚部撫で調整。		7世紀後半	36
39	H-17	土師壺	(10.4)	13.9	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。箝削り。	箝削り。	胴部に最大径。	7世紀後半	36

番号	出土位置	器 形	大きさ		成・整 形 方 法	備 考	Fig.		
			口径	器高					
40	H-17	土 師 壺	21.6	(25.0)	①中粒②良好③にぶい黄橙④2/3	外反。横撫で。範削り。	欠損。口縁部に最大径を有す。	7世紀後半 37	
41	H-17	土 師 壺	(16.4)	(30.0)	①細粒②良好③明赤褐④1/2	直立。端部外反。横撫で。	範削り。口縁部に最大径を有す。口縁部に輪積痕。	7世紀後半 37	
42	H-17	土 師 壺	21.8	38.4	①細粒②良好③明褐④5/6	外反。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に指頭痕。脣部内面に細かな範削り。	7世紀後半 37	
43	H-17	土 師 壺	21.4	37.2	①細粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	外反。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に最大径を有す。	7世紀後半 37	
44	H-17	土 師 壺	20.4	39.5	①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形	外反。横撫で。範削り。	範削り。底部は木葉底。口縁部に最大径を有す。	7世紀後半 37	
45	H-17	土 師 壺	22.4	40.0	①細粒②良好③にぶい橙④5/6	外反。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に最大径を有す	7世紀後半 37	
46	H-18	土 師 壺	12.4	4.5	①細粒②良好③橙④2/3	外反。横撫で。範削り。	範削り。弱い外稜を有す。口縁部に歪み。	7世紀後半 37	
47	H-18	土 師 壺	15.3	15.9	①細粒②良好③にぶい橙④5/6	外傾。横撫で。範削り。	範削り。脣部に最大径。口縁部に輪積痕。	7世紀後半 37	
48	H-18	土 師 壺	14.6	22.1	①中粒②良好③橙④3/4	外反。横撫で。範削り。	範削り。脣部に最大径をもつ。	7世紀後半 37	
49	H-19	土 師 壺	(14.2)	(3.8)	①細粒②良好③橙④1/5	内湾。横撫で。範削り。	欠損。	8世紀中頃 37	
50	H-20	須 惠 壺	12.4	3.8	①細粒②良好③明青灰④4/5	外傾。横撫で。範削り。	回転糸切未調整。	9世紀前半 38	
51	H-22	土 師 壺	(13.8)	(3.2)	①細粒②良好③にぶい橙④1/8	内湾。横撫で。範削り。	欠損。	8世紀前半 38	
52	H-22	土 師 壺	(15.0)	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/7	外反。横撫で。範削り。	欠損。	8世紀前半 38	
53	H-24	カ ワ ラ ケ	9.2	2.5	①細粒②極良③浅黄橙④完形	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	10世紀末 38	
54	H-24	須 惠 壺	12.4	3.7	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	10世紀末 38	
55	H-27	須 惠 壺	13.0	3.8	①細粒②良好③にぶい褐④ほぼ完形	外傾。轆轤。	底部肥厚。回転糸切未調整。	9世紀中頃 38	
56	H-27	須 惠 壺	12.2	4.2	①細粒②良好③灰④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃 38	
57	H-27	須 惠 壺	(13.0)	3.6	①中粒②良好③オリーブ灰④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃 38	
58	H-27	須 惠 壺	12.4	3.6	①中粒②良好③灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃 38	
59	H-27	須 惠 壺	13.2	3.8	①細粒②良好③灰④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	内面にスス付着部分あり。9世紀中頃 38	
60	H-27	須惠高台碗	15.8	6.6	①中粒②良好③緑灰④2/3	外傾。轆轤。回転糸切未調整。高台後付け。	内面にスス付着部分あり。	9世紀中頃 38	
61	H-27	土 師 壺	11.8	3.8	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	9世紀中頃 38	
62	H-27	須 惠 壺	(12.6)	3.3	①細粒②良好③灰④1/4	外傾。轆轤。	欠損。	9世紀中頃 38	
63	H-28	土 師 壺	11.4	4.1	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外反。横撫で。範削り。	範削り。	弱い外稜を有す。	7世紀末 38
64	H-28	短 頸 瓶	(一)	(10.0)	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	欠損。横撫で。範削り。	範削り。脣部に最大径。	7世紀末 38	
65	H-28	土 師 壺	11.4	3.2	①細粒②良好③にぶい橙④4/5	外傾。横撫で。範削り。	範起こし。口縁部に指頭痕有り。	7世紀末 38	
66	H-28	土 師 マ リ	10.0	6.5	①粗粒②良好③赤橙④完形	内傾。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に内面撫で調整。	7世紀末 38	
67	H-28	須惠高台皿	(14.8)	2.6	①細粒②極良④にぶい黄橙④1/3	外傾。轆轤。回転糸切未調整。高台後付け。内面外面にスス付着。		9世紀前半 38	
68	H-28	土 師 高 壺	(13.9)	6.1	①細粒②良好③赤褐④3/4	外傾。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に弱い外稜を有す。	7世紀末 38	
69	H-28	土 師 壺	(12.2)	3.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	7世紀末 38	
70	H-32	土 師 壺	(12.6)	3.3	①細粒②良好③橙④1/4	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	9世紀初頭 38	
71	H-32	土 師 壺	(11.4)	3.7	①細粒②良好③橙④1/2	直立。横撫で。範削り。	範削り。	9世紀初頭 38	
72	H-33	土 師 壺	11.8	3.9	①中粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	弱い外稜を有す。	7世紀後半 39
73	H-33	土 師 瓶	15.6	12.2	①粗粒②良好③にぶい橙④完形	外反。横撫で。範削り。	範削り。口縁部に輪積痕。口縁部に最大径。単孔式。	7世紀後半 38	
74	H-34	土 師 壺	11.2	3.6	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	直立。横撫で。範削り。	範削り。	弱い外稜を有す。半かわき範入れ。	7世紀後半 39
75	H-34	土 師 マ リ	9.0	7.0	①微粒②不良③橙④完形	直立。横撫で。範削り。	範削り。内面に放射状暗文。	7世紀後半 39	
76	H-34	土 師 壺	12.4	4.0	①細粒②良好③黄橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。範削り。	弱い外稜を有す。	7世紀後半 39	
77	H-34	土 師 壺	11.0	3.8	①細粒②良好③橙④完形	外反。横撫で。範削り。	範削り。弱い外稜を有す。	7世紀後半 39	
78	H-34	土 師 壺	11.4	3.8	①細粒②良好③黄橙④完形	外反。横撫で。範削り。	範削り。弱い外稜を有す。	7世紀後半 39	
79	H-34	土 師 壺	11.8	4.0	①細粒②良好③橙④ほぼ完形	外傾。横撫で。範削り。	範削り。弱い外稜を有す。	7世紀後半 39	

番号	出土位置	器 形	大きさ		①胎上 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整 形 方 法		備 考	Fig.	
			口径	器高		口縁・胴部	底 部			
80	H-34	土 師 坏	(11.2)	4.0	①細粒②良好③黄橙④1/2	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	7世紀後半	39	
81	H-34	土 師 坏	12.4	4.5	①細粒②良好③淡赤橙④1/2	外反。横撫で。範削り。	範削り。弱い外棱を有す。	7世紀後半	39	
82	H-35	須恵高台椀	8.4	5.1	①細粒②良好③淡黄④1/2	外傾。轆轤。	回転範削り。高台後付け。酸化炎焼成による。	10世紀後半	39	
83	H-36	須恵高台椀	14.2	6.6	①中粒②良好③にぶい橙④1/2	端部外反。轆轤。	高台張り付け。酸化炎焼成による。高脚高台。口唇部玉縁。	10世紀終末	39	
84	H-37	土 師 坏	12.2	4.3	①細粒②良好③にぶい橙④2/3	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	内面胴部にスス付着。9世紀中頃	39	
85	H-37	土 師 坏	(12.4)	2.9	①細粒②良好③橙④1/2	外反。横撫で。範削り。	範削り。	口縁部に指頭痕。	9世紀中頃	39
86	H-37	須 恵 坏	(13.0)	3.5	①細粒②良好③灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	9世紀中頃	39	
87	H-37	土 師 坏	(12.2)	3.2	①細粒②良好③橙④1/3	外傾。横撫で。範削り。	範削り。	底部に「万」「寸」の墨書	9世紀中頃	39
88	H-38	須 恵 坏	11.8	3.7	①細粒②良好③赤橙④ほぼ完形	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	酸化炎焼成による。	10世紀末	39
89	H-38	土 師 羽釜	(25.0) (16.3)	①中粒②良好③橙④1/8	直立。轆轤。	欠損。口縁部長く直立。鋸下方向き。	10世紀末	39		
90	H-38	灰釉高台椀	15.3	4.9	①微粒②極良③明オーリーブ灰④3/4	外傾。轆轤。	範調整。高台後付け。釉薬ドブ浸け。	10世紀末	39	
91	H-39	須 恵 羽釜	(17.6) (10.5)	①細粒②良好③浅黄④1/6	内傾。轆轤。	欠損。口縁部短く内傾。鋸三角。酸化炎焼成。	10世紀中頃	39		
92	A-3区 フクド	高台付長頸瓶	— (3.1)	①微粒④極良④灰黄④底部のごく一部	外傾。轆轤。	欠損。内面、外面に朱を塗った形跡あり。	9世紀後半	39		
93	B-1 表 探	須恵高台椀	— (3.5)	①細粒②良好③灰白④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切未調整。	高台後付け。高台内側接地。	9世紀終末	39	
94	D-78	土 師 壺	17.4 (20.0)	①細粒②良好③明赤褐④1/2	外反。横撫で。範削り。	欠損。	胴部に最大径をもつ。	7世紀後半	39	

注) 表の記載は以下の基準で行った。

- ① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0～1.9mm）、粗粒（2.0mm以上）とした。
- ② 焼成は、極良、良好、不良の三段階。
- ③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色貼（小山・竹原1976）によった。
- ④ 大きさの単位はcmであり、現存値を〔 〕、復元値を()で示した。

Tab. 4 鉄器・鉄製品観察表

番号	出土位置	器 形	長 さ	幅	厚 さ	残 存	備 考		
1	H-27	留 金 具	[6.0]	0.4	0.3	1 / 2	先端部、頭部欠損。緩い弧を持つ。		
2	H-17	刀 子	[4.2]	[1.4]	[0.5]	1 / 4	刃部のみ残存。先端部欠損。		
3	H-27	刀 子	[8.0]	1.7	0.5	2 / 3	先端・柄部分欠損。断面逆三角形。先端に向かい細くなる。		
4	H-31	鎌	[9.0]	1.2	0.5	2 / 3	緩い弧を描く。偏平化する。		
5	H-29	鎌	[8.0]	[7.1]	1.1	3 / 4	両先端部欠損。		
6	H-37	紡錘車	[4.5]	0.4	0.4	1 / 3	紡錘車の軸部分。断面ほぼ正方形。		
7	H-28	刀 子	[7.5]	1.4	0.4	1 / 2	先端部、柄部分欠損。断面逆三角形。茎部はやや細くなる。		
8	H-27	留 金 具	[8.7]	0.7	0.6	2 / 3	両先端部、頭部欠損。緩い弧を持つ。		
9	H-10	鎌	[7.3]	[2.7]	0.8	2 / 3	頭部欠損。先端部鉤状に曲がる。		
10	H-10	刀 子	[7.5]	1.6	0.5	1 / 3	先端部、柄部分欠損。断面逆三角形。茎部はやや細くなる。		
11	H-39	留 金 具	10.5	0.6	0.3	完 形	フック状の曲がり。偏平化する。		
12	A-3区	鉄 鎌	[7.4]	[4.0]	0.6	1 / 2	先端部雁又型。両先端部、柄部分欠損。		
13	H-27	刀 子	[11.6]	1.2	0.3	1 / 2	先端部、柄部分欠損。断面逆三角形。茎部はやや細くなる。		
14	H-32	未 製 品	[11.0]	2.0	0.6	不 明	鍛造前の原料鉄か？		
15	H-2	鎌	8.0	7.3	1.3	完 形	倒卵型。8つのスカシモンが入る。		
16	H-37	鉗	[7.9]	2.7	1.2	1 / 3	握り部分残存。		
17	H-10	鉄 鎌	13.3	5.5	1.3	完 形	先端部雁又型。		
18	H-38	紡錘車	[17.3]	4.7	0.3	完 形	軸の両先端を欠損。		
19	H-5	鎌	[18.1]	4.8	0.7	5 / 6	先端部欠損。柄の装着部に折り返しを有する。		
20	H-25	鎌	[12.0]	[3.1]	0.2	1 / 3	柄部分残存。柄の装着部に折り返しを有する。		

注) 表の記載で、大きさについての単位はcmであり、現存値は〔 〕で示した。

Tab. 5 石器・石製品・特殊遺物観察表

番号	出土位置	器種	長	幅	厚	重さ	石材	備考
1	H - 12	石鎌	2.7	1.3	0.4	2.4	黒色頁岩	有舌尖頭器。
2	H - 40	石鎌	[2.1]	[1.1]	0.3	0.4	黒色頁岩	凸器有茎鎌。
3	H - 28	石鎌	[2.9]	[1.7]	0.6	2.1	黒色頁岩	凹器無茎鎌。右基部欠損。
4	J - 1	石鎌	[3.4]	2.0	0.6	2.4	黒色頁岩	凹器無茎鎌。左右基部欠損。
5	J - 1	楔形石器	[2.2]	[1.7]	8.5	4.2	黒色頁岩	断面楔形。
6	J - 1	石鎌	[1.5]	1.7	0.2	0.5	黒色頁岩	凹器無茎鎌。先端部欠損。
7	J - 1	石錐	[4.1]	[1.3]	0.6	2.1	黒色頁岩	先端部欠損。
8	J - 1	臼玉	[1.9]	1.6	0.4	[2.4]	滑石	
9	A - 3 区	陶器	[4.1]	[2.4]	0.7	5.9	——	取手部分か。円形の穴があく。縁釉がかかる。
10	A - 3 区	陶器小皿	[3.9]	[2.9]	0.7	9.5	——	口縁部分。灰釉・緑釉がかかる二彩。
11	H - 14	土錘	4.3	2.4	2.1	21.4	——	
12	D - 40	紡錘車	5.1	5.0	0.9	16.8	——	土器底部転用の紡錘車。
13	B - 1 区 X29Y91	砥石	7.0	2.9	2.0	59.0	砥沢石	両端欠損。4面に使用痕が認められる。
14	H - 26	砥石	[3.6]	[2.9]	1.3	19.6	砥沢石	両端欠損。円孔を有する。裏・側面に使用痕を認める。携帯用として使用か?
15	H - 1	鉄帶	3.6	3.5	0.2	2.2	真鍮	巡方。四隅に径1mm程度の穴があく。
16	B - 1 区 X29Y91	砥石	2.2	1.5	0.9	3.0	砥沢石	全側面に使用痕が認められる。
17	H - 10	砥石	[4.8]	4.6	2.4	51.0	砥沢石	全側面に使用痕が認められる。
18	J - 1	削器	6.1	9.2	1.3	93.5	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。刃部を細かく調整。
19	J - 1	凹石	[15.3]	[8.5]	4.9	700.0	粗粒輝石安山岩	表面中央部に凹。
20	H - 37	羽口	12.5	8.3	8.1	700.0	——	円筒形。
21	D - 12	礫器	11.9	8.2	4.1	502.1	頁岩	刃部に細かい調整。刃部以外は自然面。
22	H - 34	打製石斧	7.5	4.8	1.3	44.2	黒色頁岩	表裏面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
23	A - 3 区	打製石斧	8.4	4.0	1.0	7.3	黒色頁岩	表面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
24	J - 1	叩石	8.6	4.8	1.1	80.5	緑色変岩	裏面に磨痕を残す。
25	J - 2	打製石斧	[6.6]	4.1	1.1	27.8	黒色頁岩	裏面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
26	A - 3 区	磨製石斧	[7.2]	4.3	2.4	133.0	緑色変岩	刃部残存。
27	H - 28	削器	8.8	6.9	1.2	69.0	黒色頁岩	表面に自然面を残す。両側縁を細かく調整。
28	J - 1	打製石斧	9.8	4.0	1.3	65.5	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。
29	J - 1	打製石斧	8.6	4.1	1.4	71.5	黒色頁岩	表面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
30	H - 10	打製石斧	10.5	5.4	1.5	110.5	黒色頁岩	左刃部欠損。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
31	H - 38	磨製石斧	[9.6]	4.4	2.3	145.0	緑色変岩	刃部欠損。
32	J - 1	打製石斧	12.1	4.7	1.1	78.0	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。
33	J - 2	打製石斧	15.1	5.2	2.0	190.0	黒色頁岩	両側縁から刃部にかけて細かい調整。
34	J - 1	削器	10.6	8.7	2.1	197.5	黒色頁岩	表面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
35	D - 81	打製石斧	9.4	6.9	1.8	165.5	黒色頁岩	分胴形。表面に自然面を残す。両側縁から刃部にかけて細かい調整。

注) 表の記載で、大きさと重さについての単位はcm, gであり、現存値は[]で示した。

Tab. 6 繩文式土器観察表

番号	出土位置	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	文様要素・文様構成・器形の特徴	備考
1	J - 1	①中粒②良好③明褐色④口縁	鉢。横位に粗い撫で。	堀之内 I
2	J - 1	①中粒②良好③にぶい褐色④胴部	平行沈線。浮線に連続爪形文による刻目。	諸磯 c
3	J - 1	①中粒②良好③にぶい褐色④口縁	繩文 (R L)。	諸磯 c 並行
4	J - 1	①中粒②良好③赤褐色④口縁	集合沈線。折返し口縁。口唇部横位の沈線。棒状貼付。	諸磯 c
5	J - 1	①中粒②良好③赤褐色④胴部	縱位集合沈線。	諸磯 c
6	J - 1	①中粒②良好③にぶい褐色④口縁～胴部	浅鉢。口唇部に刻目。平行沈線に格子状の刻目。胴部に突起。	五領ヶ台
7	J - 1	①中粒②良好③にぶい赤褐色④口縁	集合沈線。C の字状貼付。円形貼付。	諸磯 c
8	J - 1	①中粒②良好③暗赤褐色④胴部	集合沈線。棒状貼付。円形貼付。	諸磯 c
9	J - 1	①粗粒②良好③にぶい褐色④胴部	集合沈線。浮線に爪形文による刻目。	諸磯 c
10	J - 1	①中粒②良好③赤褐色④頸部	円管文。平行沈線。	諸磯 b
11	J - 1	①中粒②良好③暗褐色④胴部	三叉文。弧状を描く沈線区画内で平行沈線が格子状に交わる。	五領ヶ台
12	J - 1	①中粒②良好③にぶい褐色④口縁～胴部	浅鉢。胴部に 1 条の横位沈線。	諸磯 b
13	J - 1	①中粒②良好③橙④胴部	集合沈線。羽状沈線。	五領ヶ台
14	J - 1	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	繩文 (L)。平行沈線。	諸磯 b
15	J - 1	①細粒②良好③にぶい橙④胴部	刺突文と半截竹管による爪形文と沈線で文様を施文。	興津
16	J - 1	①中粒②良好③橙④口縁	爪形文。刺突文。口唇部凸凹状。	興津
17	J - 1	①中粒②良好③明赤褐色④底部	集合沈線。	諸磯 c
18	J - 1	①粗粒②良好③暗赤褐色④胴部	平行沈線。棒状貼付。円形貼付。	諸磯 c
19	J - 1	①中粒②良好③橙④口縁～頸部	羽状繩文。	諸磯 c 並行
20	J - 1	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	平行沈線による曲線を施文。	諸磯 b
21	J - 1	①中粒②良好③明赤褐色④胴部	沈線で直・曲線を施文。沈線区画間を磨消し繩文で充填。刻目のある隆帯。	称名寺 I
22	J - 1	①中粒②良好③橙④口縁	平行沈線。折返し口縁。口唇部斜位平行沈線。棒状貼付。C の字状貼付。円形貼付。	諸磯 c
23	J - 1	①中粒②良好③赤褐色④口縁	平行沈線。棒状貼付。C の字状貼付。二重円形貼付。耳たぶ状貼付。	諸磯 c
24	J - 1	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	平行沈線。浮線に爪形文による刻目。	諸磯 c
25	J - 1	①中粒②良好③浅黄褐色④口縁	沈線区画間を磨消し繩文 (L R) で充填。	称名寺 I
26	J - 2	①中粒②良好③明赤褐色④胴部	繩文 (R L)。半截竹管による平行沈線。	諸磯 b
27	J - 1	①中粒②良好③にぶい黄褐色④胴部	棒状貼付。円形貼付。沈線により施文。	諸磯 c
28	J - 1	①中粒②良好③明赤褐色④底部	平行沈線。	諸磯 c
29	J - 2	①中粒②良好③にぶい赤褐色④口縁	繩文 (R L)。折返し口縁。口唇部の平行沈線。横位集合沈線。	諸磯 b
30	J - 2	①粗粒②良好③赤褐色④胴部	繩文 (L R)。平行沈線。集合沈線により施文。	諸磯 b
31	D - 42	①中粒②良好③赤褐色④胴部	繩文 (R L)。平行沈線。連続爪形文。刺突文。	諸磯 b
32	D - 49	①中粒②良好③明赤褐色④胴部	連続爪形文。刺突文。	興津
33	D - 53	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	横位に 1 条の沈線。刺突文。	堀之内 I
34	D - 59	①中粒②良好③赤褐色④口縁	集合沈線。棒状貼付。C の字状貼付。円形貼付。口唇部に平行沈線。	諸磯 c
35	D - 76	①中粒②良好③橙④胴部	縱位微隆起線による文様区画に 0 段多条繩文 (R L)。	加曾利 E IV
36	D - 73	①中粒②良好③にぶい赤褐色④胴部～底部	繩文 (L R)。	諸磯 b
37	D - 73	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	沈線で直・曲線を施文。沈線区画間を磨消し繩文で充填。	称名寺 I
38	O - 1	①中粒②良好③にぶい黄褐色④胴部	微隆起線による区画に 0 段多条繩文 (R L)。	加曾利 E IV
39	O - 1	①中粒②良好③にぶい黄褐色④口縁	沈線で文様を施文。羽状繩文。	黒浜
40	O - 1	①中粒②良好③明褐色④胴部	羽状繩文。	黒浜
41	O - 1	①中粒②良好③にぶい褐色④胴部	沈線区画間を磨消し繩文 (R L) で充填。	加曾利 E IV
42	O - 1	①中粒②良好③にぶい橙④胴部	沈線で文様を施文。沈線区画間を磨消し繩文 (L R) で充填。縱位隆帯。	称名寺 I
43	O - 1	①中粒②良好③橙④胴部	沈線で区画し沈線間を繩文 (L R) で充填。	堀之内 II
44	O - 2	①中粒②良好③浅黄褐色④胴部	隆帯文。幅の広い羽状沈線文。	加曾利 E II
45	O - 1	①中粒②良好③にぶい黄褐色④口縁	沈線で文様を施文。沈線区画間を磨消し繩文 (L R) で充填。折返し口縁。口縁部に飾り。	称名寺 I

番号	出土位置	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	文 様 要 素 ・ 文 様 構 成 ・ 器 形 の 特 徴	備 考
46	H - 2	①中粒②良好③明赤褐④胴部	刻目のある隆帯。隆帯による区画に沈線で施文。	加曾利E II
47	H - 3	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部	縦位平行沈線。	加曾利E II
48	H - 4	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線で文様施文し沈線間を繩文（L R）で充填。	堀之内 II
49	H - 6	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	縦位沈線文。列点刺突文。	称名寺 II
50	H - 7	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線文区画の間に列点刺突文。	称名寺 II
51	H - 10	①中粒②良好③橙④底部	網代。	堀之内 I
52	H - 11	①細粒②良好③灰褐④口縁～胴部	沈線文区画間に磨消し刺突文。口縁部棒状貼付。円形刺突文。	諸磯 b
53	H - 12	①細粒②良好③赤褐④口縁	磨消し繩文（R L）。	諸磯 b
54	H - 12	①中粒②良好③浅黄橙④口縁	沈線で文様施文し沈線間を繩文（L R）で充填。	堀之内 II
55	H - 13	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	8の字状貼付。沈線で文様施文。円形刺突文。	堀之内 II
56	H - 15	①中粒②良好③赤褐④胴部	繩文（R L）。刻目のある横位浮線。	諸磯 b
57	H - 15	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	隆帯に刻み目。	堀之内 II
58	H - 16	①粗粒②良好③にぶい赤褐④口縁	繩文（L R）。折返し口縁。口唇部の集合沈線。平行沈線。集合沈線。	諸磯 b
59	H - 16	①中粒②良好③にぶい褐④胴部	繩文（L）。円管文。平行沈線。集合沈線。	諸磯 b
60	H - 17	①中粒②良好③明赤褐④口縁～口縁部飾り	繩文（R L）。粘土突起貼付。集合沈線で文様を施文。	諸磯 b
61	H - 24	①中粒②良好③橙④口縁	隆帯に刻目。沈線で文様施文し沈線間を磨消し繩文（L R）で充填。	堀之内 II
62	H - 24	①中粒②良好③黒④胴部	沈線で文様施文し沈線間を繩文（R L）で充填。	堀之内 II
63	H - 26	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	沈線を格子状に施文。	諸磯 b
64	H - 27	①中粒②良好③にぶい黄褐④胴部	沈線で文様施文し沈線間を繩文で充填。	堀之内 II
65	H - 28	①中粒②良好③にぶい赤褐④底部	沈線で文様。半截竹管による爪形文。	五領ヶ台
66	H - 28	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線で文様を施文し間を刺突文で充填。	諸磯 b
67	H - 28	①中粒②良好③黒褐④口縁	隆帯に刻み目。8の字状貼付。	堀之内 II
68	H - 28	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部	波状沈線文。縦位沈線。	五領ヶ台
69	H - 30	①中粒②良好③にぶい黄褐④口縁	注口土器。無文。口唇部円形貼付。口唇部に沈線で施文。	堀之内 I
70	H - 30	①中粒②良好③黒褐④取手部分	注口土器。Cの字状取手貼付。渦巻き文。	堀之内 I
71	H - 30	①中粒②良好③浅黄橙④胴部	沈線で文様施文し沈線間は繩文で充填。	堀之内 II
72	H - 34	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	繩文（R L）。集合沈線。	諸磯 b
73	H - 38	①中粒②良好③褐灰④口縁	隆帯に刻み目。8の字状貼付。沈線で文様施文し沈線間を繩文（L R）で充填。	堀之内 II
74	X52, Y75	①中粒②良好③橙④胴部	沈線で文様施文し沈線間を磨消し繩文で充填。	堀之内 II
75	X55, Y75	①粗粒②良好③橙④胴部	繩文（R L）。刻目のある縦位・横位浮線。	諸磯 b
76	X55, Y75	①中粒②良好③にぶい赤褐④胴部	繩文（R L）。	諸磯 b
77	A - 2 区	①中粒②良好③浅黄橙④胴部	条線による曲線。コンパス文。	加曾利E III
78	A - 2 区	①中粒②良好③灰黄褐④胴部	沈線区画間を磨消し繩文と平行沈線で施文。	堀之内 II
79	A - 2 区	①中粒②良好③にぶい橙④口縁部飾り	渦巻き状突起。	堀之内 I
80	A - 3 区	①中粒②良好③橙④口縁部飾り	渦巻き文。円柱形の突起。	堀之内 I
81	A - 3 区	①中粒②良好③にぶい黄橙④胴部	沈線区画間を磨消し繩文（L R）で充填。	称名寺 I

注) 表の記載は以下の基準で行った。

① 胎土は、細粒（0.9mm以下）、中粒（1.0mm～1.9mm以下）、粗粒（2.0mm以上）とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。

② 焼成は、極良・良好・不良の三段階。

③ 色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色貼（小山・竹原1976）によった。

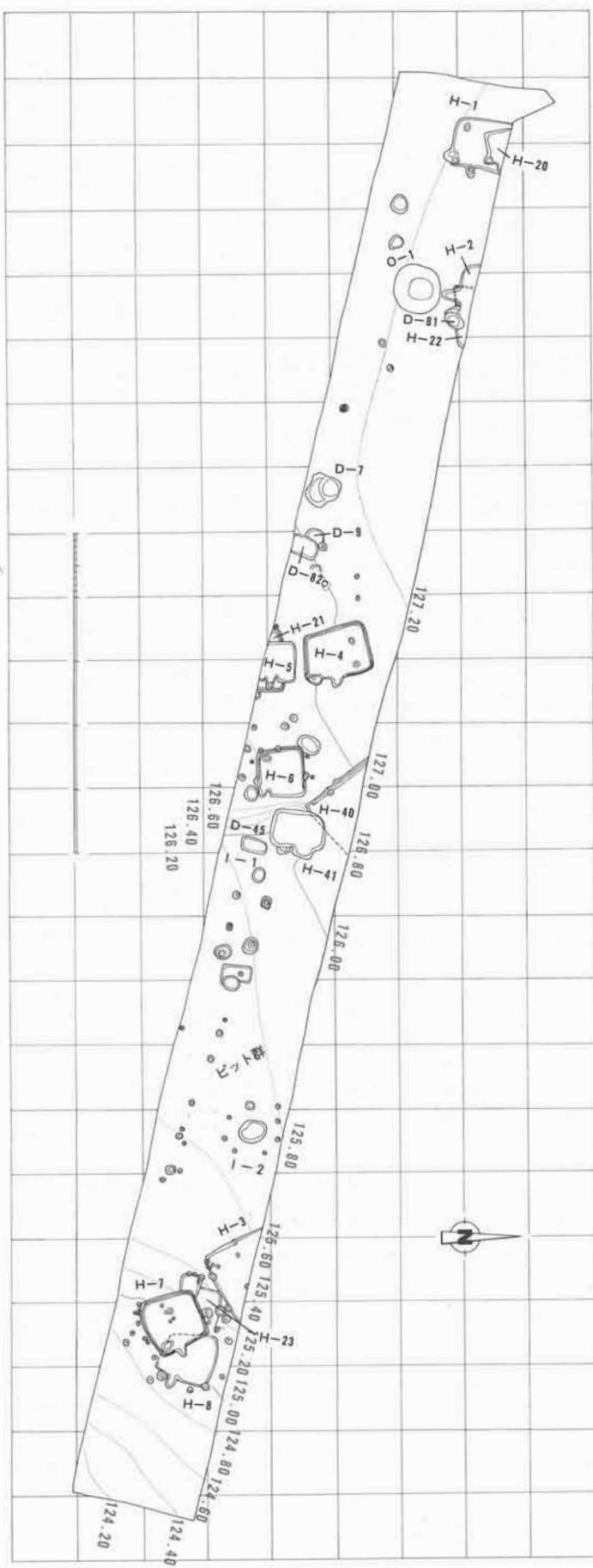


Fig. 11 遺跡・遺構全体図 (B-1 区)

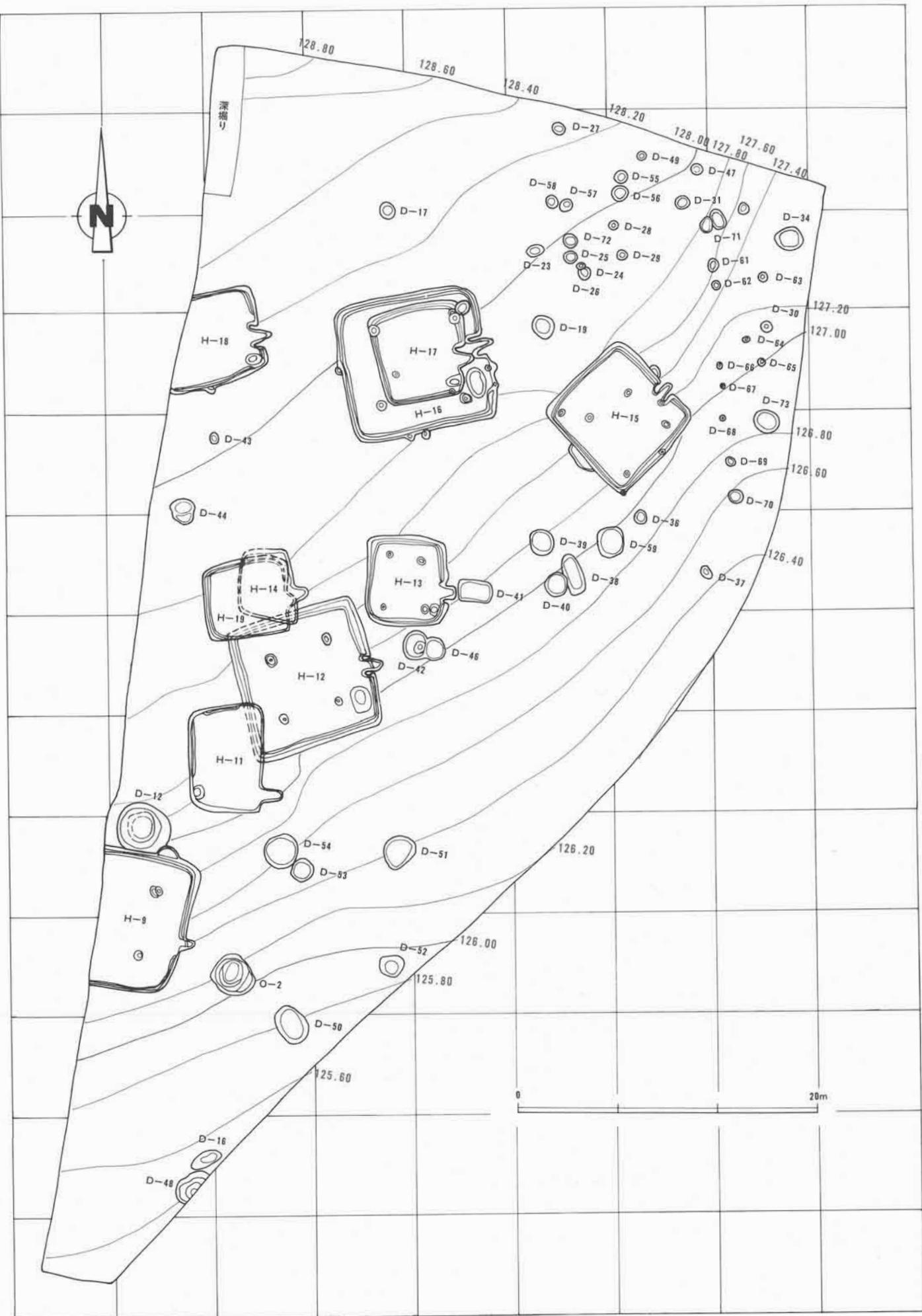


Fig. 12 遺跡・遺構全体図 (A-2 区)

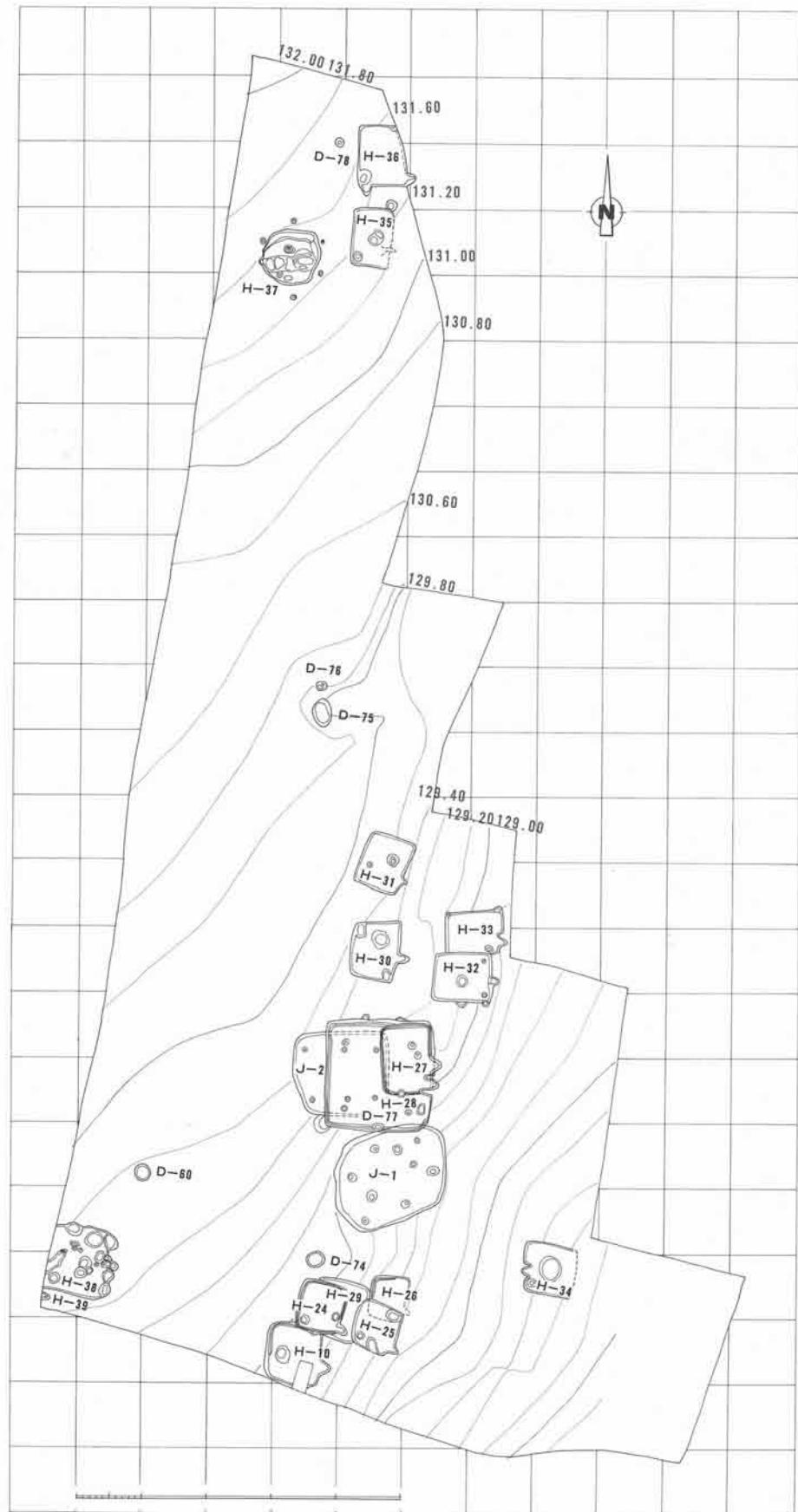
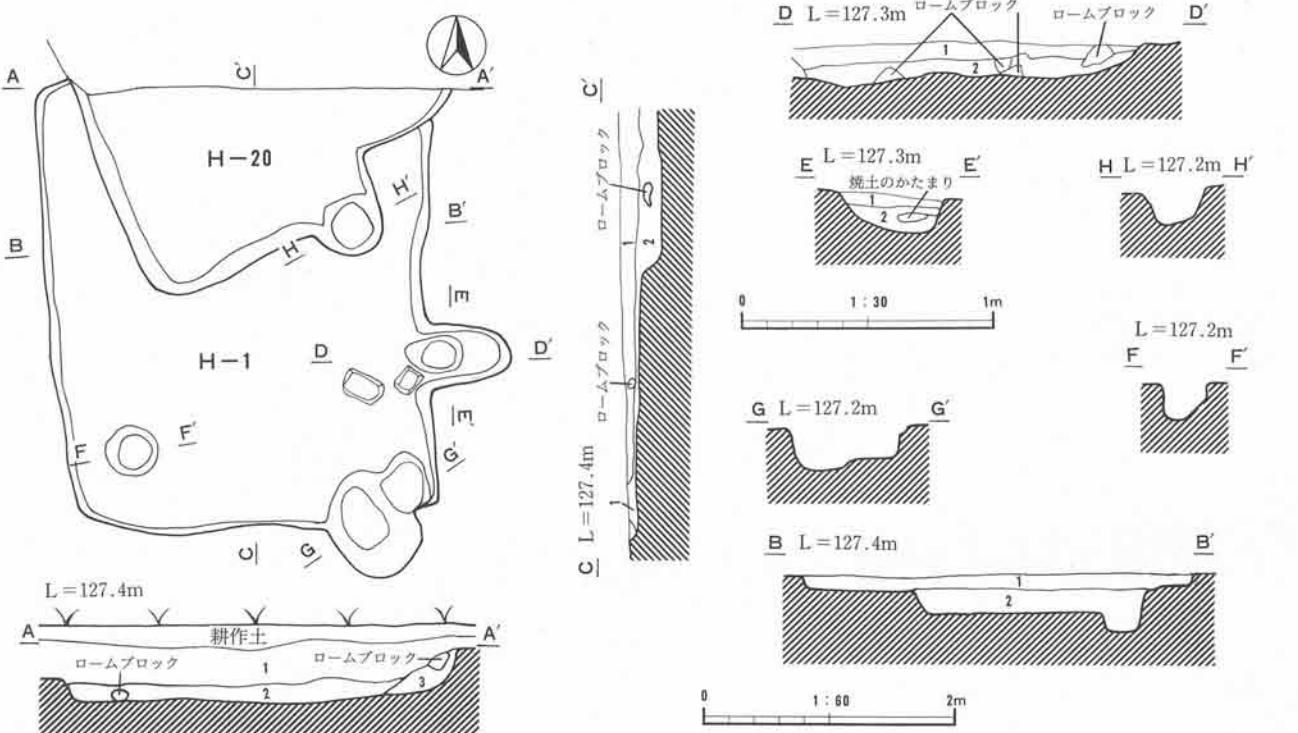


Fig. 13 遺跡・遺構全体図 (A-3区)



H-20 カマドセクション

1 層 にぶい赤褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP極少、
φ5mm程度のローム粒を含む。

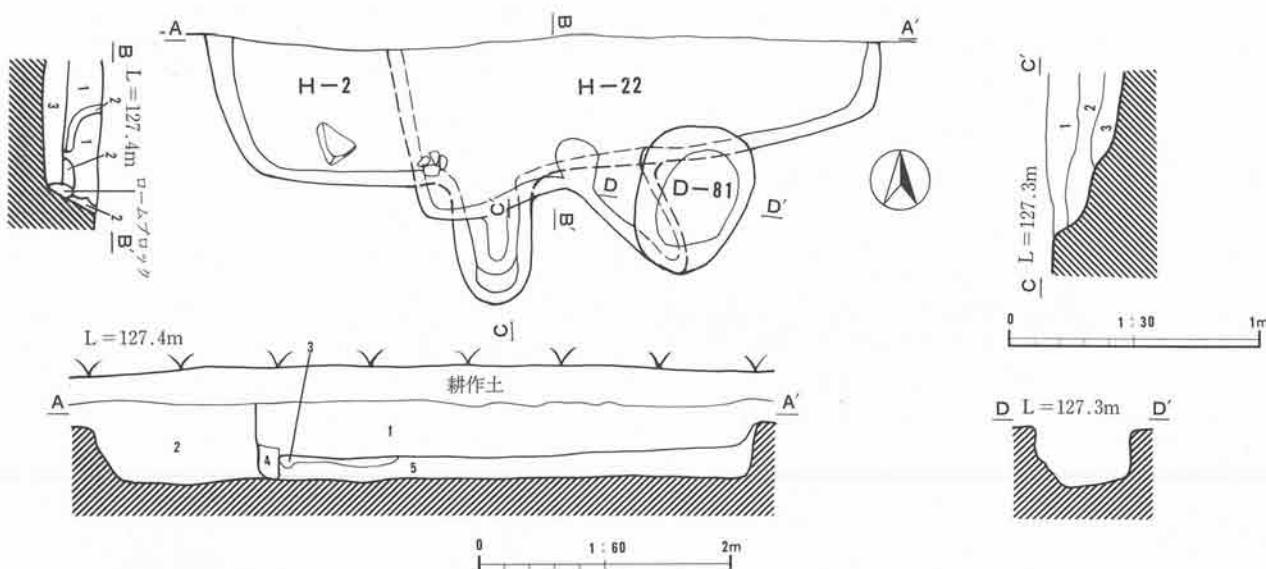
2 層 暗赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、炭化物、ローム粒を含む。
3 層 赤褐色細砂層 焼土粒40%、φ 3～5cmのロームブロックを含む。

H-1・20 セクション

1 層 暗赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP10%、ローム粒少量含む。
2 層 暗赤褐色細砂層 As-C 5%、Hr-FP極少、
φ 5～10cmのロームブロック、焼土粒を含む。

H-1 カマドセクション

1 層 暗赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP10%、ローム粒少量含む。
2 層 暗赤褐色細砂層 As-C 5%、Hr-FP極少、
φ 5～10cmのロームブロック、焼土粒を含む。



H-2・22 セクション

1 層 暗褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP20%、
φ10～30mmのローム粒を多量に含む。
2 層 暗褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP30%、炭化物20%、
φ 5～30mmのローム粒を含む。
3 層 明褐色細砂層 ローム主体。貼り床として使用か?
4 層 褐色微砂層 ローム粒を含む。やや粘性強い。
5 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、炭化物20%を含む。

H-2 カマドセクション

1 層 にぶい赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、φ 5～10mmの焼土粒を含む。
2 層 赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、焼土粒、ローム粒を含む。
3 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒・ローム粒・炭化物を少量含む。

H-5 カマドセクション

1 層 黒褐色細砂層 As-C極少、ロームを多量に含む。
2 層 黒褐色細砂層 As-C極少、2～10mmのロームブロックを含む。
3 層 赤褐色細砂層 焼土粒主体。ロームブロック・黒色土が若干混ざる。
4 層 にぶい赤褐色細砂層 焼土粒主体。ロームが混ざる。

Fig. 14 H-1, 2, 20, 22号住居址、D-81号土坑

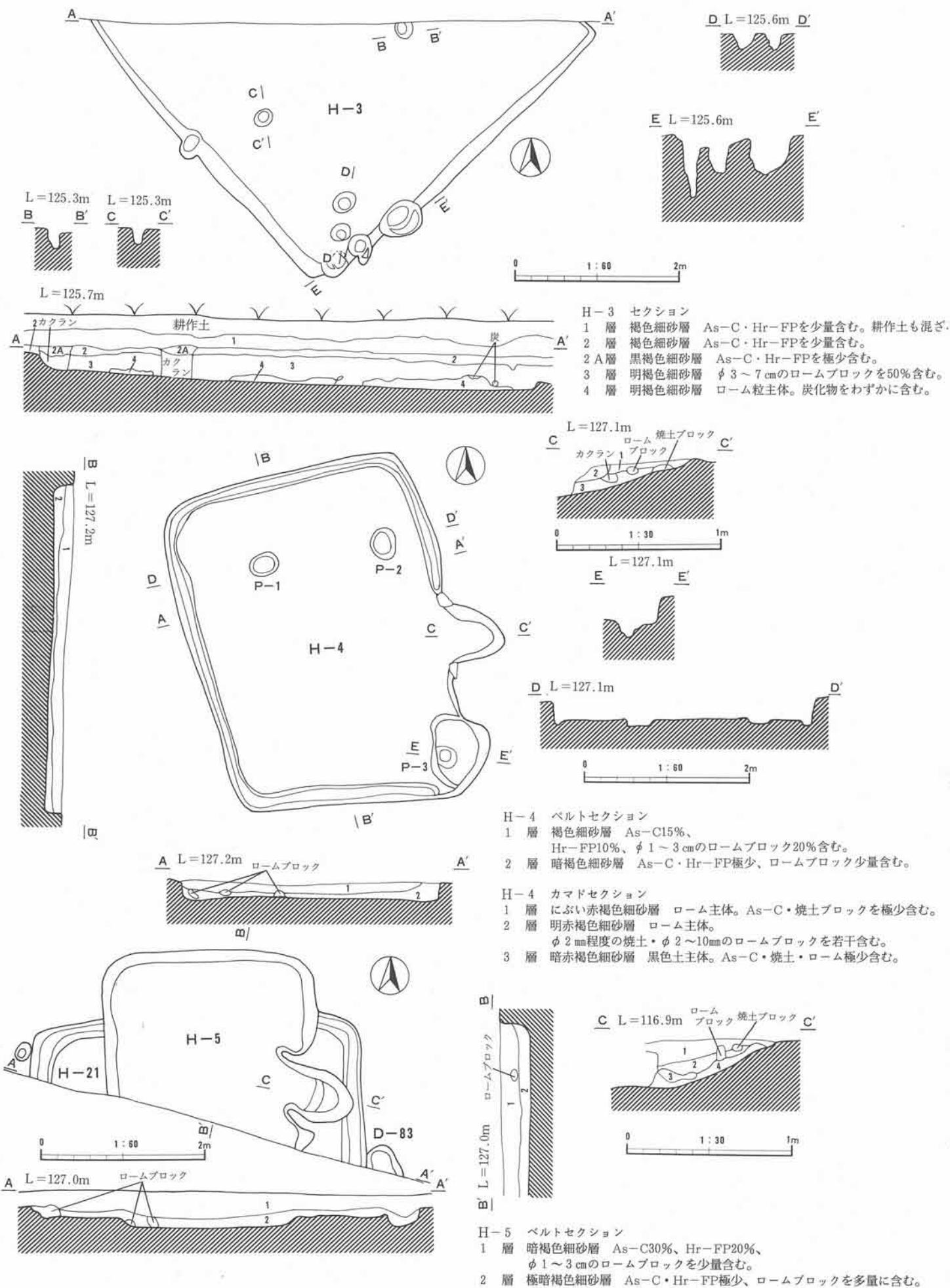


Fig. 15 H-3, 4, 5 • 21号住居址、D-83号土坑

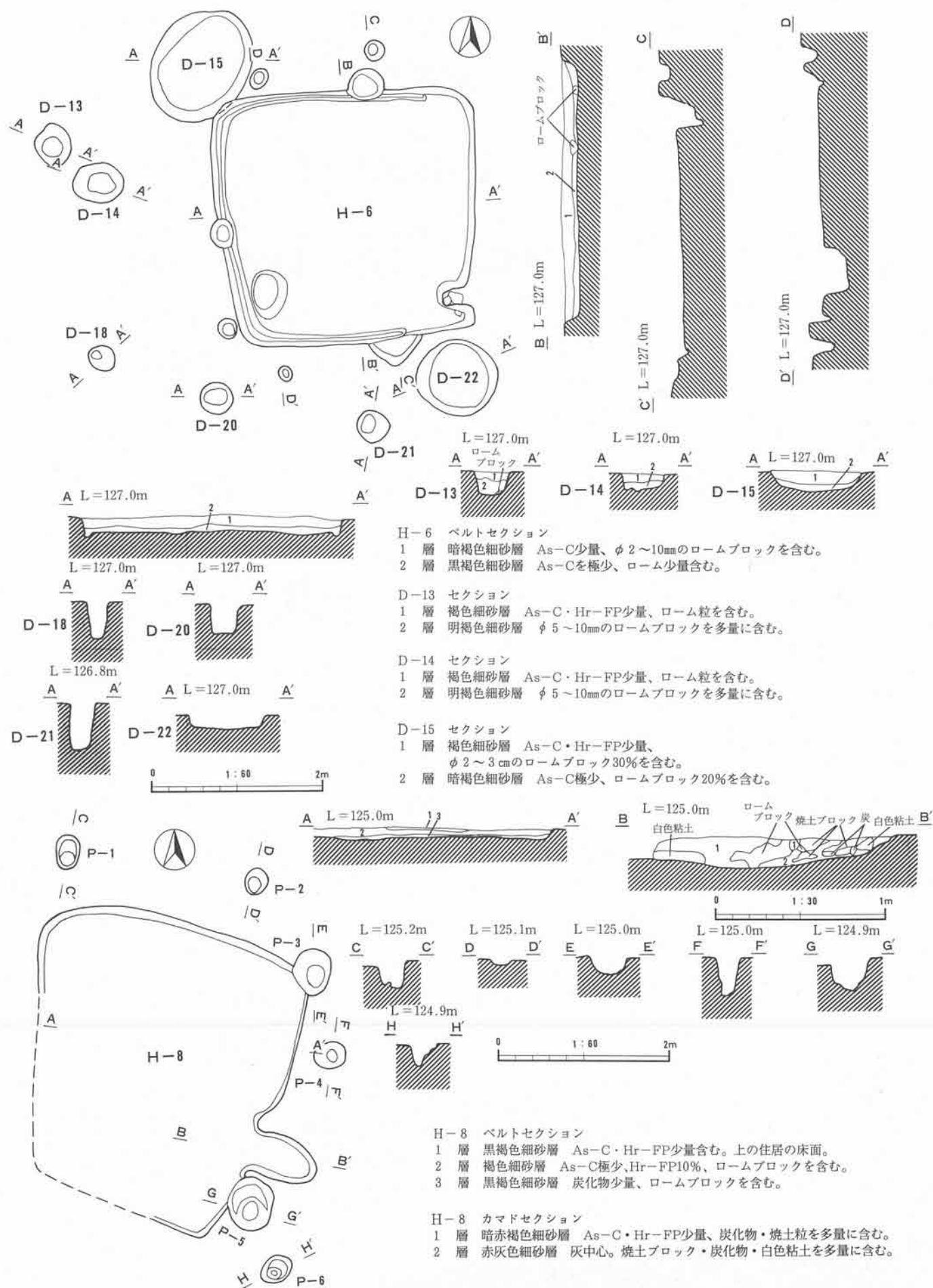


Fig. 16 H-6, 8号住居址、D-13, 14, 15, 18, 20, 21, 22号土坑

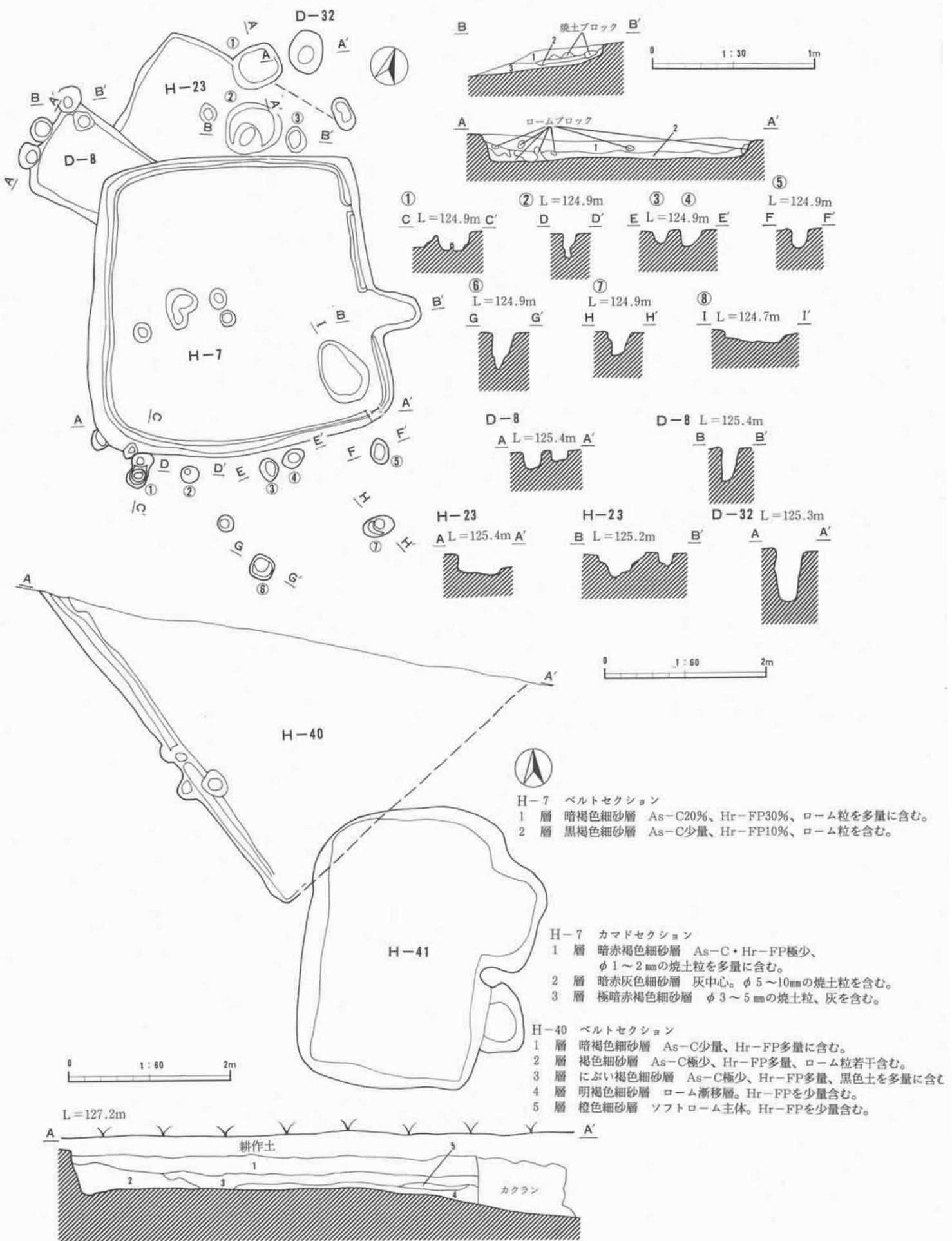


Fig. 17 H-7 • 23, 40 • 41号住居址、D-8, 32号土坑

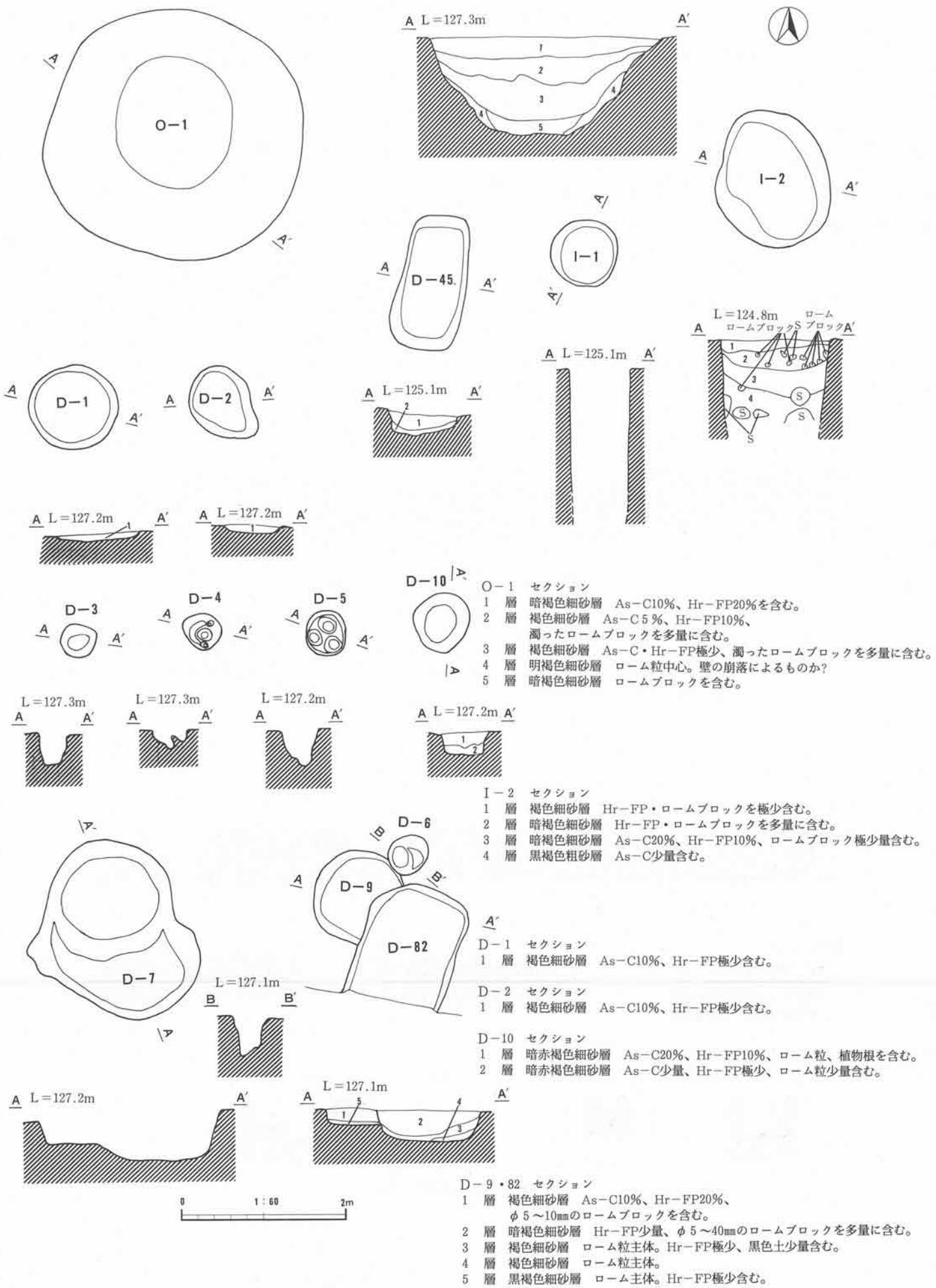


Fig. 18 O-1号落込み、I-1, 2号井戸址、D-1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 9, 10, 45, 82号土坑

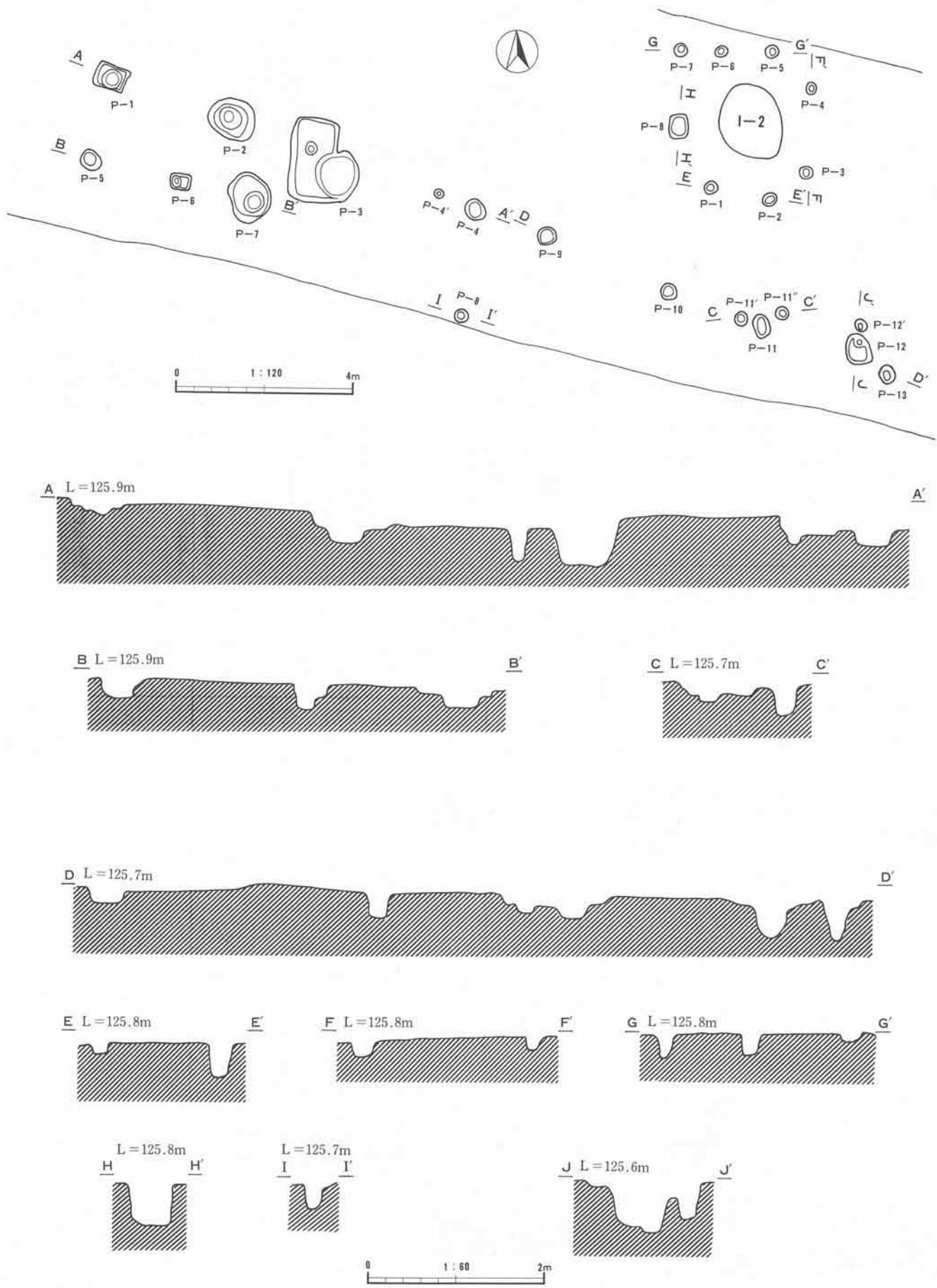
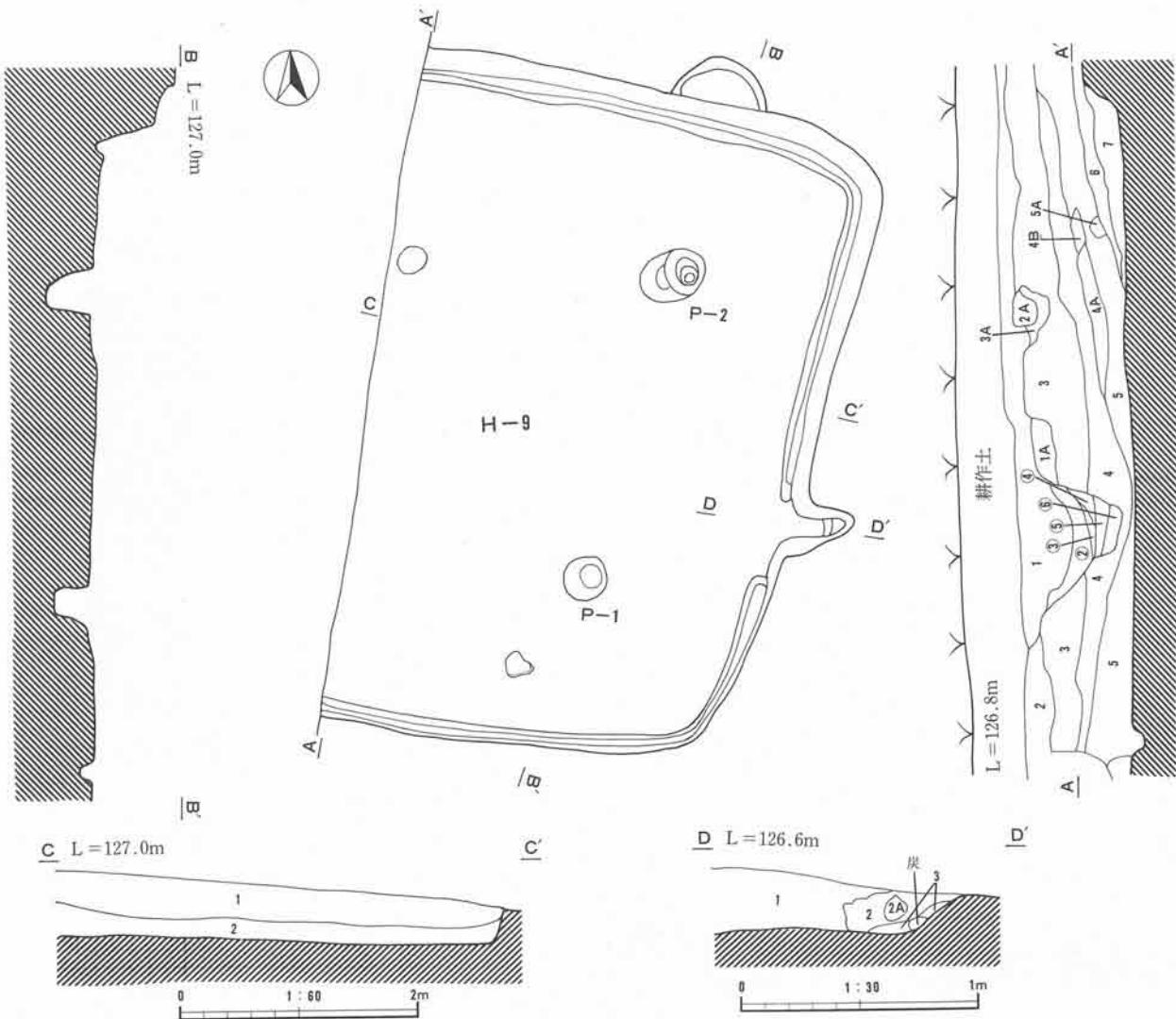


Fig. 19 B-1区 ピット群



5 層 極暗褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP 5%。
 5 A 層 褐色細砂層 5層よりやや褐色になる。
 6 層 暗褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP極少を含む。
 7 層 暗褐色細砂層 As-C少、 ϕ 3～5 cmのロームブロックを含む。
 ② 層 褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP少量、 ϕ 3～7 cmの土塊ブロック30%を含む。
 ③ 層 暗褐色細砂層 As-C 5%、Hr-FP極少を含む、しまりなし。
 ④ 層 暗褐色細砂層 As-C 5%、しまりなし。
 ⑤ 層 暗褐色細砂層 As-C10%、ローム粒・焼土粒を含む。
 ⑥ 層 褐色細砂層 ϕ 3～5 cmのロームブロック50%、焼土粒・炭化物を含む。

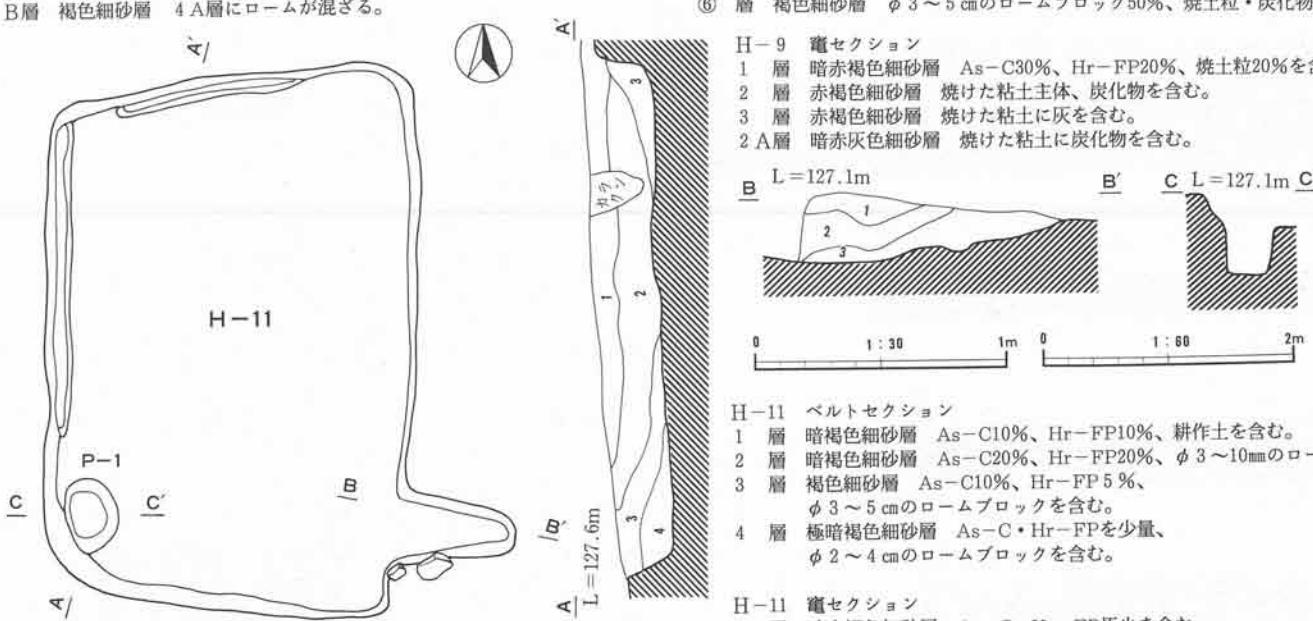
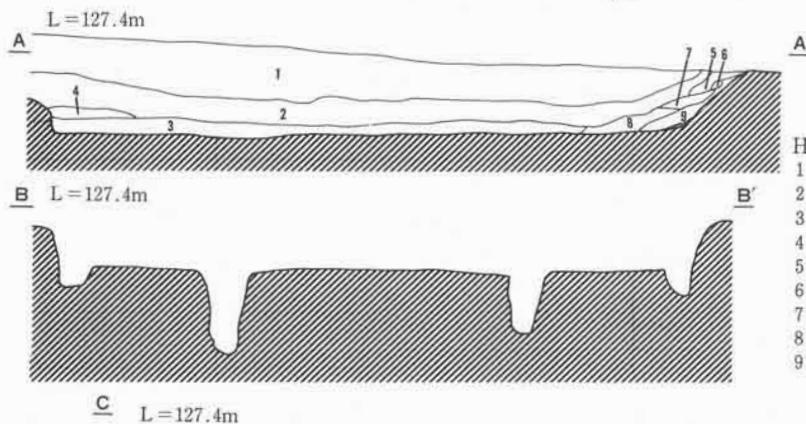
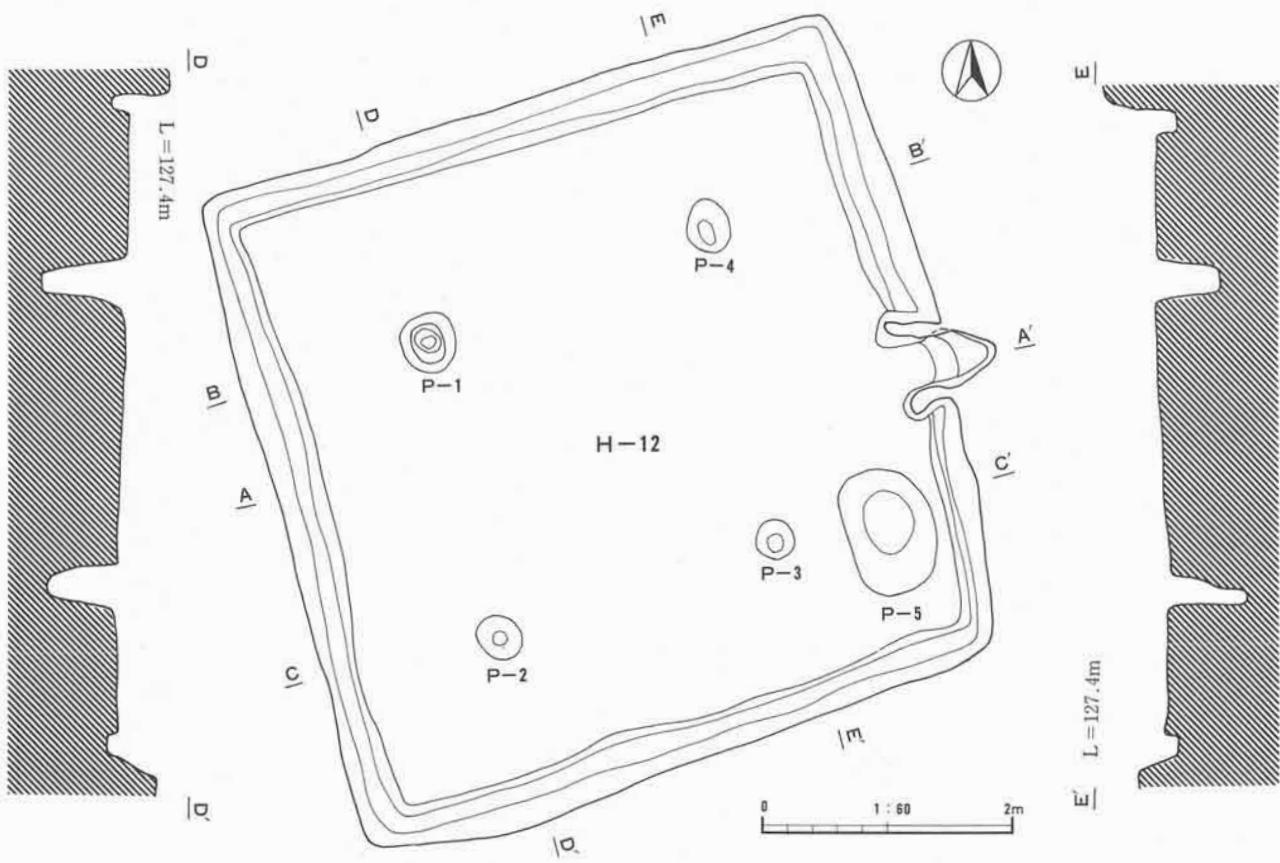


Fig. 20 H-9, 11号住居址

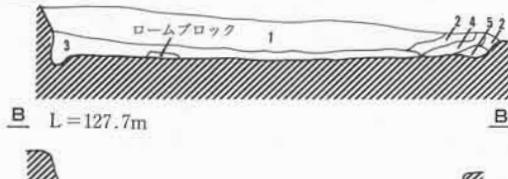


H-12 ベルトセクション・竪セクション
 1 層 暗褐色細砂層 ϕ 2 ~ 30mmのHr-FP軽石を多量に、ロームブロックも含む。
 2 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FPを少量、ロームブロックを少量含む。
 3 層 黒褐色細砂層 As-C少量、ローム粒を含む。
 4 層 極暗褐色細砂層 As-C・Hr-FPを極少、ローム粒を極少含む。
 5 層 にぶい赤褐色細砂層 ローム主体、 ϕ 2 ~ 10mmの焼土ブロックを少量含む。
 6 層 黒褐色細砂層 黒色土。
 7 層 赤褐色細砂層 炭化物を極少、焼土ブロックを含む。
 8 層 暗赤褐色細砂層 焼土ブロックを多量、ロームブロックを極少含む。
 9 層 暗赤褐色細砂層 烧土を多量に含む。

C L = 127.4m



A L = 127.1m



B L = 127.7m

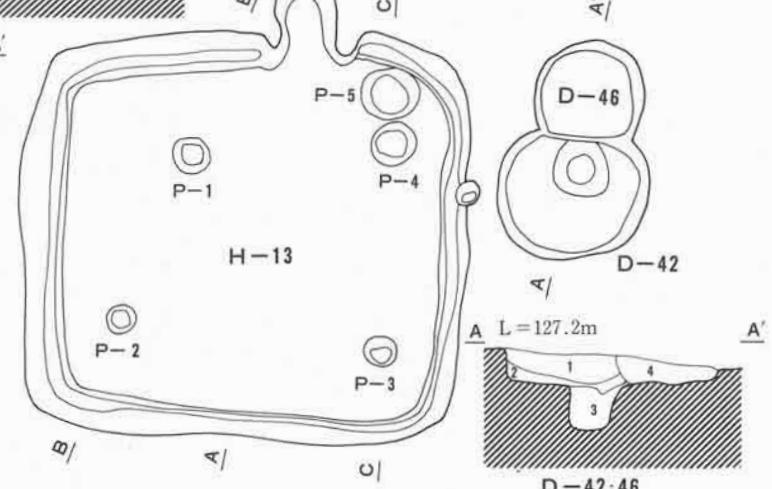
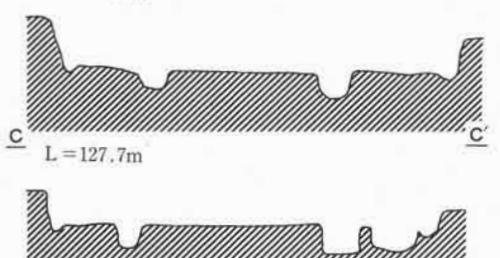
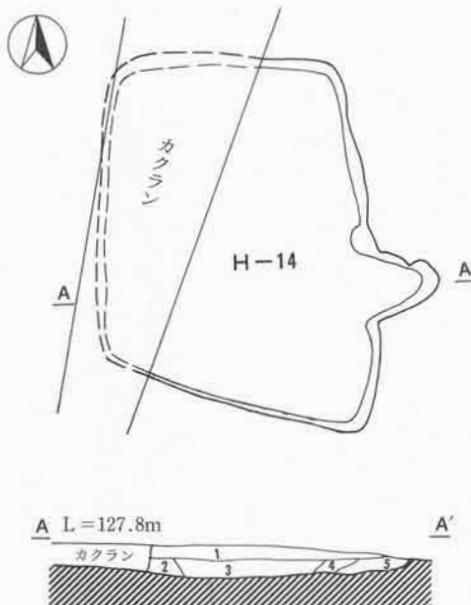
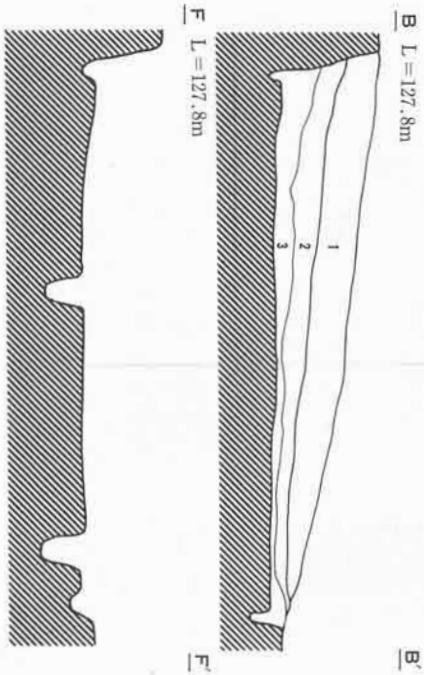


Fig. 21 H-12, 13号住居址、D-41, 42, 46号土坑

H-13 ベルトセクション
 1 層 褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP30%、ローム粒少量を含む。
 2 層 褐色細砂層 As-C 5%、Hr-FP10%、焼土粒を含む。
 3 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FPを少量、ローム粒を含む。
 4 層 暗赤褐色細砂層 焼けた粘質土層主体。
 5 層 赤褐色細砂層 焼土ブロック、焼けた粘質土層を含む。

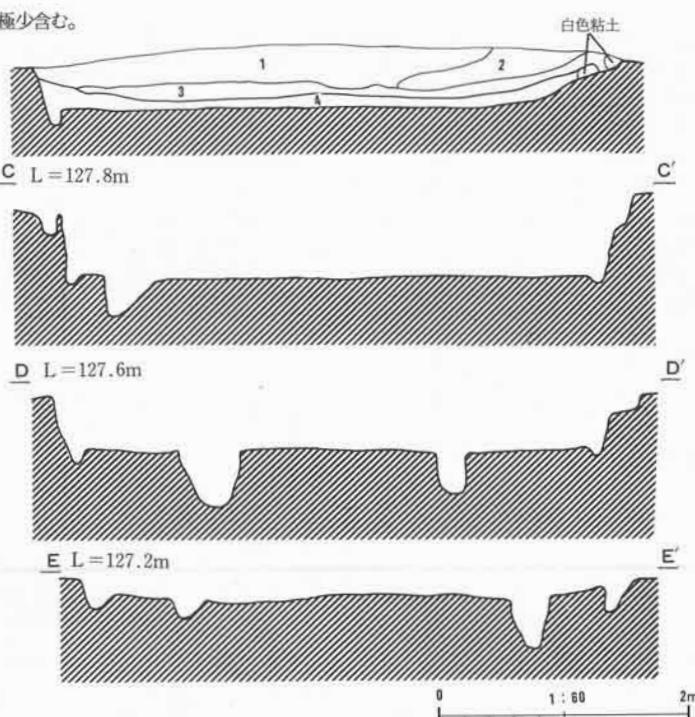
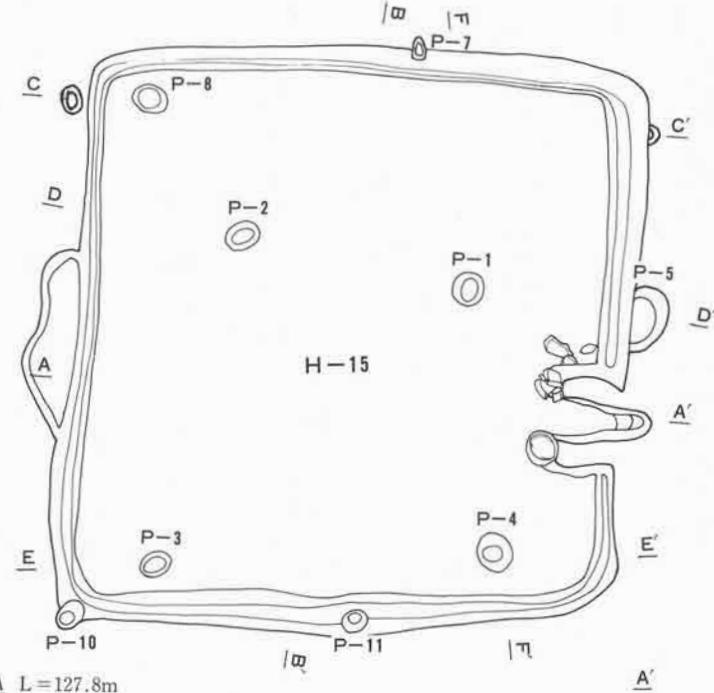


H-14 ベルトセクション
 1 層 暗褐色細砂層 Hr-FPを少量含む。
 2 層 暗褐色細砂層 As-Cを若干、Hr-FPを多量に含む。
 3 層 黒褐色細砂層 As-Cを極少、Hr-FPを少量、
 焼土ブロックとロームブロックを若干含む。
 4 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FP・焼土ブロック・ロームブロックを極少含む。
 5 層 明赤褐色細砂層 竈部分。黄色粘土主体、焼土が多量に混ざる。



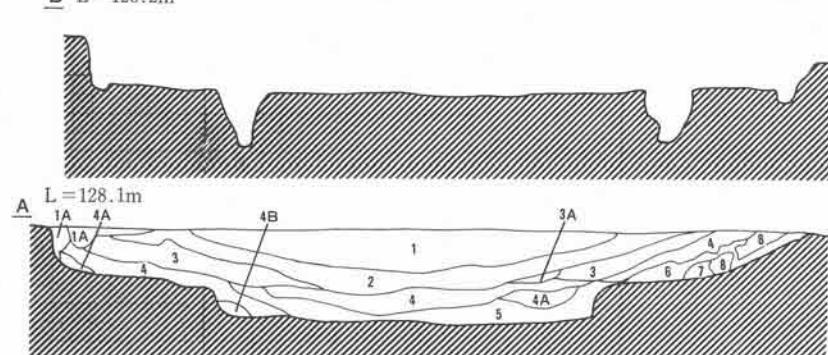
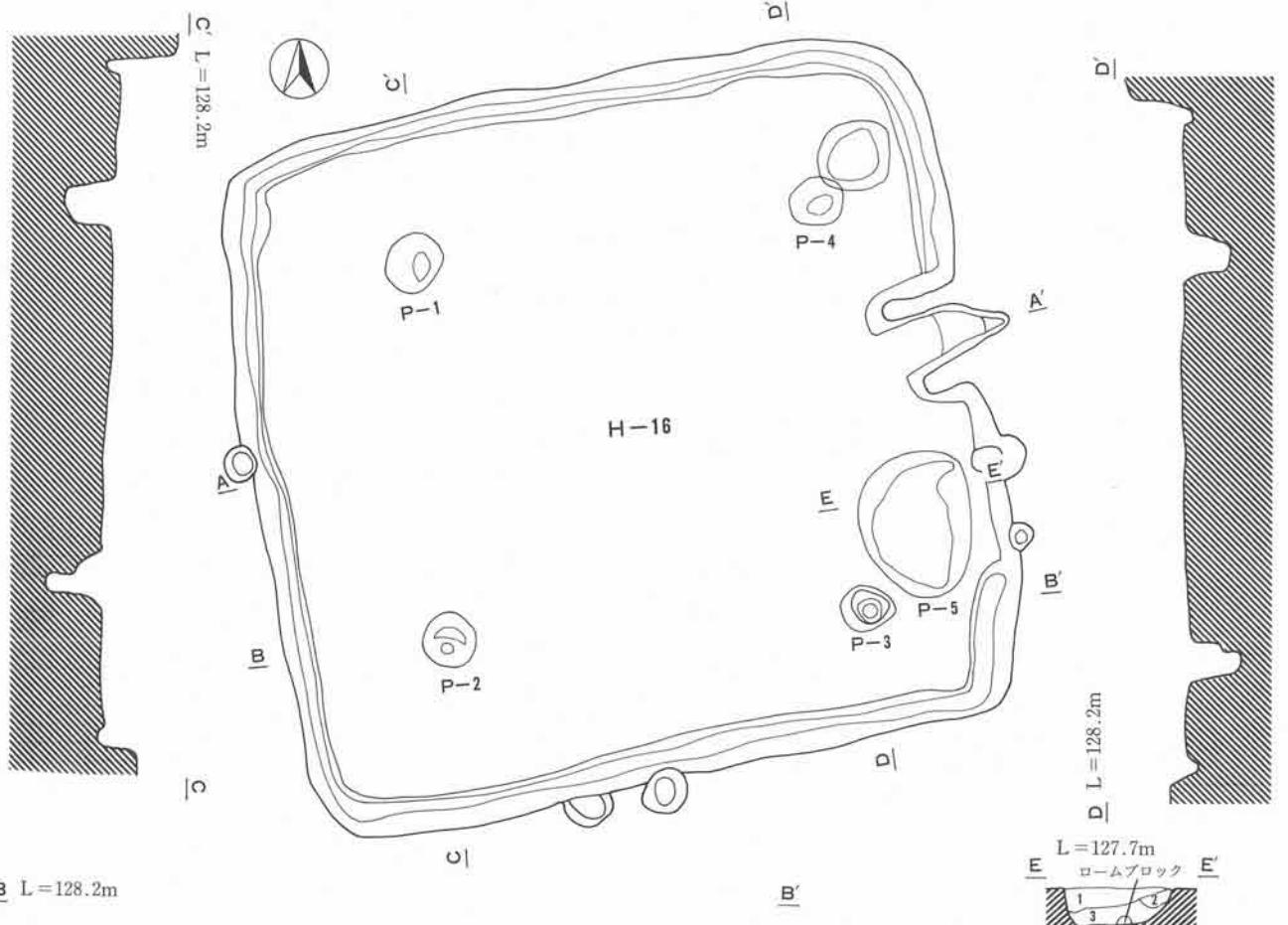
D-41
 1 層 暗褐色細砂層 Hr-FPを少量含む。
 2 層 褐色細砂層 ローム主体。

D-42・46 セクション
 1 層 暗褐色細砂層 ϕ 1 ~ 8 mmのHr-FP軽石を少量、
 ϕ 5 ~ 20mmのロームブロックを多量に含む。
 2 層 黒褐色細砂層 As-Cを極少、ローム粒を多量に含む。
 3 層 褐色細砂層 ローム粒主体。
 4 層 黒褐色細砂層 As-Cを多量、 ϕ 10mm程度のロームブロックを若干含む。



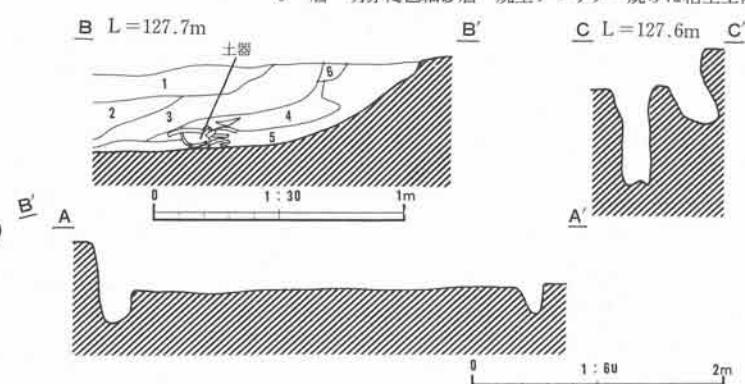
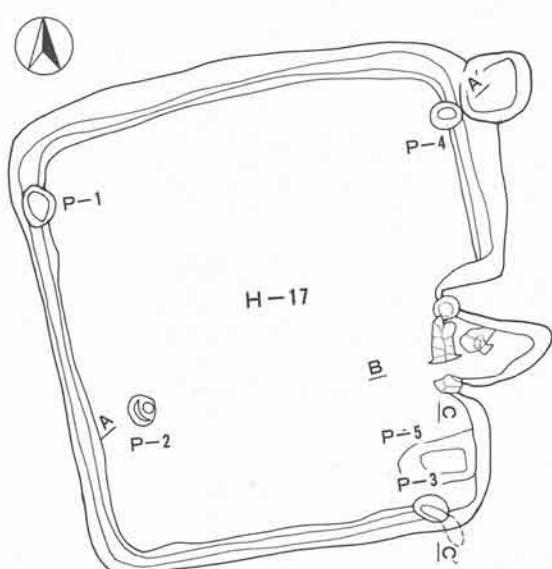
H-15 ベルトセクション
 1 層 褐色細砂層 As-C30%、Hr-FP10%、ローム粒30%を含む。
 2 層 褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP10%、ロームブロックを含む。
 3 層 褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP 5%、炭化物を少量、
 ローム粒・ロームブロックを含む。
 4 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FPを少量含む。
 ※竈について、未使用なのか、焼土等全く見られない。

Fig. 22 H-14, 15号住居址



H-16・17 ベルトセクション

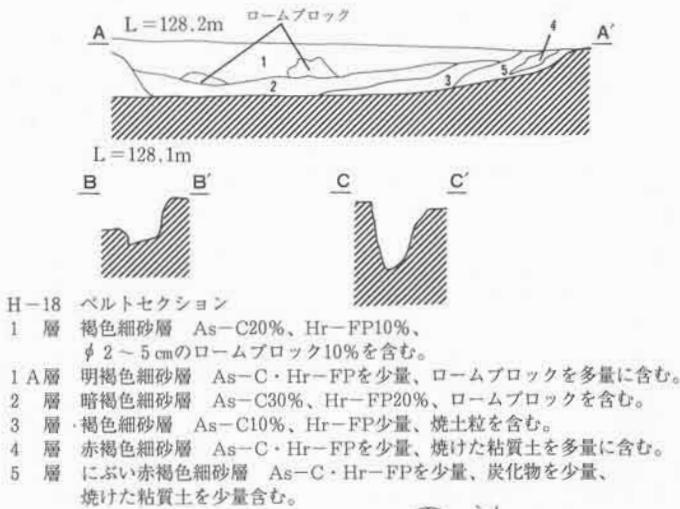
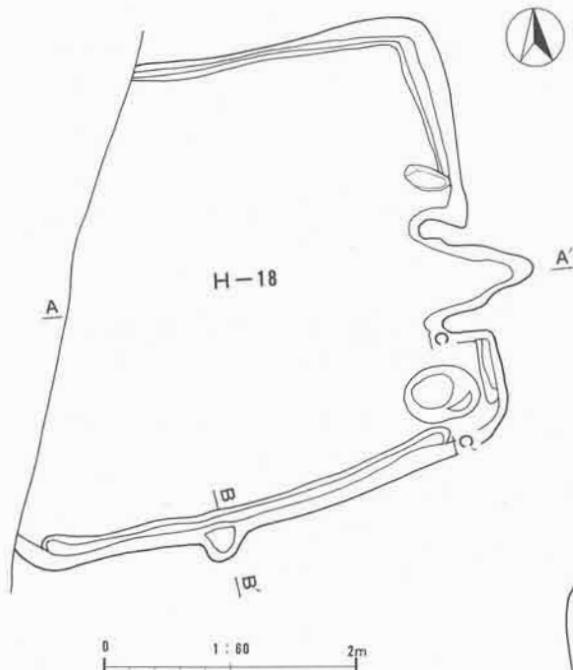
1 層 褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP20%、ローム粒を少量含む。
 1A層 明褐色細砂層 ϕ 3～7 cm のロームブロック50%を含む。
 2 層 褐色細砂層 As-C30%、Hr-FP30%、ローム粒20%を含む。
 2A層 褐色細砂層 2層よりやや黒みをおびる。
 3 層 褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP20%、炭化物を少量含む。
 3A層 暗褐色細砂層 3層より炭化物を含み、やや黒みをおびる。
 4 層 暗褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP10%、炭化物・焼土粒を少量含む。
 4A層 明褐色細砂層 4層にローム粒を含む。
 4B層 暗褐色細砂層 4層より焼土粒が若干増える。
 5 層 黒褐色細砂層 As-C・Hr-FPを少量、 ϕ 3～5 cm の炭化物10%
 6 層 赤褐色細砂層 As-C 5%、Hr-FP10%、焼土粒40%、
 焼土ブロックを含む。
 7 層 暗赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP少量、焼土粒多量、粘質土を含む。
 8 層 明赤褐色細砂層 焼土ブロック・焼けた粘土主体。



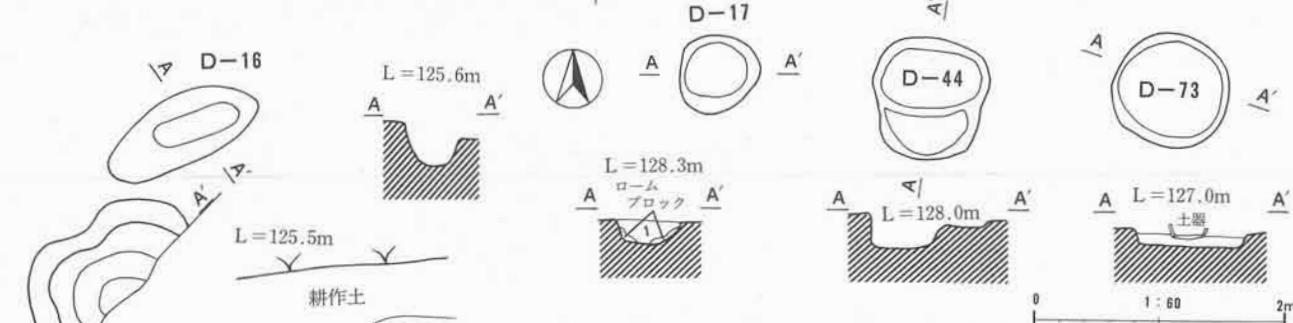
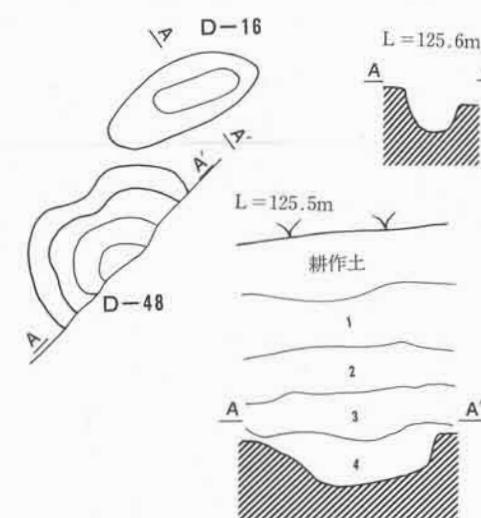
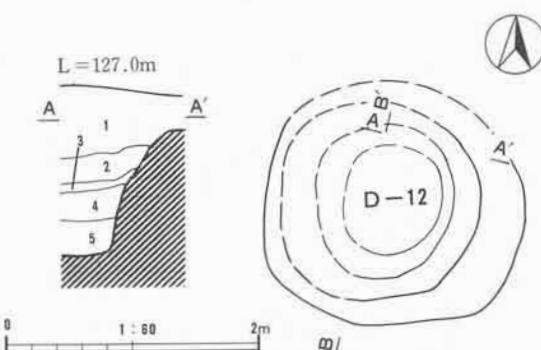
H-17 窯セクション

1 層 褐色細砂層 ϕ 2 mm程度のHr-FP軽石を少量含む。
 2 層 明褐色細砂層 Hr-FPを少量、炭化物を含む。
 3 層 橙色細砂層 Hr-FP・焼土ブロック・炭化物を少量含む。
 4 層 赤褐色細砂層 Hr-FPを極少、焼土を多量に含む。
 5 層 赤褐色細砂層 焼土主体。
 6 層 にぶい赤褐色細砂層 黒色土と黄色土が混ざる。焼土を若干含む。

Fig. 23 H-16, 17号住居址



19 ベルトセクション
層 暗褐色細砂層 Hr-FPを少量、ローム粒を極少含む。
層 褐色細砂層 Hr-FPを極少、ロームを多量、焼土ブロックを少量含む。
層 明褐色細砂層 ソフトローム主体。黒色土が混ざる。
層 黒褐色細砂層 Hr-FPを少量、 ϕ 2 ~ 30mmの焼土ブロックを含む。
層 橙色細砂層 ローム主体。黒色土が混ざる。



D-48 セクション
1 層 暗褐色細砂層 As-C40%、Hr-FP30%、ローム粒30%を含む。
2 層 暗褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP10%、ローム粒を含む。
3 層 極暗褐色細砂層 As-C・Hr-FPを極少、有機質を含む。
4 層 黒褐色微砂層 粘性が極めて強い黒褐色土。

D-17 セクション
1 層 褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP 5 %、炭化物 5 %を含む。

D-73 埋め甕セクション
1 層 黒色細砂層 黒色土主体。

Fig. 24 H-18, 19号住居址、D-12, 16, 17, 44, 48, 73号土坑

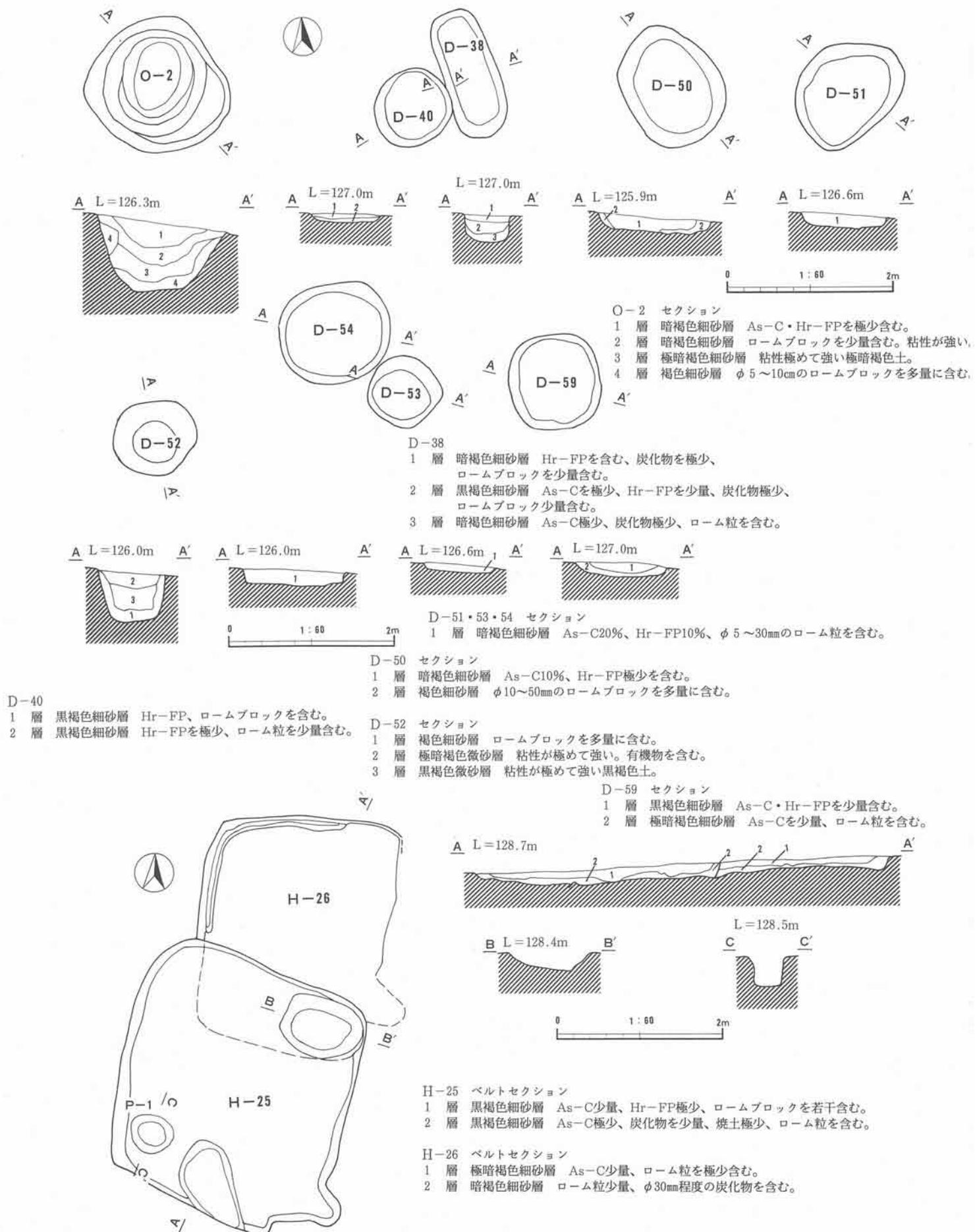


Fig. 25 H-25・26号住居址、O-2号落込み、D-38, 40, 50, 51, 52, 53, 54, 59号土坑

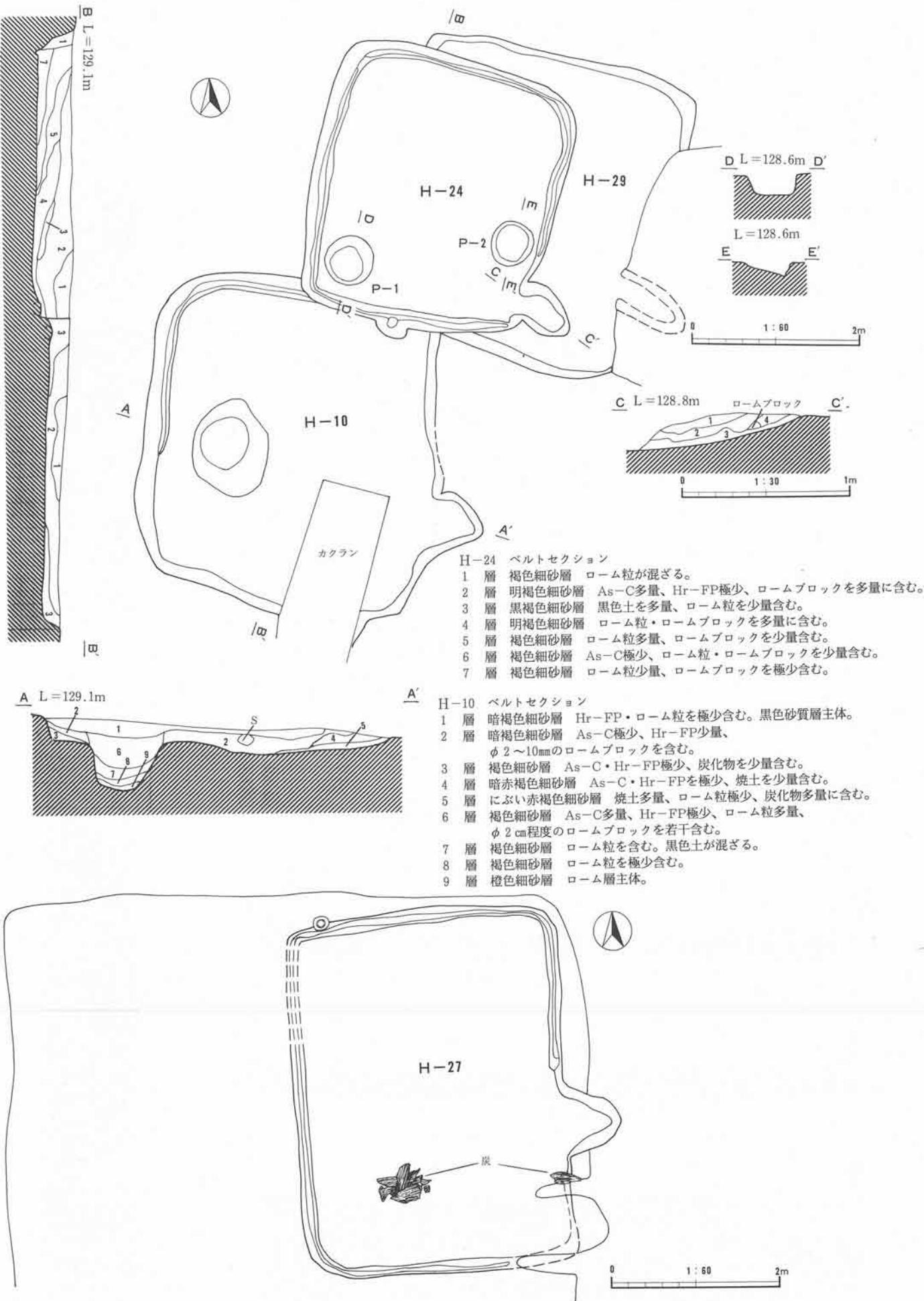


Fig. 26 H-10, 24, 27, 29号住居址

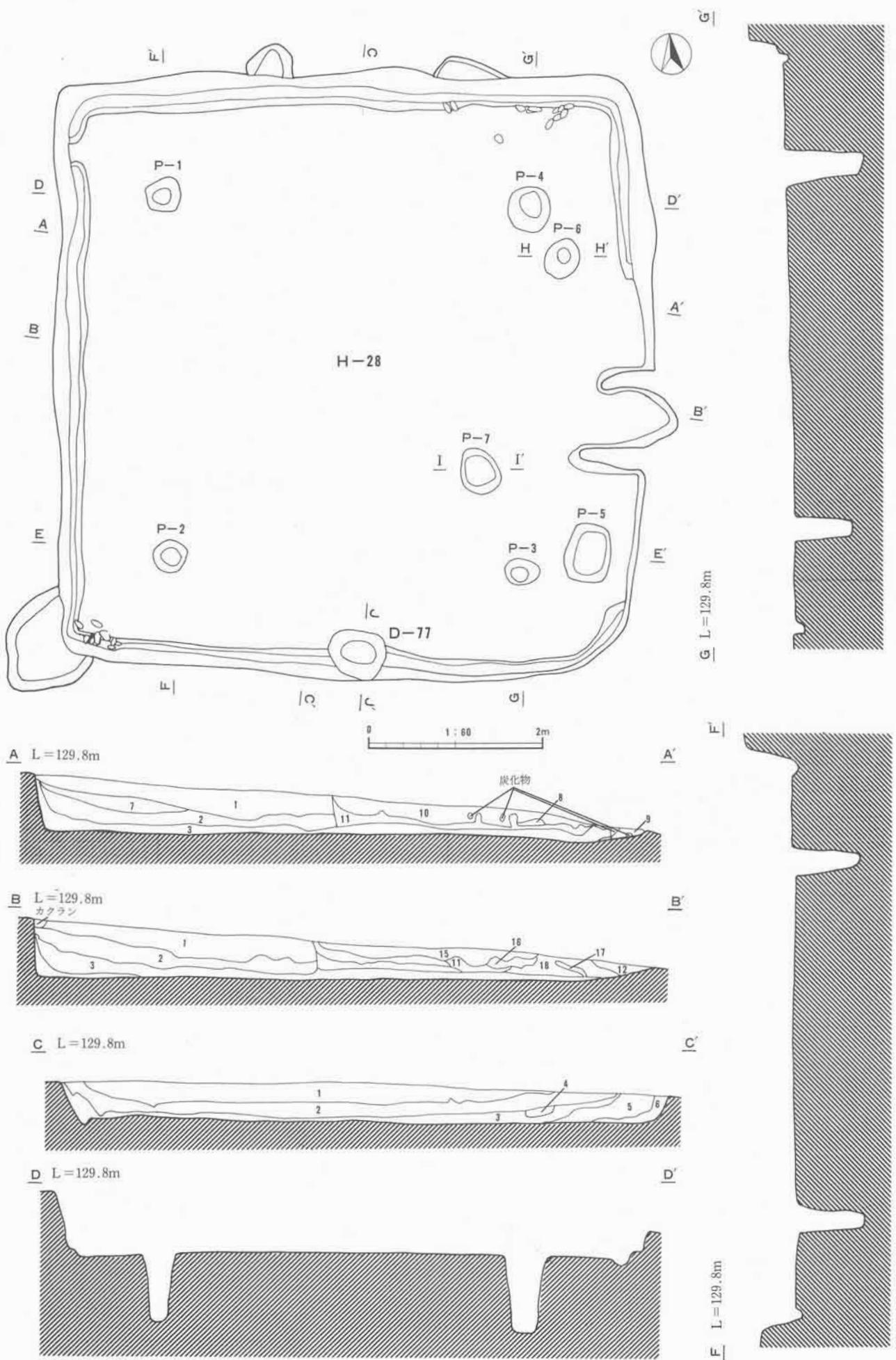
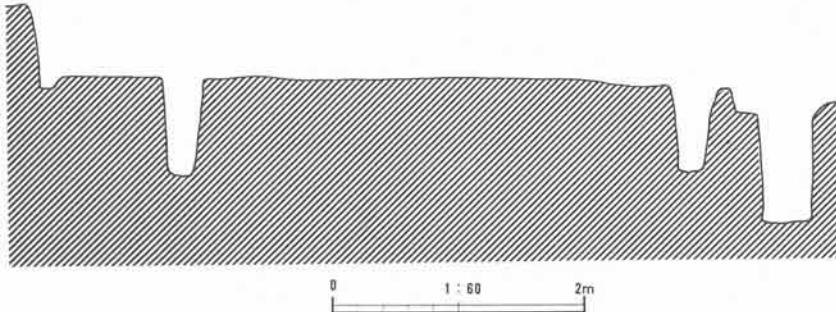
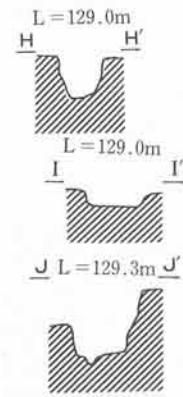


Fig. 27 H-28号住居址、D-77号土坑

E L=129.8m

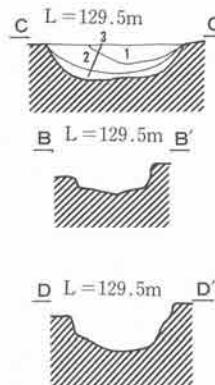
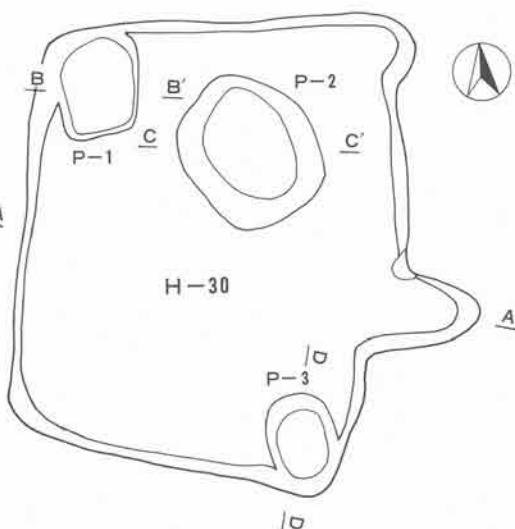


E'



- H-27・28 ベルトセクション
 1 層 黒褐色細砂層 As-C・Hr-FP少量、炭化物を少量含む。
 2 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FP・炭化物を極少含む。
 3 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、ローム粒少量、焼土少量、炭化物（木炭）を多量に含む。
 4 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FP・炭化物を極少含む。黒色土が混ざる。
 5 層 黒褐色細砂層 ローム粒極少、焼土少量、炭化物を多量に含む。
 6 層 暗褐色細砂層 ローム粒・炭化物を少量含む。
 7 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FPを多量、
 φ 2～20mmのロームブロックを少量含む。
 8 層 にぶい赤褐色細砂層 Hr-FP・ローム粒を極少含む。焼土粒主体。
 9 層 明赤褐色細砂層 焼土ブロックを多量に含む。

- 10 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FP・焼土・炭化物を多量に含む。
 11 層 黒色細砂層 炭化物（木炭片）を大量に、焼土も少量含む。
 12 層 にぶい赤褐色細砂層 焼土ブロック多量、炭化物・黄色粘土極少、灰を少量含む。
 13 層 暗褐色細砂層 As-C・Hr-FP・炭化物を少量含む。
 14 層 黒褐色細砂層 As-C・Hr-FPを極少、炭化物（木炭片）を多量に含む。
 15 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FPを少量、炭化物を極少含む。
 16 層 黑褐色細砂層 As-C・Hr-FP少量、焼土極少、炭化物を少量含む。
 17 層 黑褐色細砂層 As-C・Hr-FP・焼土ブロックを極少含む。
 18 層 にぶい赤褐色細砂層 As-C・Hr-FP・焼土・炭化物を少量、灰を極少量含む。

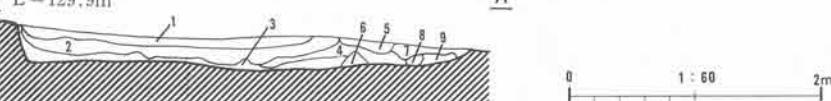


- H-30 ベルトセクション
 1 層 灰褐色細砂層 植物根を多量、炭化物を少量含む、耕作土か？
 2 層 黒褐色細砂層 As-C・Hr-FP・炭化物を少量、ロームブロックを極少含む。
 3 層 にぶい褐色細砂層 ローム粒を多量に含む。壁の崩落の流れ込み。
 4 層 褐色細砂層 ローム粒多量、砂質凝灰岩の固まり、灰のブロックを含む。
 5 層 暗赤褐色細砂層 ローム粒・焼土少量、灰を極少含む。
 6 層 黑褐色細砂層 砂質凝灰岩のブロックを含む。
 7 層 暗赤褐色細砂層 焼土を少量含む。
 8 層 黑褐色細砂層 黒色土主体。
 9 層 赤褐色細砂層 焼土主体、ローム粒が少量混ざる。

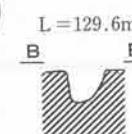
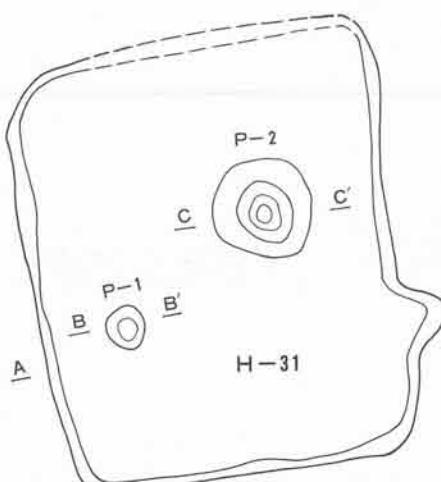
H-30 床下土坑セクション

- 1 層 明褐色細砂層 ロームブロック多量、焼土極少含む。
 2 層 褐色細砂層 ロームブロック少量、焼土極少、黒色土ブロック少量含む。
 3 层 暗褐色細砂層 ロームブロック少量、黒色土主体。

A L=129.9m

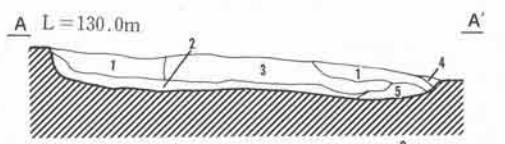
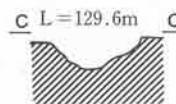


A'



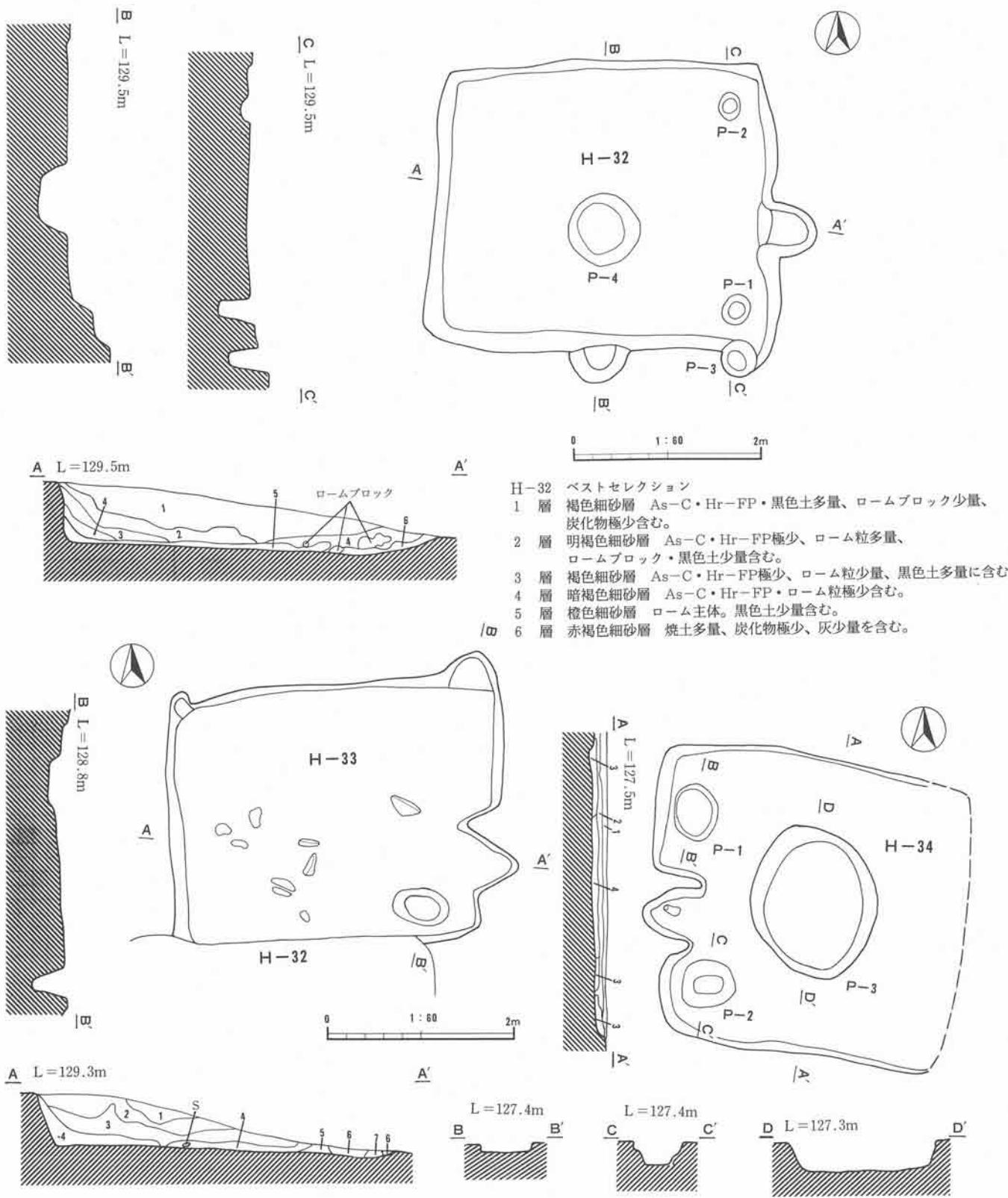
H-31 ベルトセクション

- 1 層 にぶい褐色細砂層 カクラン。耕作土が入り込んでいる。
 2 層 橙色細砂層 ロームブロック・耕作土が混じり合っている。フカフカ。
 3 层 明褐色細砂層 φ 5～10cmのロームブロックと耕作土が混ざり合っている。
 4 层 赤褐色細砂層 耕作土の中に僅かに焼土が混ざる。
 5 层 暗赤褐色細砂層 耕作土・焼土・灰が混ざり合っている。



A'

Fig. 28 H-30, 31号住居址



H-33 ベルトセクション

- 1 層 褐色細砂層 As-C・Hr-FP極少、ローム粒少量含む。
- 2 層 灰褐色細砂層 As-C・Hr-FP少量、 $\phi 2\sim10mm$ のロームブロックを少量含む。
- 3 層 黑褐色細砂層 黒色土主体。As-C・Hr-FP多量、ローム粒極少含む。
- 4 層 明褐色細砂層 ローム主体。黒色土多量に混ざる。
- 5 層 褐色細砂層 黒色土とロームが混ざる。
- 6 層 褐色細砂層 ローム粒・焼土を極少含む。
- 7 層 黑褐色細砂層 黒色土主体。植物根によるものと思われる。

H-34 ベルトセクション

- 1 層 黑褐色細砂層 黒色土主体。As-C・Hr-FP極少含む。
- 2 層 暗褐色細砂層 黒色土主体。黄褐色土を少量含む。
- 3 層 明褐色細砂層 黄褐色土主体。黒色土が多量に混ざる。
- 4 層 褐色細砂層 黄褐色土・黒色土を少量含む。

Fig. 29 H-32, 33, 34号住居址

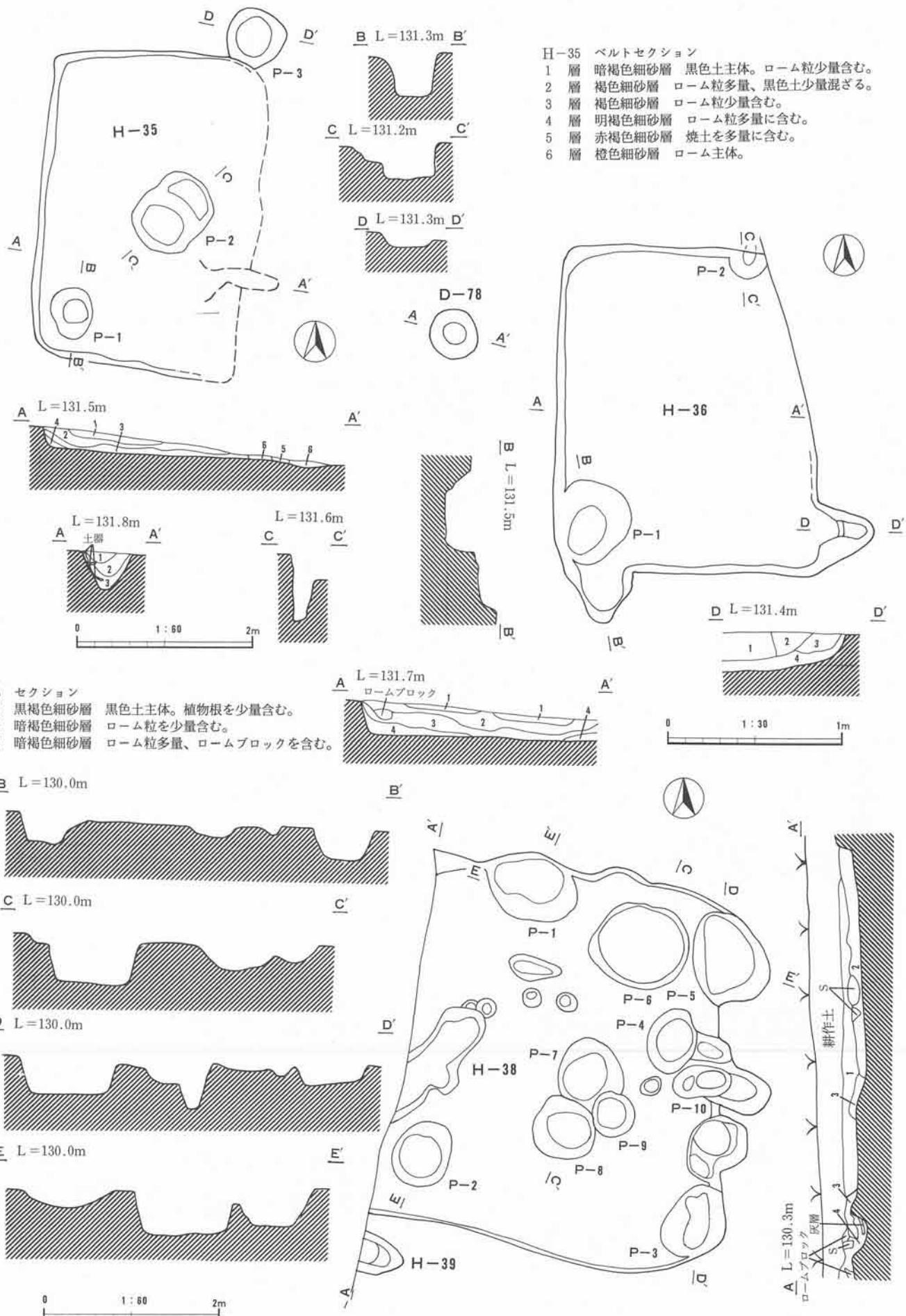
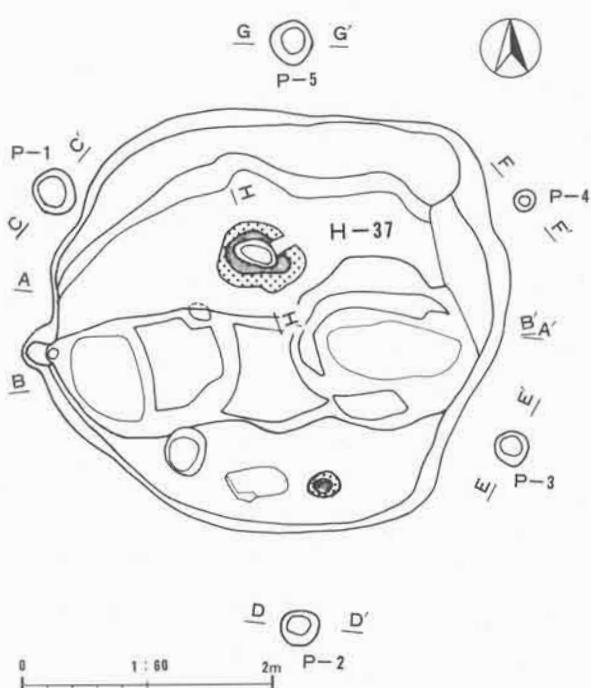


Fig. 30 H-35, 36, 38, 39号住居址、D-78号土坑

H-36 ベルトセクション
 1 層 褐色細砂層 黒色土主体。ロームブロック少量含む。
 2 層 褐色細砂層 ロームブロック多量に含む。
 3 層 暗褐色細砂層 黒色土・ローム粒を多量に含む。
 4 層 明褐色細砂層 ロームブロック・ローム粒を多量に含む。

H-36 カマドセクション
 1 層 にぶい赤褐色細砂層 焼土ブロックを多量に含む。
 2 層 暗赤褐色細砂層 焼土を多量に含む。
 3 層 灰褐色細砂層 焼土を少量、灰を多量に含む。
 4 層 暗赤褐色細砂層 焼土を少量含む。

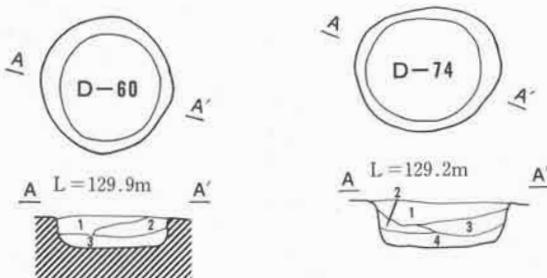
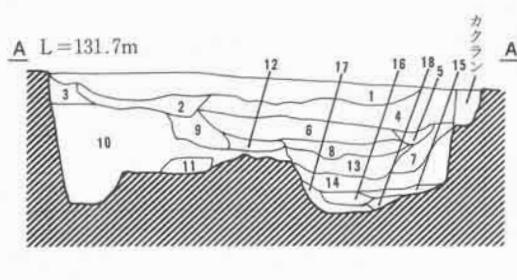
H-38・39 西壁セクション
 1 層 褐色細砂層 耕作土。Hr-FP 5%、 ϕ 1~5 cm のローム粒を多量に含む。
 2 層 暗褐色細砂層 As-C 少量、Hr-FP 極少、 ϕ 3~7 cm のローム粒 3% 含む。
 3 層 赤褐色細砂層 ローム粒・焼土粒 5% 含む。
 4 層 暗赤褐色細砂層 ローム粒・焼土粒 10%、粘土質を含む。



H-37 精練鍛冶炉セクション
 1 層 黒色土層 (砂質、Hr-FP混じり、木炭を含む)
 2 層 ローム混じり黒褐色土層 (1層にロームが混ざる) 遺物あり。
 3 層 ローム崩落黄褐色土層 (壁下ローム崩れ)
 4 層 黒褐色砂質土層 (羽口、木炭、焼土を含む。)
 5 層 黄褐色土層 (ローム混じり、砂質、木炭含む。)
 6 層 黄褐色砂質土層 (やや粘性のある土で木炭、焼土、遺物を含む)
 この下面整地層。
 7 層 黄褐色ローム混土層 (木炭、焼土を含む)
 8 層 黒色砂質土層 (木炭、焼土粒を含む)
 9 層 黄褐色ローム混土層 (ロームブロックを多量に含む)
 10 層 黄色砂質土層 (ローム塊を多量に含む埋め土層)
 11 層 黑色砂質土層 (鋳造チップを多量に含む)
 12 層 黑褐色砂質土層 (羽口、チップを含む)
 13 層 黄褐色砂質土層 (羽口、鉄滓を含む粗い焼土混じりの層)
 14 層 黑色砂質土層 (ロームブロックを含む鉄滓混じりの層)
 15 層 黄色土層 (この層は埋め土を固くしめている) 一時期は床面として利用された。
 16 層 黄色砂質土層 (ロームを主体とした埋め土層)
 17 層 黄色ロームを主体とする埋め土層 (チップを含む)
 18 層 黄色崩れローム層 (木炭片を含む)

H-37 (精練鍛冶炉) 炉セクション

- 層 還元層 (青灰色焼土)
- 1 層 赤色焼土層 (粘土)
- 2 層 埋め土 (焼土を含むローム混じり土)
- 3 層 木炭を含む黑色砂質土層
- 4 層 ローム混じり黒色砂質土層
- 5 層 ロームの多い黄色土層 (整地面) 繰業時整地層
- 6 層 鉄滓、チップを含む木炭混じりの黒色砂質層 (第1期廃棄穴掘削埋め土)
- 7 層 ローム混じり黒色砂質土層 (木炭、鉄滓、チップを含む)



D-60 セクション

- 1 層 暗褐色細砂層 植物根を含む。黒色土主体。
- 2 層 褐色細砂層 ローム粒を少量含む。
- 3 层 黑褐色細砂層 黒色土主体。

D-74 セクション

- 1 層 褐色細砂層 ローム粒主体。
- 2 層 暗褐色細砂層 ローム粒主体。黒色土が多量に混ざる。
- 3 层 明褐色細砂層 ローム粒主体。炭化物(木炭片)を含む。
- 4 层 明褐色細砂層 ローム粒主体。炭化物を極少含む。

Fig. 31 H-37号住居址(製鍊鍛冶炉)、D-60, 74号土坑

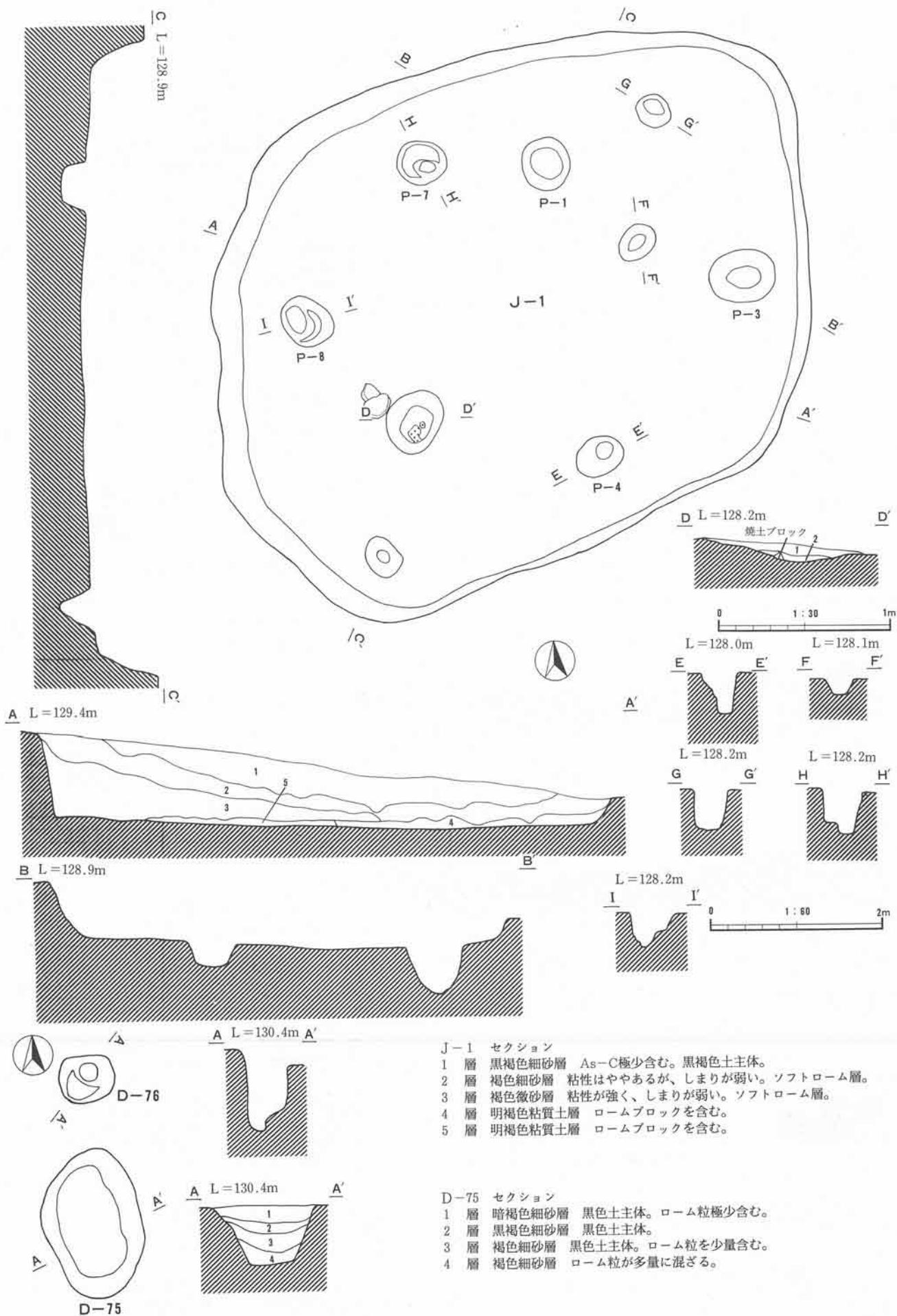


Fig. 32 J-1号住居址、D-75, 76号土坑

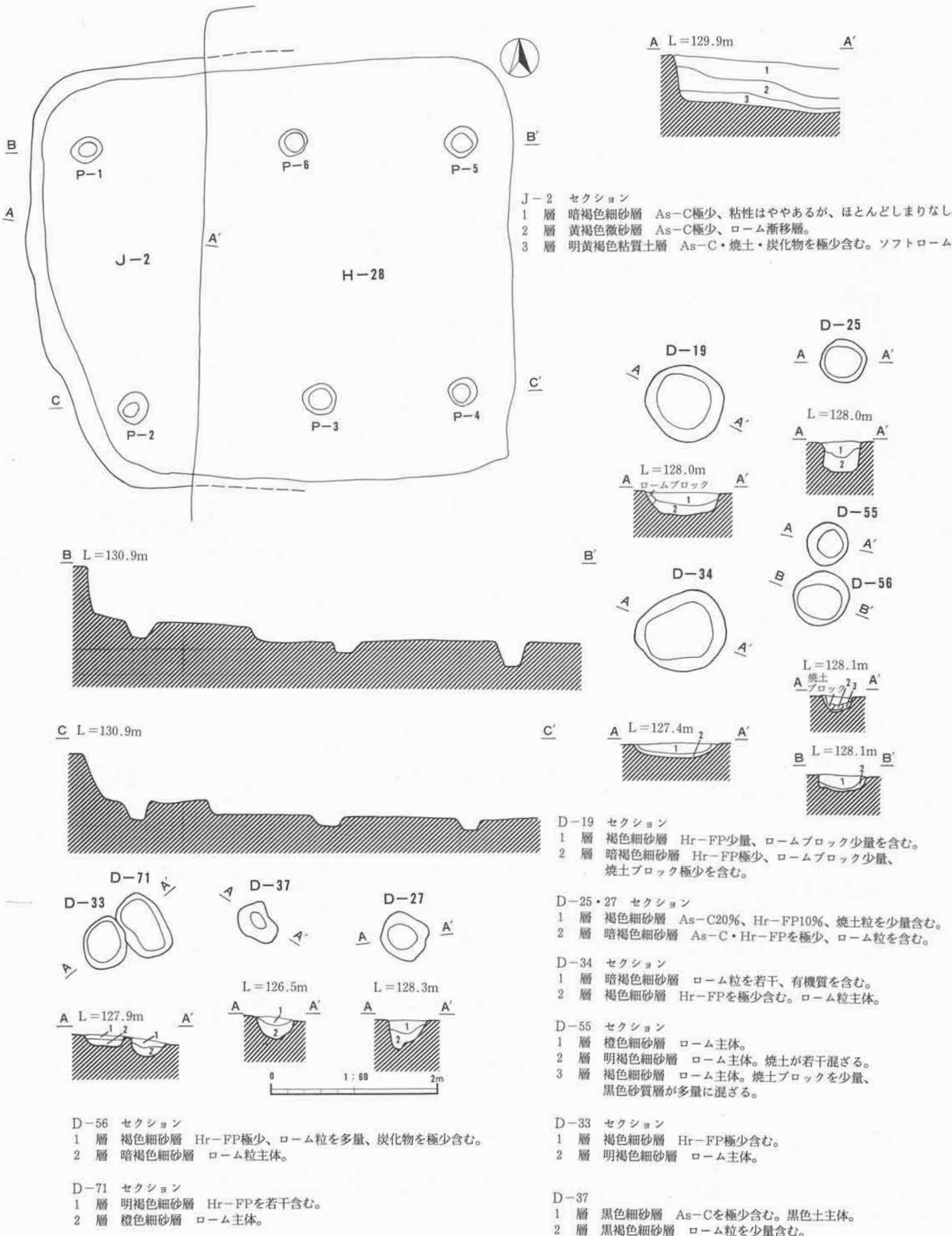


Fig. 33 J-2号住居址、D-19, 25, 27, 33, 34, 37, 55, 56, 71号土坑

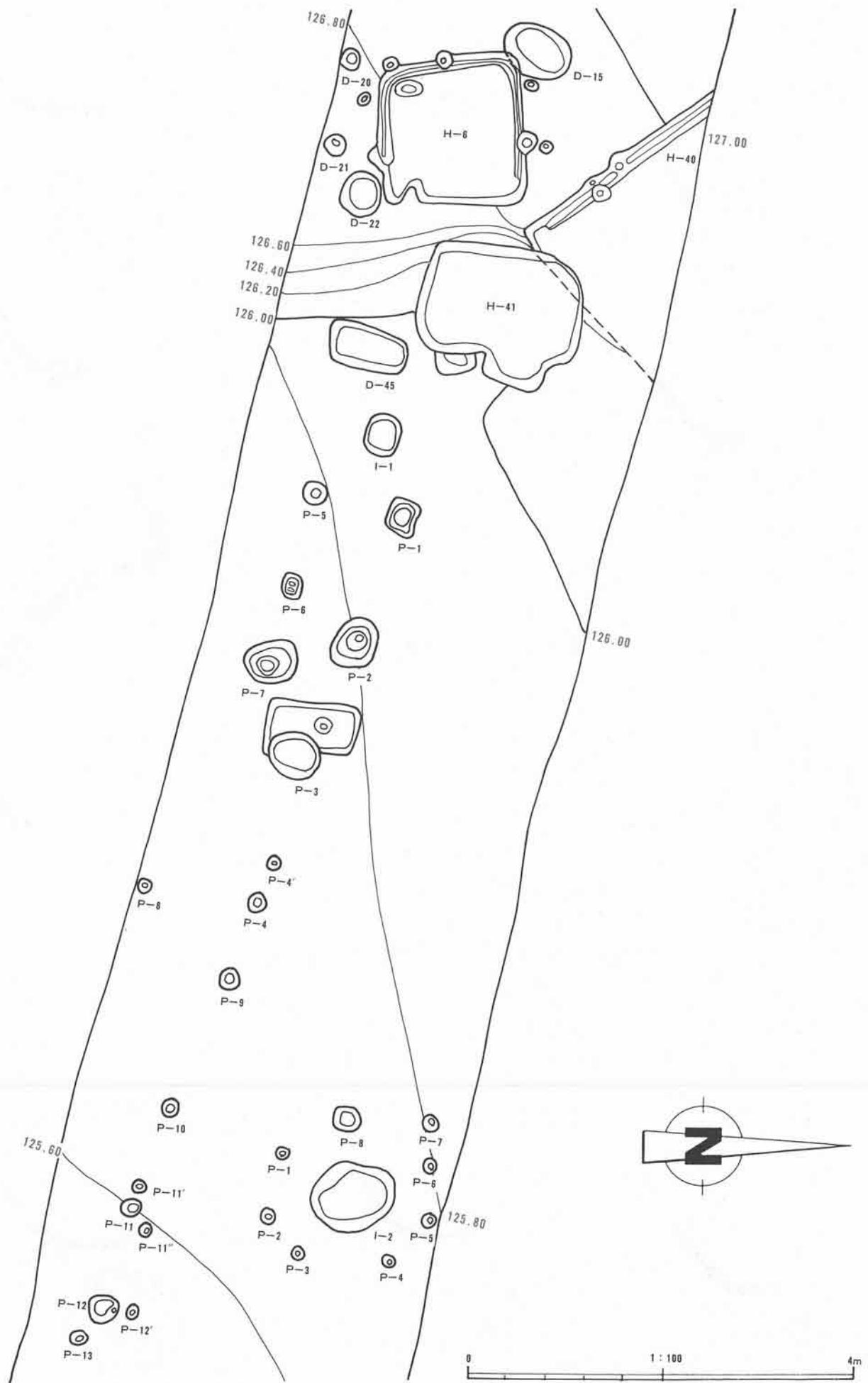


Fig. 34 B-1 区 中世堀立柱群 堅穴状遺構 井戸址

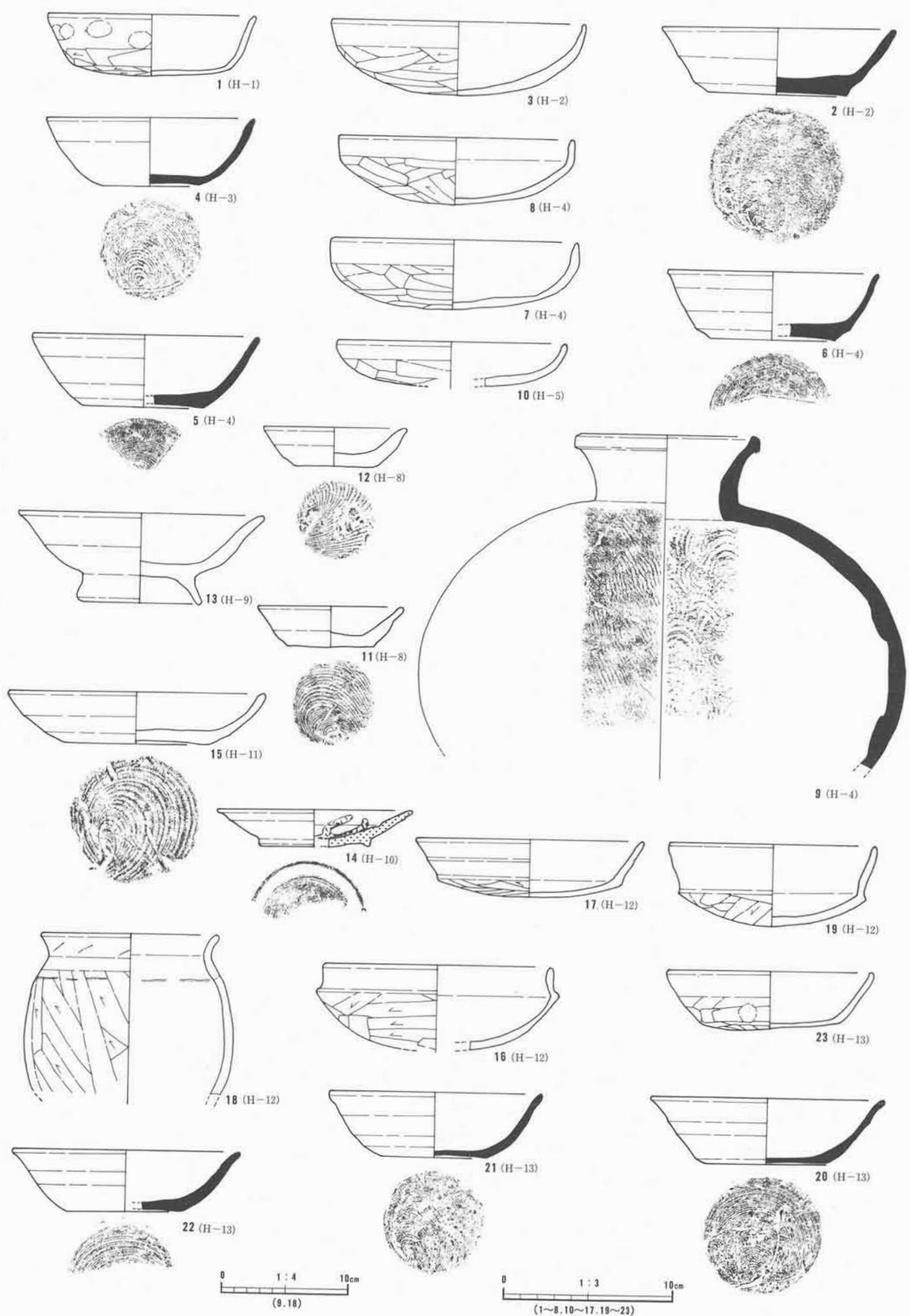
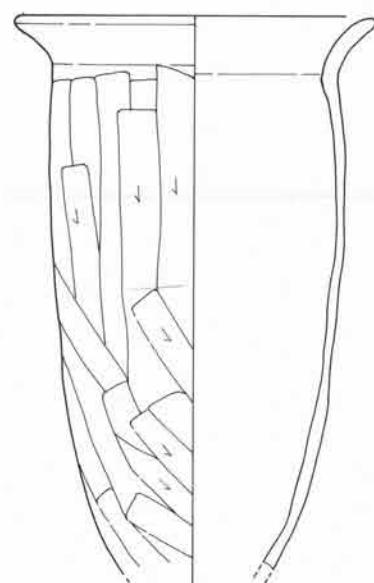
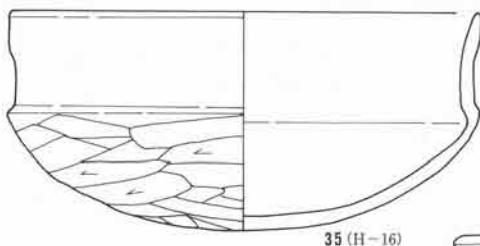
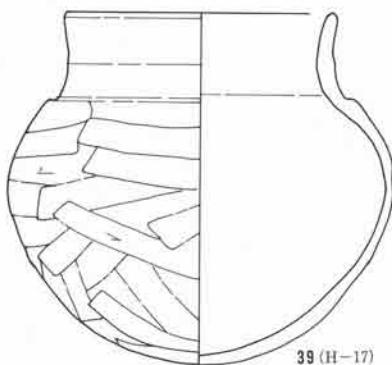
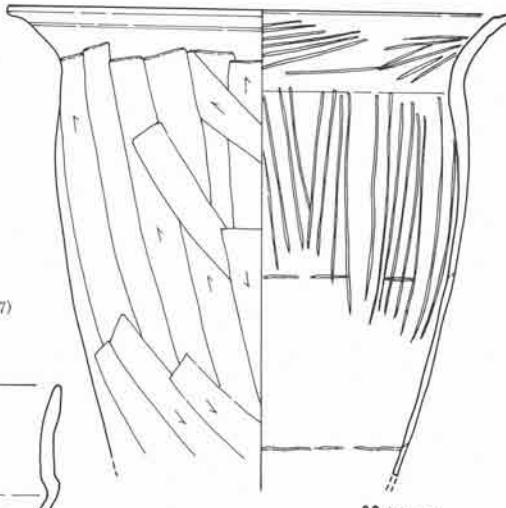
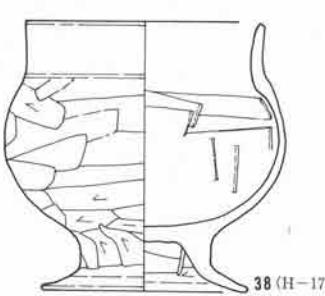
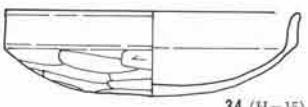
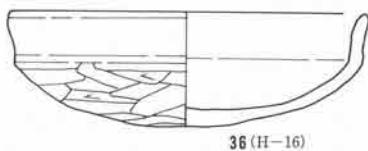
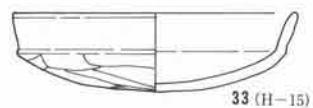
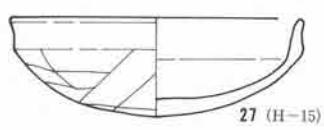
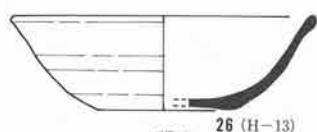
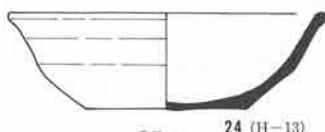
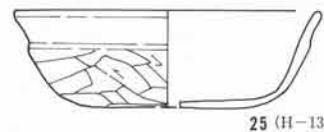


Fig. 35 H-1, 2, 3, 4, 5, 8, 9, 10, 11, 12, 13号住居址出土の土器

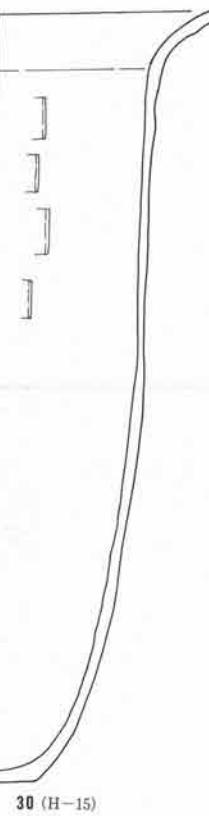


0
1 : 4
10cm

Fig. 36 H-13, 15, 16, 17号住居址出土の土器

(28~32・35・38・39)

0
1 : 3
10cm



(24~28・34・36・37)

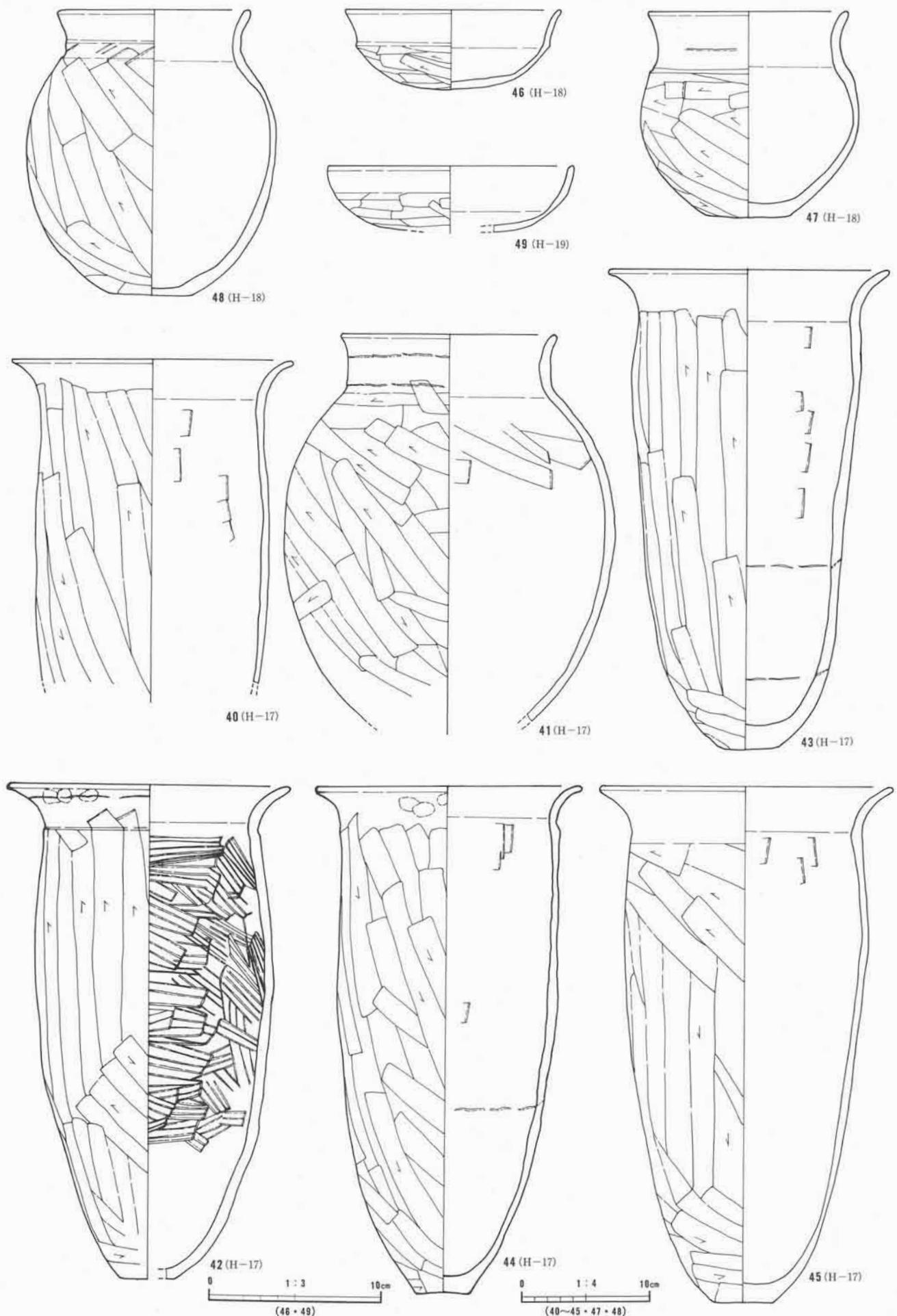


Fig. 37 H-17, 18, 19号住居址出土の土器

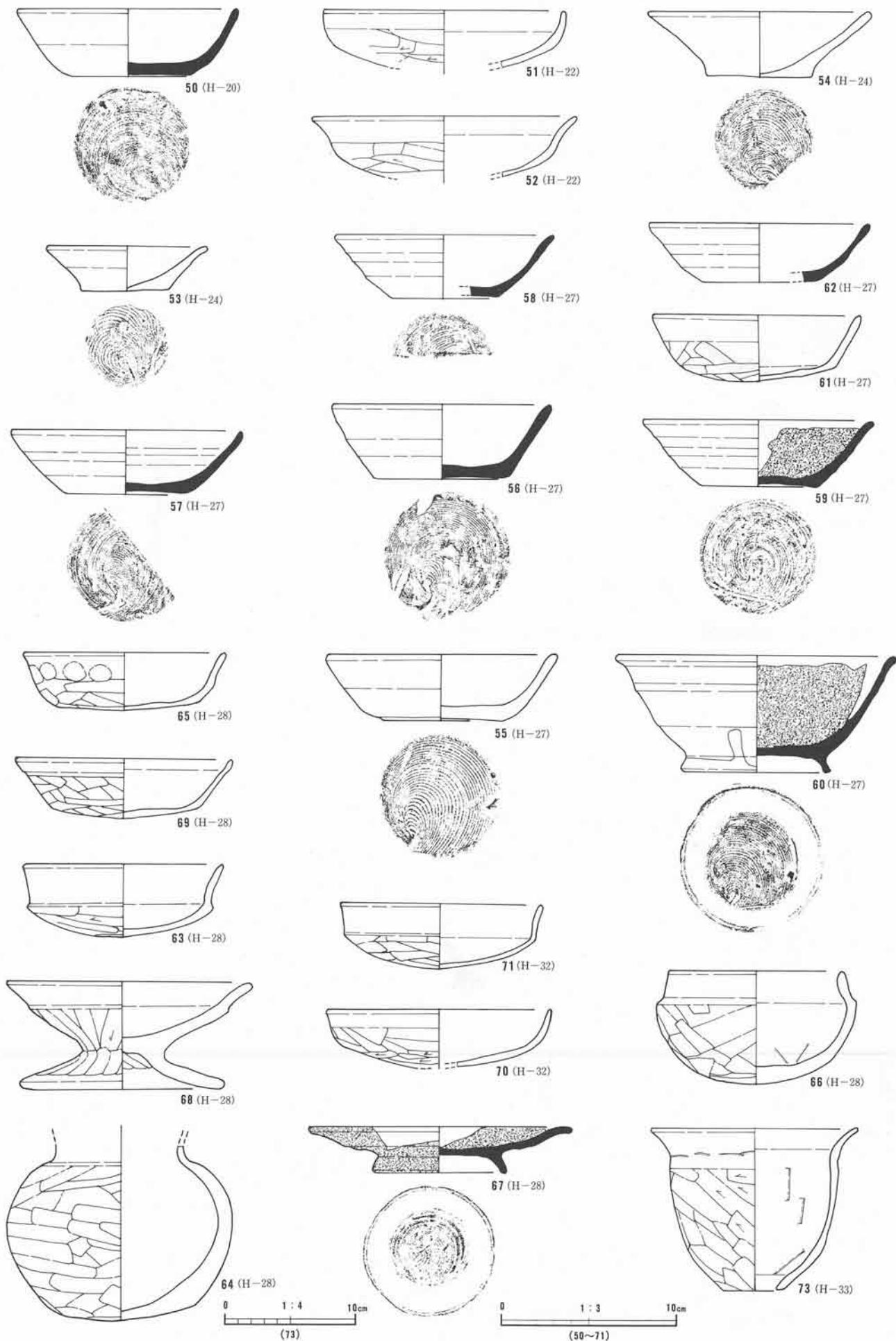


Fig. 38 H-20, 22, 24, 27, 28, 32, 33号住居址出土の土器

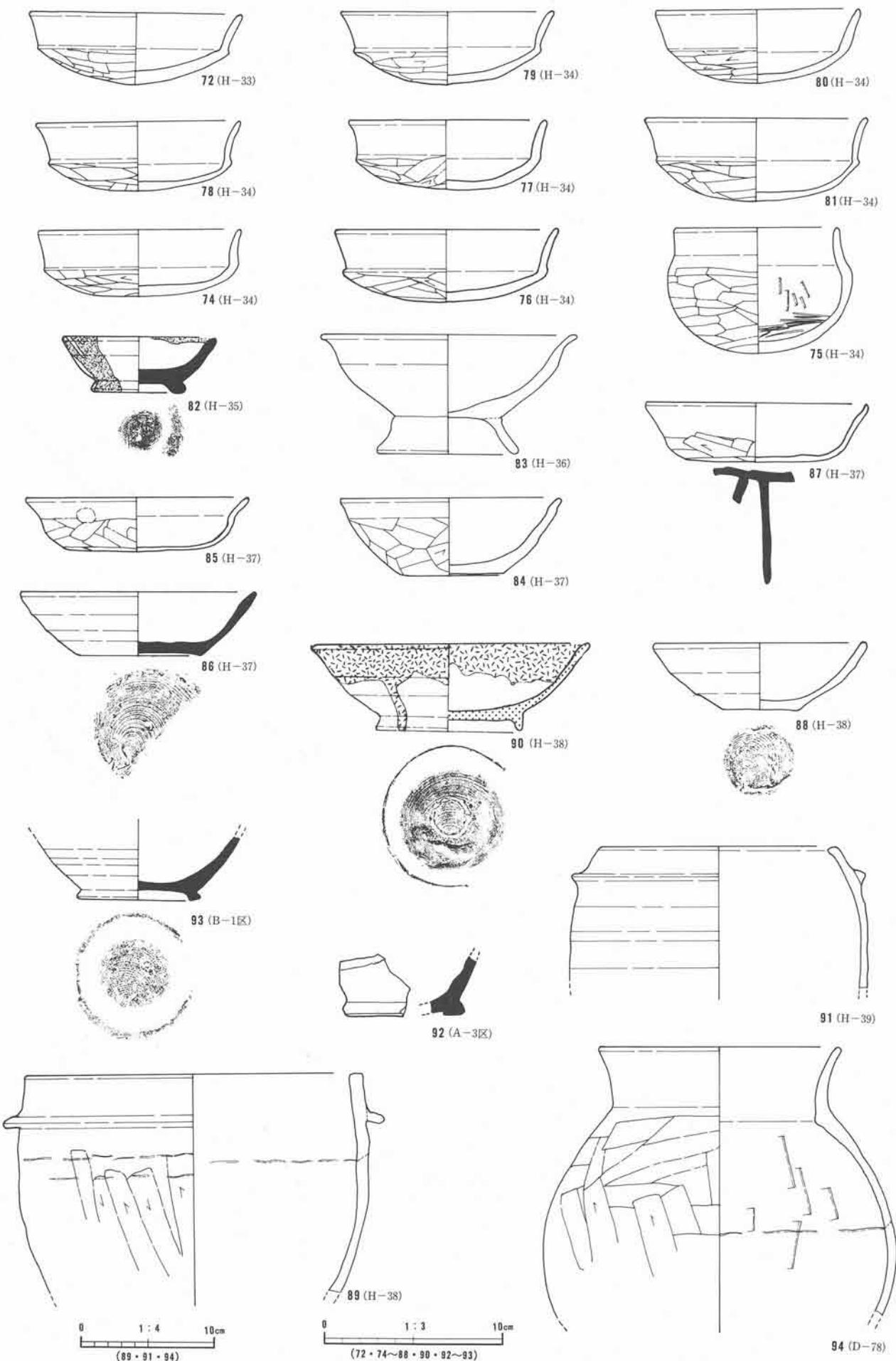


Fig. 39 H-33, 34, 35, 36, 37, 38, 39号住居址出土の土器 A-3区、B-1区、D-78号土坑出土の土器

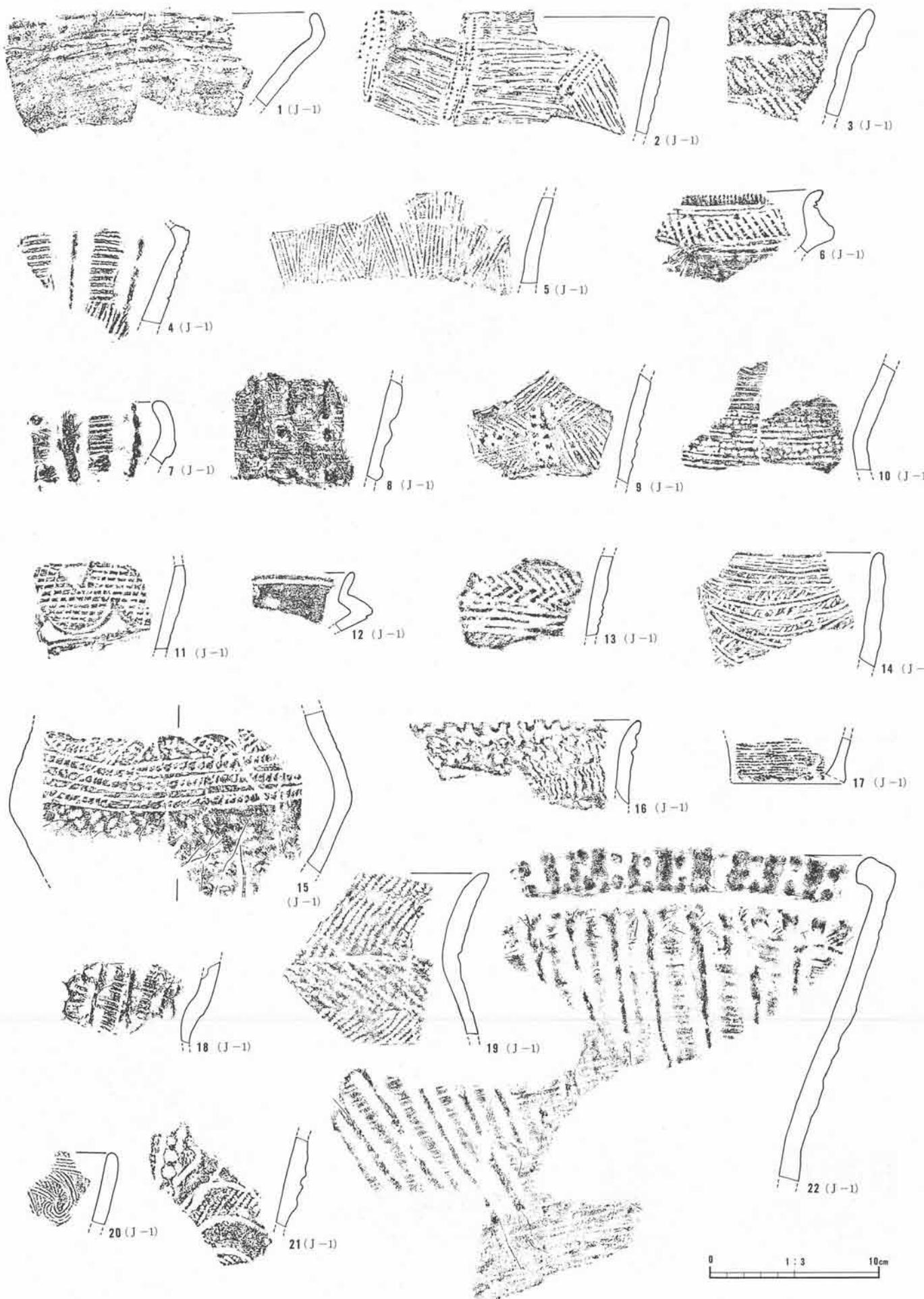


Fig. 40 繩文式土器 (1)

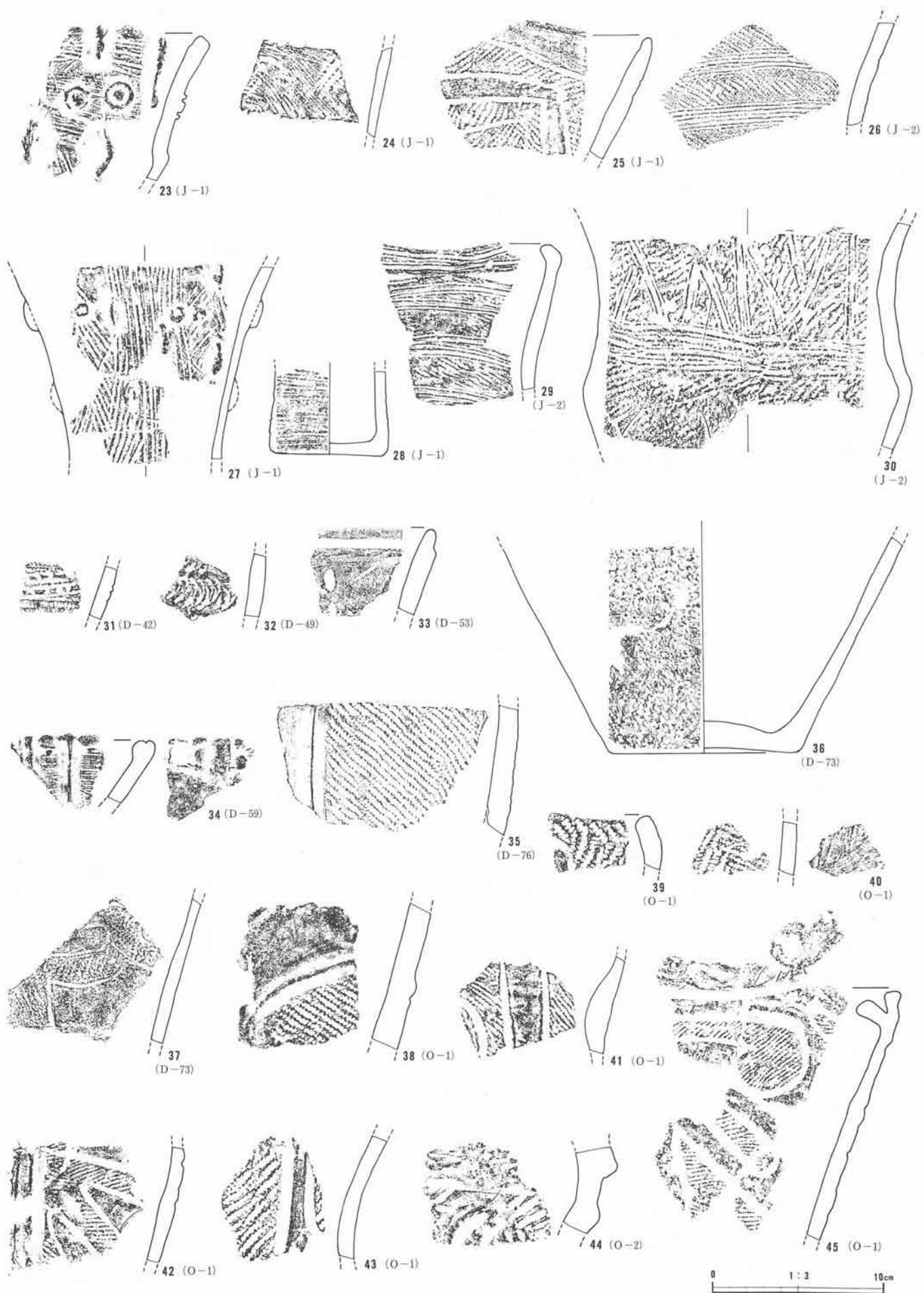


Fig. 41 繩文式土器 (2)

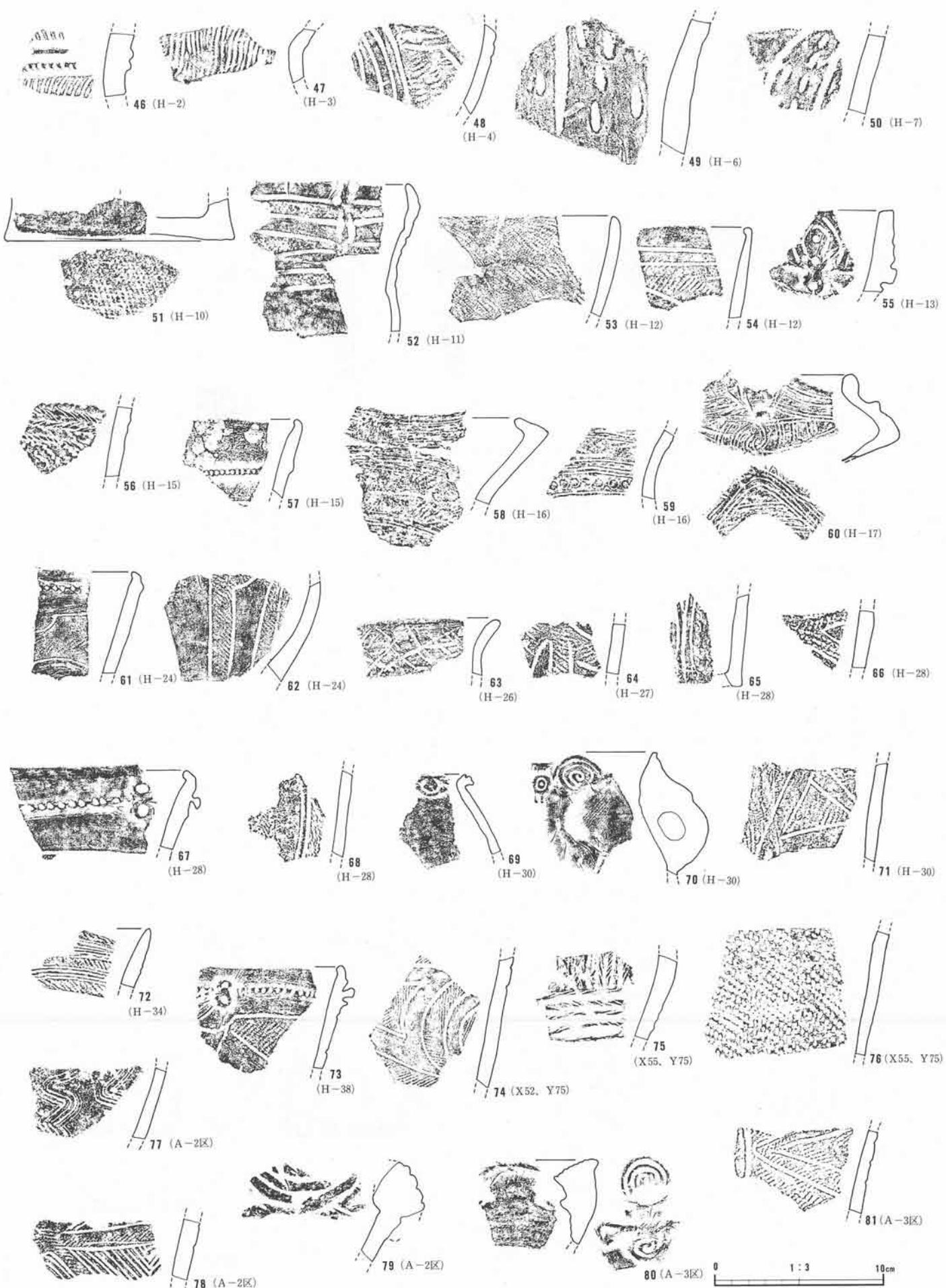


Fig. 42 縄文式土器 (3)



Fig. 43 石器、石製品、特殊遺物

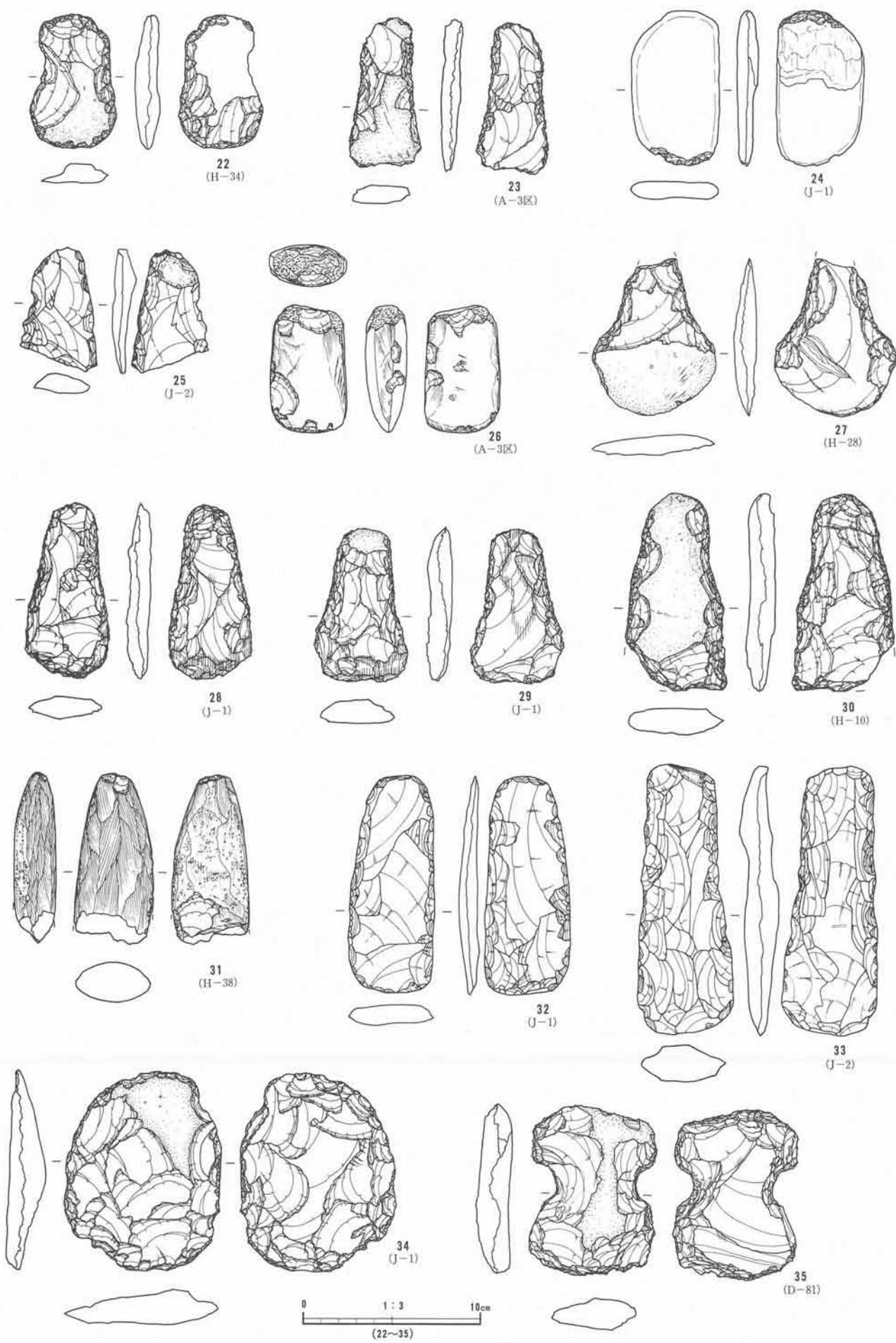


Fig. 44 石器

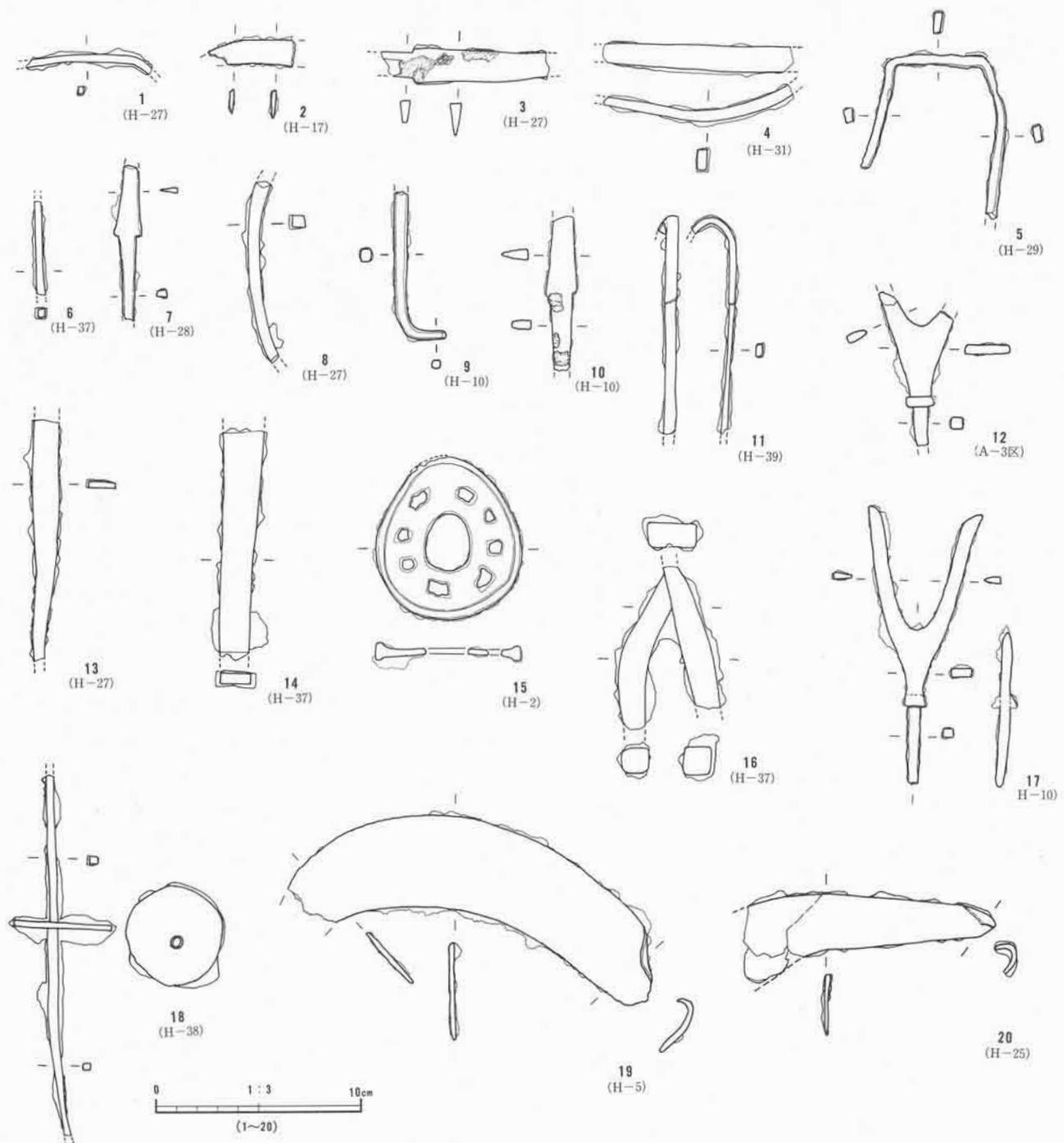


Fig. 45 鉄製品



調査区全景



A-2区 全景



H-9号住居址 全景 (W)



H-12号住居址 全景 (SW)



H-13号住居址 全景 (SW)



O-2号落込み 全景 (SE)



H-15号住居址 全景 (S)



H-15号住居址 遺物出土状態 (E)



H-15号住居址 カマド全景 (S)



H-15号住居址 遺物出土状態 (S)



H-16号住居址 全景 (W)



H-17号住居址 全景 (NW)



H-17号住居址 カマド全景 (W)



H-17号住居址 遺物出土状態 (E)



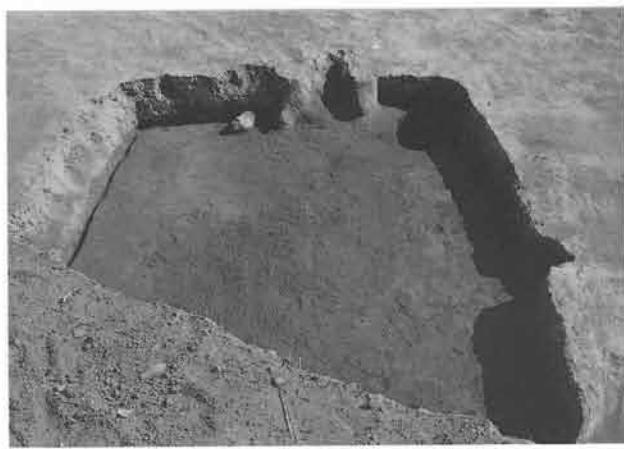
H-17号住居址 遺物出土状態 (W)



H-17号住居址 全景 (W)



H-16・17号住居址 カマド全景 (W)



H-18号住居址 全景 (W)



D-73号土坑 全景 (SW)



D-44号土坑 鉄滓廃棄土坑 (W)



A-3区 全景



表土 挖削前 (S)



A-1区 トレンチ 深掘り (W)



H-10号住居址 全景 (W)



H-24・29号住居址 全景 (W)



H-25・26号住居址 全景 (W)



H-25号住居址 遺物出土状態 (S E)



H-27号住居址 炭化物出土状態 (S W)



H-27号住居址 遺物出土状態 (S E)



H-28号住居址 全景 (W)



H-28号住居址 遗物出土状態 (S W)



H-34号住居址 遗物出土状態 (E)



H-32号住居址 全景 (W)



H-33号住居址 全景 (W)



H-13号住居址 遺物出土状態（S）



H-33号住居址 遺物出土状態（S）



H-34号住居址 遺物出土状態（E）



H-34号住居址 遺物出土状態（W）



H-38号住居址 全景（W）



H-38号住居址 灰釉出土土坑（W）



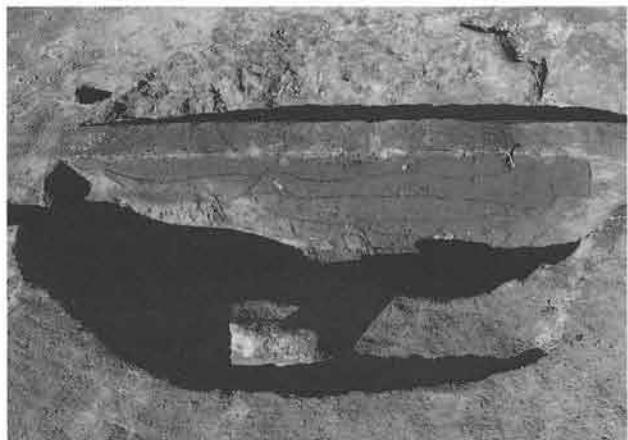
H-38号住居址 高台碗出土状態（S）



H-38号住居址 遺物出土状態（E）



H-37号住居址（精練鍛冶炉）遺物出土状態（N）



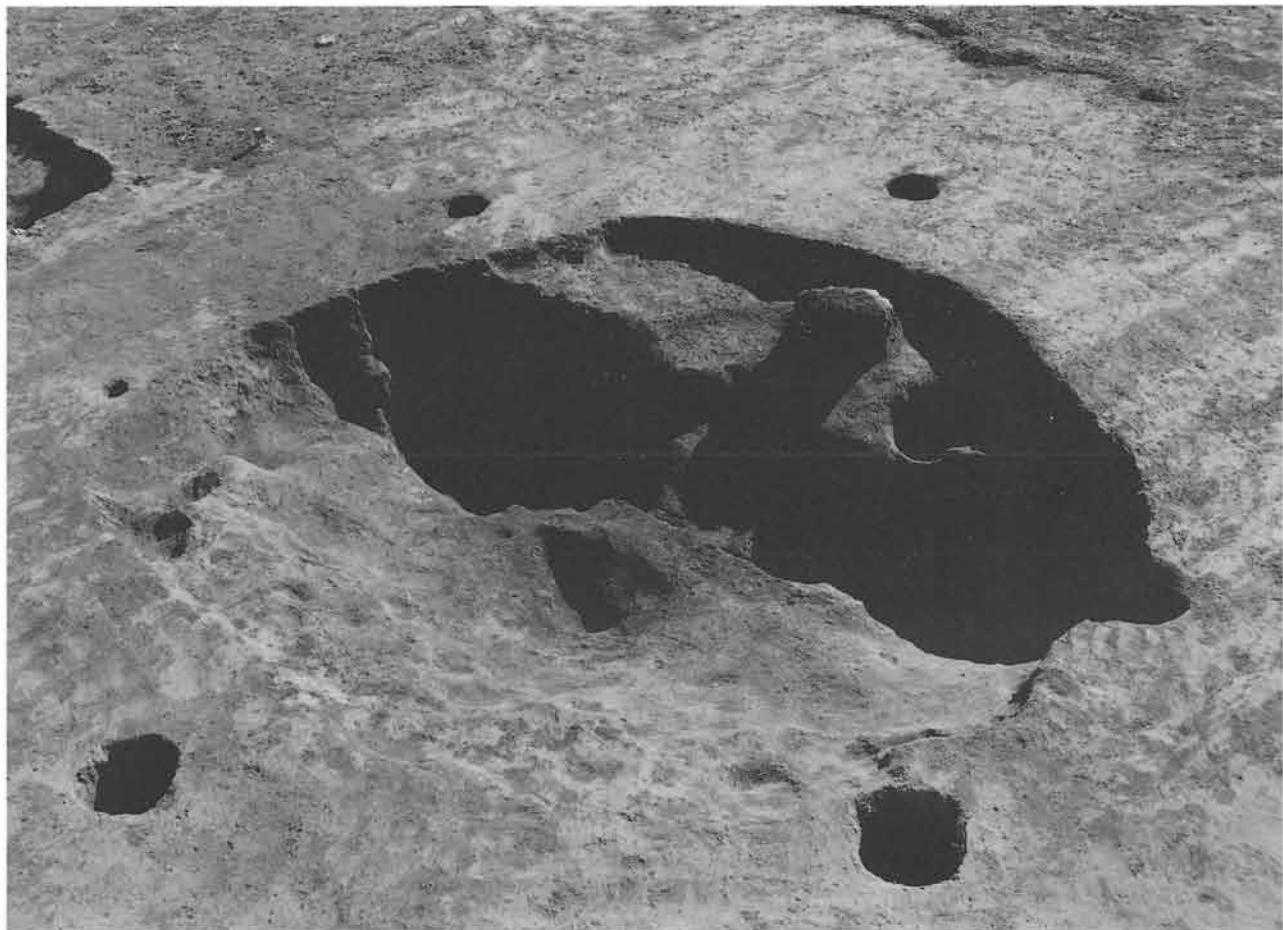
H-37号住居址（精練鍛冶炉）東西セクション（S）



H-37号住居址（精練鍛冶炉）炉址全景（NW）



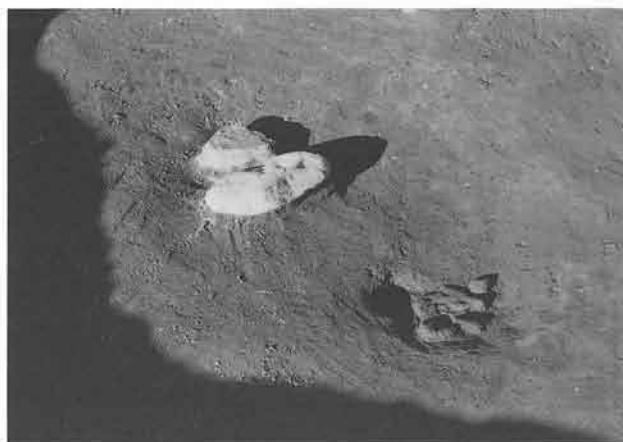
H-37号住居址（精練鍛冶炉）全景（S E）



H-37号住居址（精練鍛冶炉）全景（S）



J-1号住居址 全景 (E)



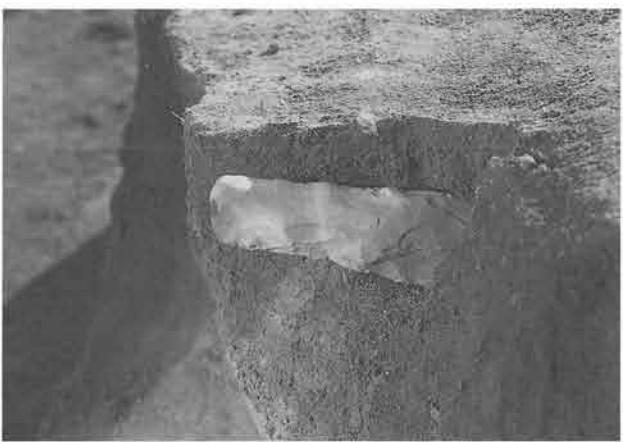
J-1号住居址 炉址全景 (S)



J-2号住居址 全景 (N)



J-2号住居址 遺物出土状態 (N)



J-2号住居址 遺物出土状態 (N)



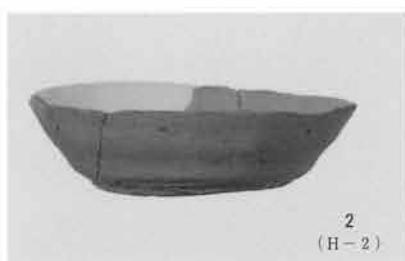
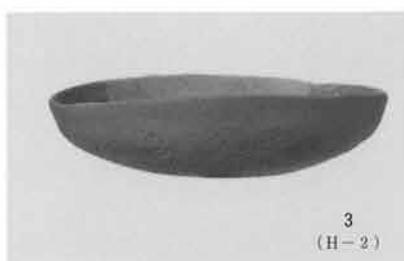
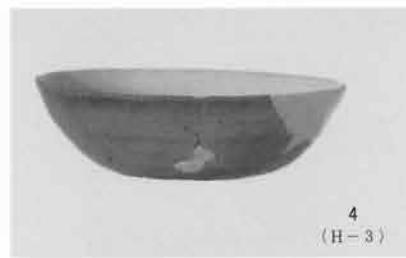
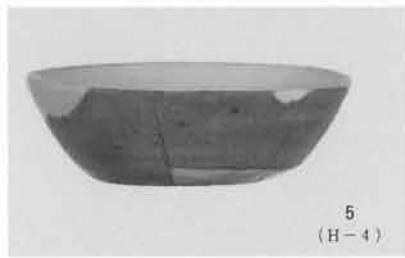
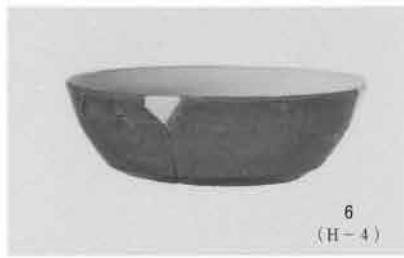
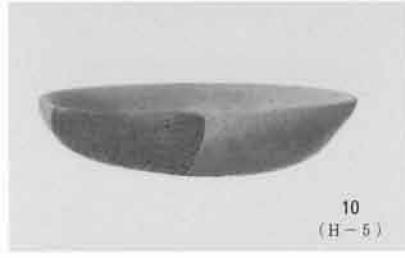
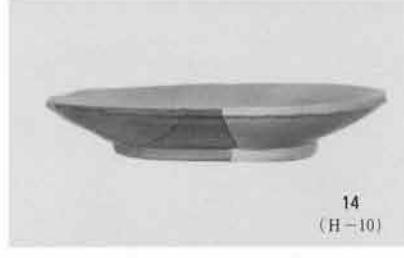
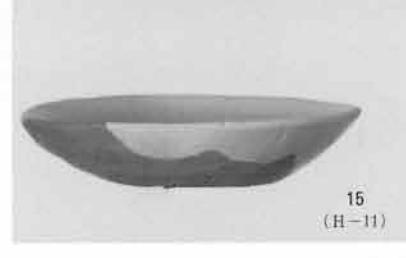
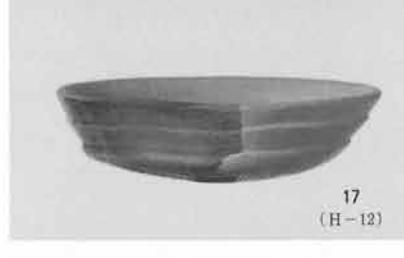
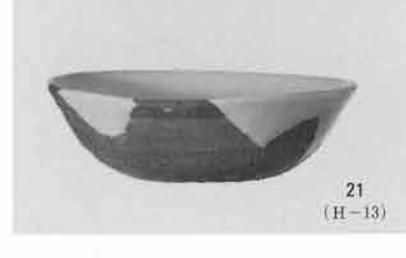
A-2区 鉄分凝集層 (W)



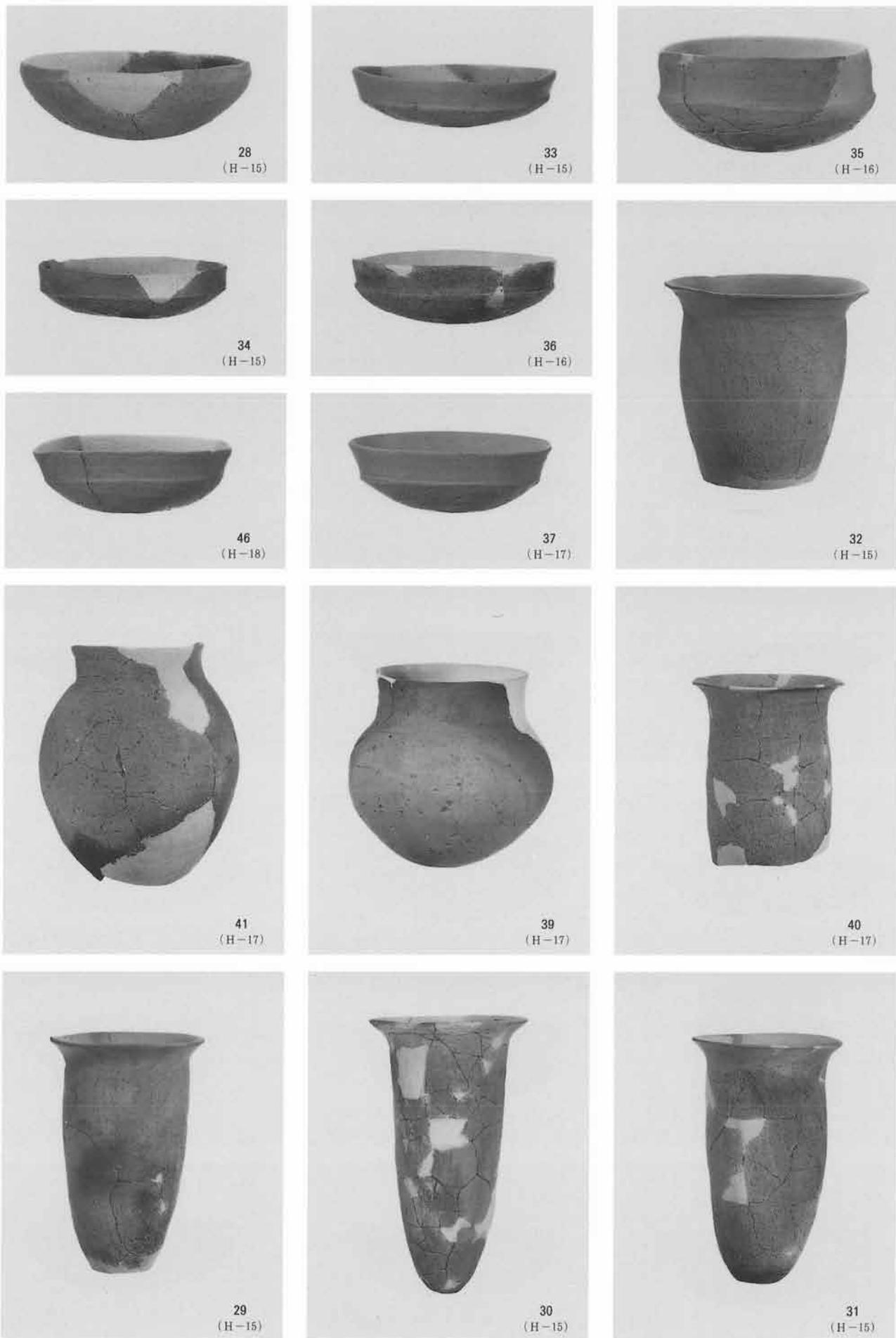
D-78号土坑 遺物セクション (S)

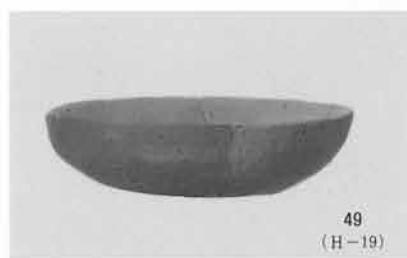
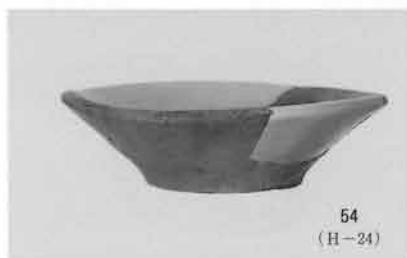
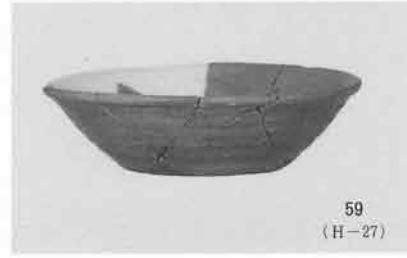


発掘を終えて

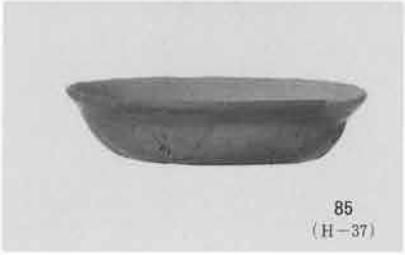
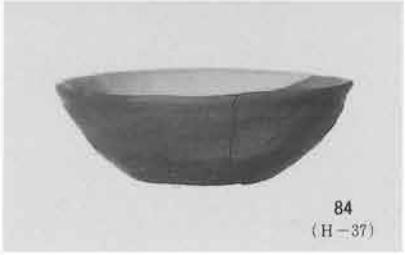
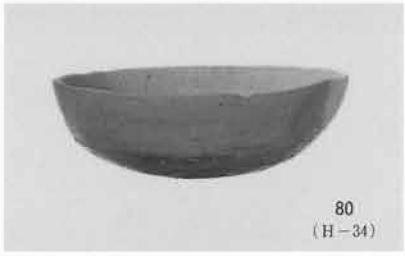
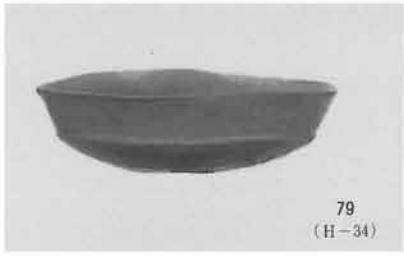
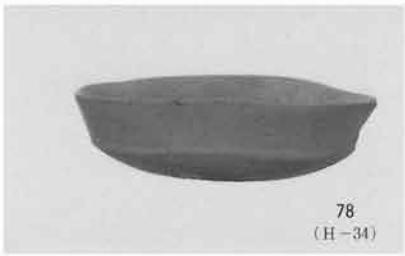
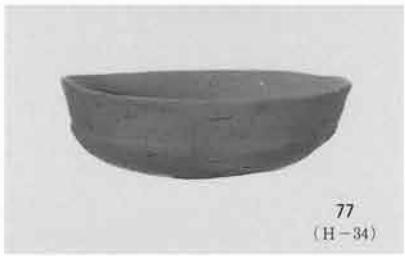
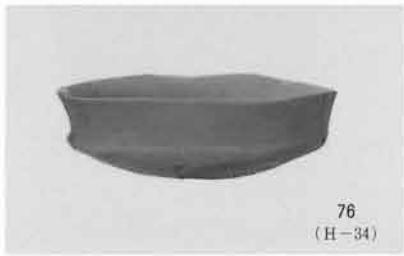
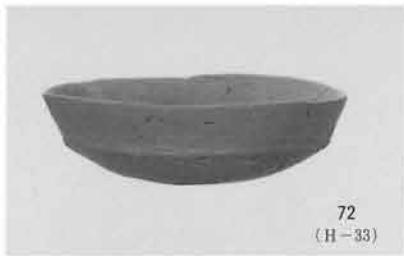
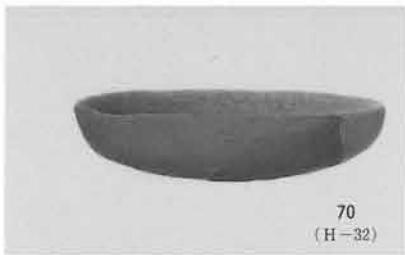
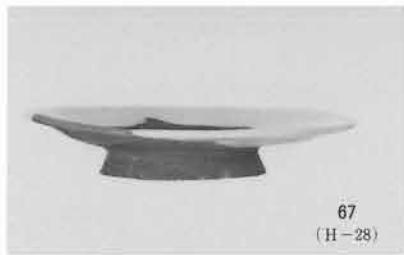
1
(H-1)2
(H-2)3
(H-2)4
(H-3)5
(H-4)6
(H-4)7
(H-4)10
(H-5)11
(H-8)12
(H-8)13
(H-9)14
(H-10)15
(H-11)16
(H-12)17
(H-12)18
(H-12)19
(H-12)20
(H-13)21
(H-13)23
(H-13)27
(H-15)

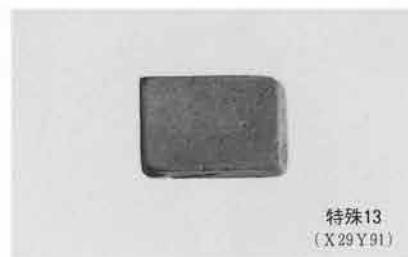
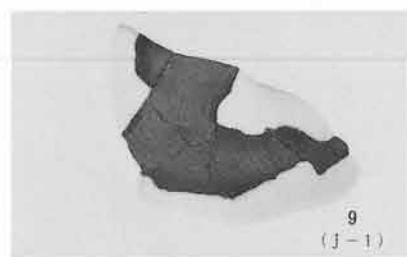
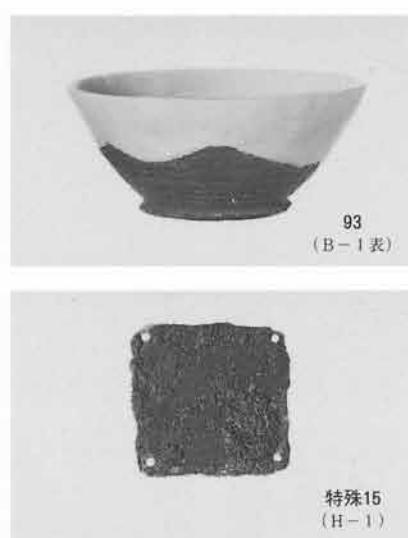
PL. 14



49
(H-19)50
(H-20)51
(H-22)52
(H-22)53
(H-24)54
(H-24)55
(H-27)56
(H-27)57
(H-27)58
(H-27)42
(H-17)48
(H-18)59
(H-27)43
(H-17)44
(H-17)46
(H-17)

PL. 16







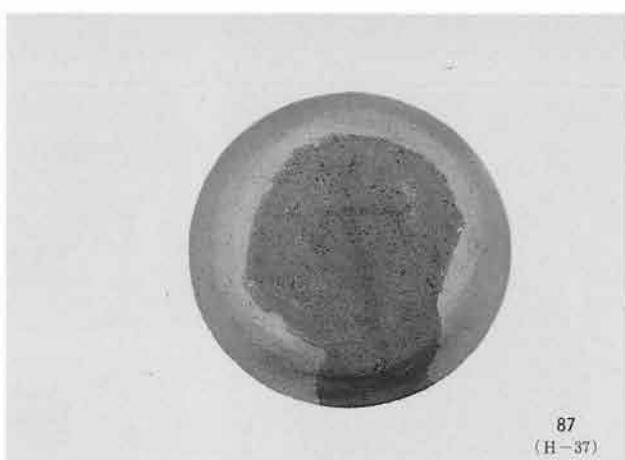
38
(H-17)



47
(H-18)



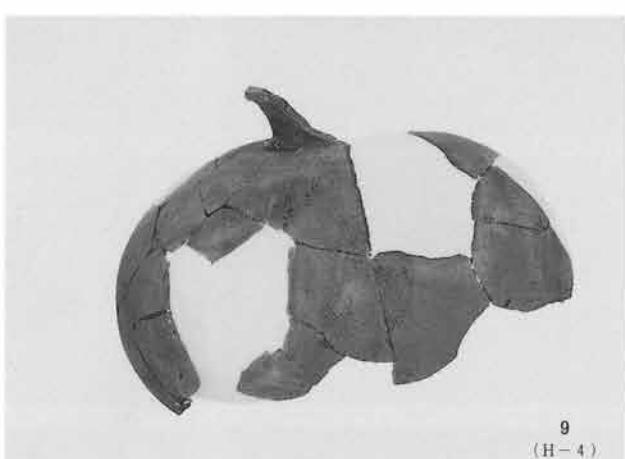
73
(H-33)



87
(H-37)



特殊20
(H-37)



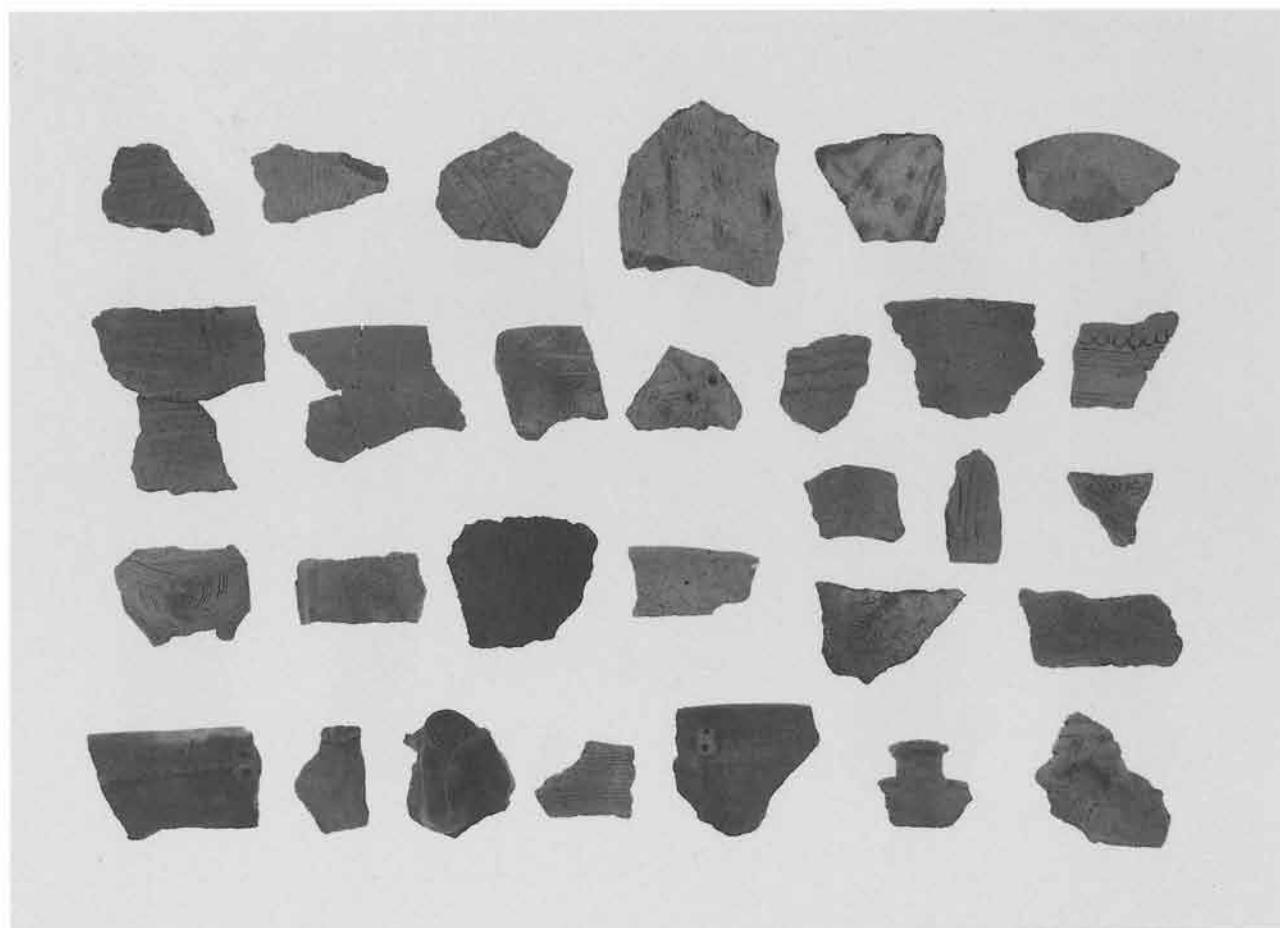
9
(H-4)



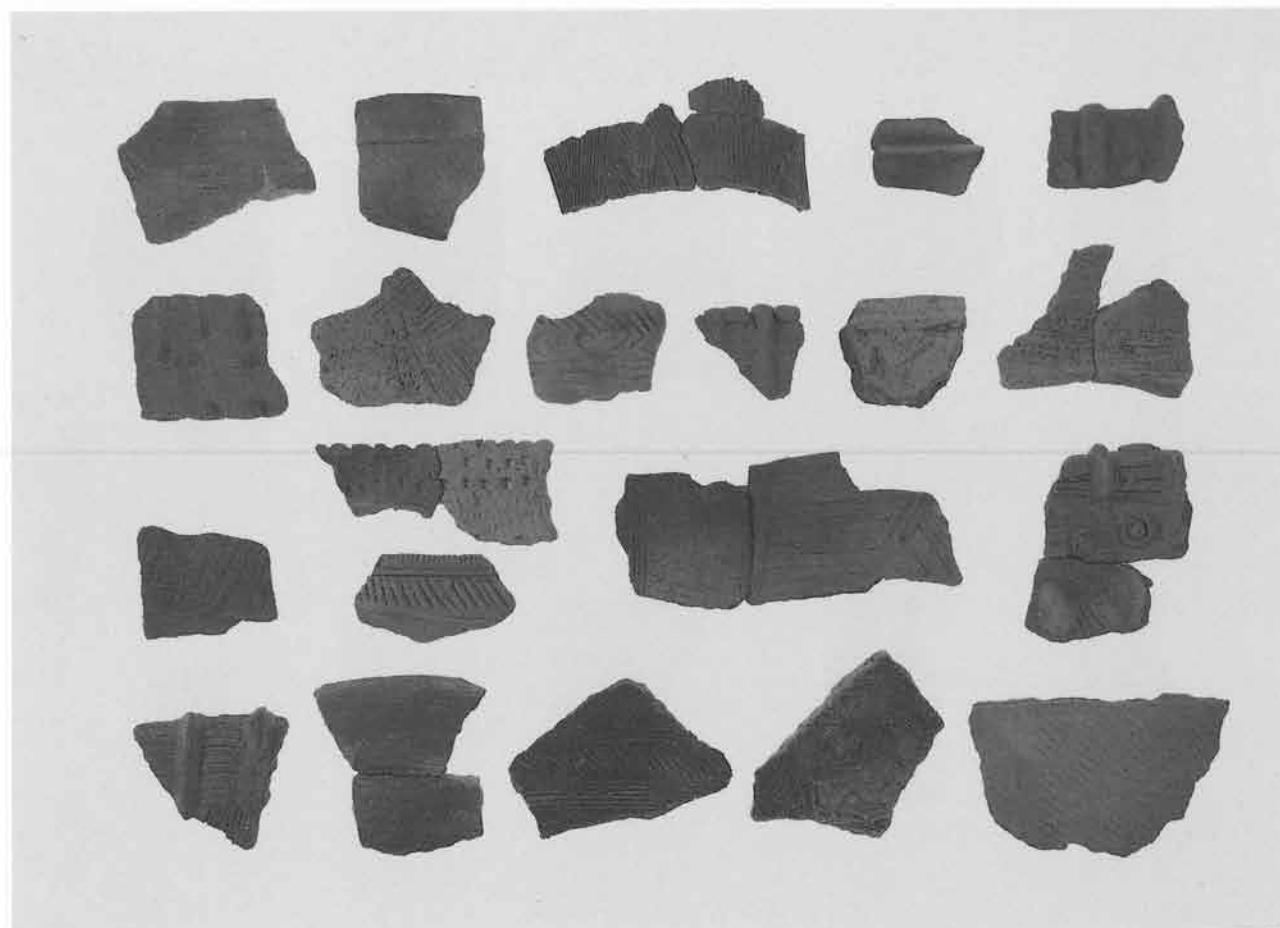
22
(J-1)



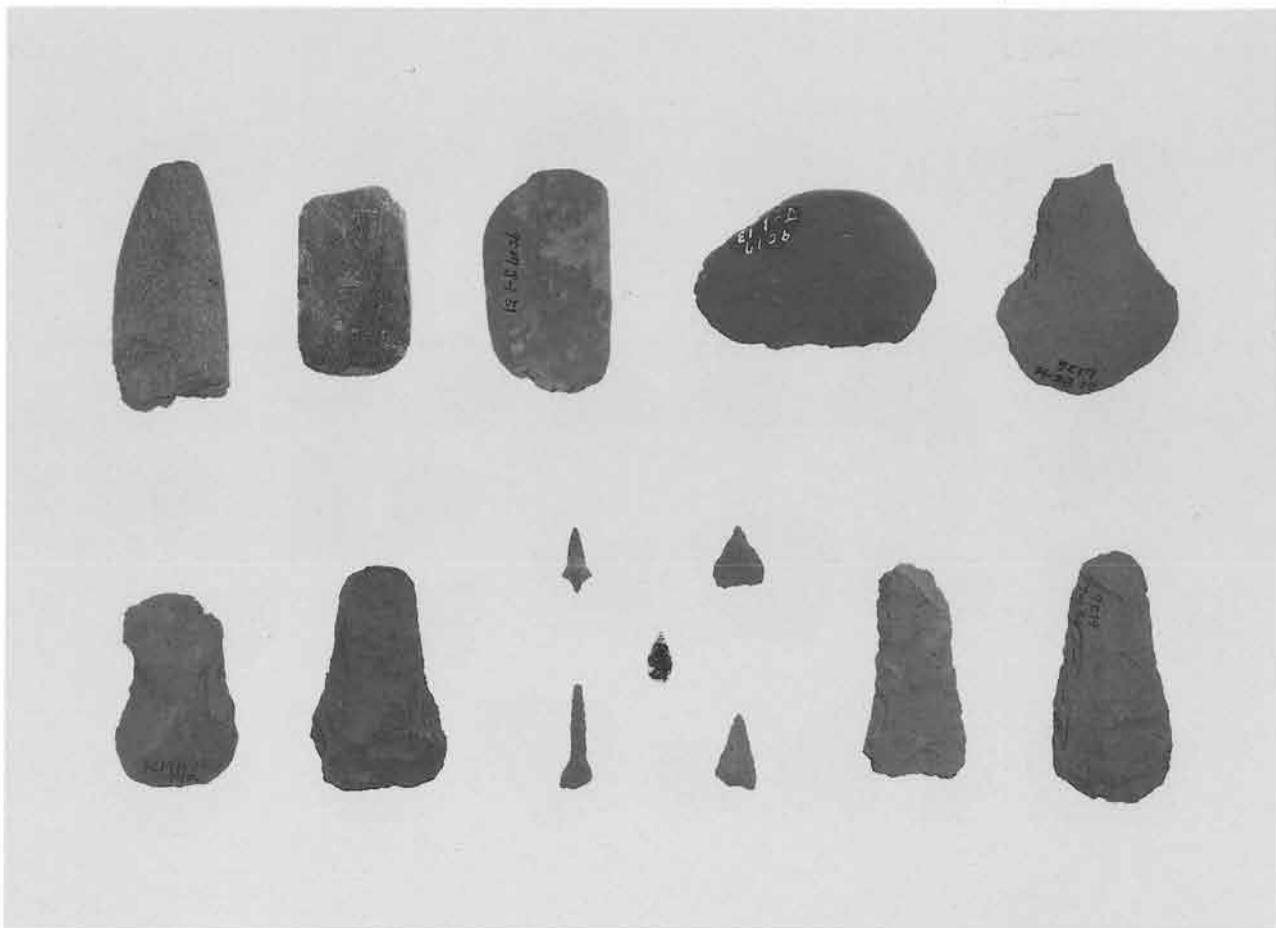
30
(J-2)



1 縄文式土器



2 縄文式土器



1 石器・石製品



2 石器・石製品

抄 錄

フリガナ	トットリフクゾウジイセキ
書名	鳥取福蔵寺遺跡
副書名	鳥取町土地改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	坂口 好孝 滉塩 明男
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団
編集機関所在地	〒371-0007 群馬県前橋市上泉町664-4
発行年月日	西暦1998年3月31日

フリガナ 所収遺跡名	フリガナ 所 在 地	コ ー ド		位 置		調査機関	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	北 緯	東 經			
トットリフクゾウジ 鳥 取 福 蔵 寺	マエバシシットトリマチ 前橋市鳥取町	10201	9C17	36°24'41"	139°06'31"	19971001 19980331	3,500m ²	鳥取町 土地改良事業

所 収 遺 跡 名	種 别	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
鳥 取 福 蔵 寺	集 落 址 他	縄文時代 ～ 中世	住居址 41軒 土 坑 83基 落込み 2基 井戸址 2基 精鍊鍛冶炉 1基 掘立柱 群	縄文式土器、土師器、須恵器、 石器・石製品、鉄器・鉄製品 他	

鳥 取 福 蔵 寺 遺 跡

平成10年3月25日 印 刷

平成10年3月31日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団
前橋市上泉町664-4
TEL 027-231-9531

